

日本への回帰

大学教官有志協議会 編
国民文化研究会

第 9 集



大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会
編

日本への回帰 (第九集)

—第十八回学生青年合宿教室(雲仙)の記録より—

は し が き

中東戦争から派生した、いはゆる石油戦争は、ソビエトのアラブ諸国を通じての、自由諸国へのゆさぶりではないかといふ推測を生むほど、先進工業諸国へ強烈なショックを与へた。われわれの達成した巨大な繁栄は、産油国の一方的決断によって、瞬時に壊滅するやうなバベルの塔に過ぎなかったのだ。一朝有事の際を常時念頭に置いて行動した往時の人々に比して、現代日本人の外交感覚の鈍麻はおほふべくもないのである。

しかし、このやうな可視的な危機とは別に、目に見えぬところで、恐るべき崩壊現象が進行しつつある。昨年七月、総理府青少年対策本部から発表された「世界青年意識調査報告書」は日本の青少年の意識が、世界の青少年の平均的なそれとくらべて、いかに異常で孤立的なものであるかを語る、まことに衝撃的なデータであった。今、そのいくつかを指摘すれば、まづ性悪説を肯定する者は、アメリカ、イギリス、西ドイツがほぼ一六%前後であるのに、その約二倍の三三%であり、社会生活全般への不満度も、アメリカ、西ドイツの約三五%前後に比して、二倍以上の七四%という圧倒的な高率を示してゐる。更に、国家への不信度もいふべき指数も、イギリス五三%、アメリカ四八%に比して日本は八九%、十八歳から二十四歳といふ人生において最も純粋で多感な人たちの、十人中の約九人が国家への不信を表明してゐるとい

ふことになる。日本と同じく、徹底的な敗北を蒙った西ドイツは、わづか一三%といふ低い指数しか示してゐないことを考へると、日本のそれは異常に暗いといふべきであらう。

この暗い指数は、ジャーナリズムと日教組といふ反体制集団によつて、意図的に作り出されたと断じて間違ないであらう。戦後思想の中で「国家」といふ言葉ほど、不当な憎悪と呪咀の対象にされたものはない。国家とは国家権力であり、打倒すべき悪であると断定するコミュニストが、社会主義国家の権力については、口を緘して語らない。あるひはその矛盾を合理化して全人民を代表する権力であるが故に、資本主義国家の権力とは異質であるといふ。しかし、ソビエトにおけるサハロフやソルジェニツィンなどの自由思想家への仮借ない弾圧、林彪の死に象徴される中国の血なまぐさい権力闘争などは、社会主義国家の権力の本質を語つて余りがある。とすれば、戦後の一貫した国家呪咀の風潮は、別の強大な国家権力樹立への意図的な布石といふ他はない。

自明のことながら、国家の独立と安全を、他国の公正と信義にまると委ねるやうな甘えが通用するには、国際政局は余りに苛烈である。札幌地裁は昨年九月七日、長沼ナイキ基地違憲訴訟において、自衛隊は「戦力」であり、戦力の保持を禁じた憲法第九条に違反するといふ判

決を示した。防衛問題は遂に来るべきところに来たといふべきであらう。現憲法の成立事情そのものの曖昧さが、これからも合憲違憲の論争を激化せしめるであらう。しかし、日本海を遊弋するソビエトの艦艇や、タクラマカン沙漠に上る中国の水爆実験の巨大なキノコ雲の存在と、この自衛隊違憲判決との落差に、何の矛盾も感じないやうな人間で日本が充満した時、日本は独立国家として最も重大な防衛の「意志」を喪失したことになるはしないか。

われわれは日本の青年の胸に、国への愛と国への献身といふ、誰に憚ることもない素朴な心情を回復するため、ささやかな努力を続けなければならない。それは一刻の猶予も許されないのである。終りに、講義要旨の掲載をお許しただけでなく、御多忙の中を心をこめて御加筆いただいた木内、村松両先生に深甚の感謝を申し上げる次第である。

昭和四十九年三月

大学教育有志協議会
国民文化研究会

目次

はしがき

一、学問・人生・祖国

- 歴史を蘇らせる力……………福岡県立修猷館高校教諭 小柳陽太郎……………5
革命の危機……………鹿児島大学教授 川井修治……………25
吉田松陰「対策一道」「大義を議す」……………九州大学教授 山口宗之……………51

- 教育と学問との乖離かいりを憂ふ……………国民文化研究会理事長 小田村寅二郎……………75
言霊ことだまの幸さきはふ国の信……………亜細亜大学教授 夜久正雄……………101
現代短歌批判……………福岡教育大学助教授 山田輝彦……………121

一、講義

戦後の第二期が始まった―脱マスコミ的理解が望ましい―……………

- 世界経済調査会理事長 木内信胤……………139

現代の日本と伝統……………文芸評論家 村松 剛……………175

一、青年研究発表

私の心は合宿教室の中でかく定まった……………

戸田建設(株)本社設計部 青山直幸……………207

学問の「きびしさ」と「よろこび」……………

大成建設(株)福岡支店管理部 山口秀範……………215

太平洋上で定めた私の生き方…福岡県立嘉穂高校教諭 小野吉宣……………225

第十八回「合宿教室」のあらまし……………

(附)合宿歌集 専修大学経営学部四年 青砥誠一……………235

あとがき

△国民文化研究会図書目録▽

■ 学問・人生・祖国



歴史を蘇らせる力

小柳陽太郎



ガラスの玉

階級的な見方

全体像の喪失

戦争の問題

歴史を蘇らせる力

ガラスの玉

私は高校の教師をしてをりますが、生徒諸君と話してゐるといつも次のやうな事になってしまふ。

「先生と僕たちの世代では全く経験がちがふ。天皇の問題でも愛国心の問題でも、戦争の経験のあるなしでは、考へ方に大きな違ひが出てくるのは当然でせう。」

かうして子供たちは「戦後」といふ世界の中にすっぱりと収まってしまつてそこから出ようとはしないのです。たしかに私たちと生徒諸君とは経験は違ふ。しかし、経験が違へば、考へ方が違つてくる——そんなことばかり言つてゐて、一体歴史といふものが成り立ち得るのだからか。昭和二十年を境にして、その前後に大きな世代の断絶が生じたことは疑へない事実でせう。しかしその断絶に甘えかかつてゐては歴史は見えてこないのです、問題はその断絶を埋める力、断絶をはねかへして、それ以前の歴史を現代に蘇らせる力、さういふ力によつてはじめて歴史は私達の目の前に姿を現はすにちがひないのです。だが現代はこのやうな、いはば弾撥力とでもいふべきものが著しく衰弱してしまつてゐる。かうして、経験が違へば、或は世代が違へば言葉が通じない、それがあたり前だといふことになつてしまつてゐるやうです。

なぜこの様になつてしまつたか、それは思ふに、戦前は悪、戦後は善といふ考へ方が固定し

てしまったために、人々はもはや戦前の経験を蘇らせる必要を感じなくなってしまうたからではないでせうか。戦後の人々は、戦前の誤りを繰り返さへさないでゐさすれば、それでいいといふことになってしまった。若い人は、自分たちが戦前の汚れを知らないことに誇りをさへもつてゐる。だから戦後の人は戦前に対するアリバイを常に誇示することによって自分の正義感を満足させるといふ実に妙なことになってゐるのが現代の世の中のやうです。

尾崎一雄に「虫のいろいろ」といふ文がある。その中に蚤の話が出てまゐりますが、蚤に芸を仕込むためには、まづガラスの玉に入れておくさうです。ガラスの中では得意の脚で跳ねまはらうとしてもどうにもならない。人間が外から脅すと本能的に跳ねようとするのですが矢張り駄目だ。さうしてゐるうちに蚤には自分の力の及ぶ範囲はガラスの玉の中だけだといふ自覚が生まれてくる。そこで蚤はどんなことがあつても跳ばない様になるのです。さうなつたらしめたもので、そのあとでゆっくり芸を仕込むのださうです。その話を聞いたとき、私は現代の若人たちの住んでゐる世界がまさしくそのガラスの玉の中だといふ様に感じました。世の中はもつと無限に拡がってゐるのにその拡がりに氣付かず、戦後といふガラスの玉の中だけで生きてゐる。そしてそれがすべてだと思つてしまつたために、人々には跳躍力、さきほどの言葉で言へば、断絶を埋める力、歴史を蘇らせる力が失はれてしまつたのではないでせうか。ガラスの玉の中の世界、そこには極めて限定された人生しか存在しない。従つてそこには本当の意味での

人生はないのです。だからそのガラスを打ち砕いて、そのむかふに拡がる無限の世界を自分のものとしなければ私たちに本当の人生は蘇ってはこないのだと言へませう。かうして戦後といふガラスの玉に閉ぢこめられて生きてゐる人には、レジャーを楽しむよろこびはあるかもしれませんが、人生のもつ本当の喜びや悲しみを、全身をもって感じる事が出来なくなつたのではなからうか。私にはそのやうに思はれてならないのです。

ではそのガラスの玉を打ち砕くにはどうすればいいか、それはあらゆる偏見なしに、先人の生きてきた姿をそのままの姿で偲ぶ以外にはありません。ところが現在そのやうな偲び方は、特に教育の世界では完全にといいほど失はれてしまつてゐます。例へば皆さん方が習つてこられた小中学校の歴史の教科書を開いてみると、そこにはさまざまの偏見が支配してゐて、歴史のあるがままの姿をことさらに子供たちの前からかくさうとしてゐるとしか思へないやうな個所が数多く見られるのです。このやうな教科書を通して歴史を見ていけば、本当の歴史の姿が見えてこないのは当然でせう。さういふことで今日は教科書の中からいくつかの問題をとりあげながらお話したいと思ひます。

階級的な見方

教科書に見られる偏見の一つに、歴史は階級的な対立、相剋の中から生まれてきたといふ考

へ方があります。一つの社会が形造られる場合には上下の關係が生まれるのは当然ですが、その場合、上の人は必ず下の人をいじめめるし、下の方は常に反抗する、その間には憎しみしか存在しないのだといふ考へです。現在使はれてゐる教科書はそのやうな見方から人物や様々の事象を評價する。従つて非常にいびつな人間像が往々にして姿を現はすのです。これは何も家永教科書のやうに社会主義的な立場で書かれたものでなく、文部省の検定をちゃんと通つてゐる教科書の中にも、露骨な形でこそないにしても、はっきり存在してゐることを知つていただけなければなりません。

例へば奈良時代の歴史ではどの教科書も、山上憶良の貧窮問答歌をとりあげてをりますが、それはいつも「都の貴族の生活に比べて、農民はこんなに悲惨でした」といふ文脈の中に現はれてくる。都の貴族は天皇を中心とした官僚、閥族の組織といふことになりませうから、これだけを読めば、憶良の歌は当時の天皇制国家に対する一つのレジスタンスの歌であり、憶良は天皇を中心とした国家体制に反感をいだいてゐたといふことになつてしまふ。これを読んだ子供たちは誰しもさう受取るにちがひない。教科書は常にそのやうに編集されてゐるのです。しかし憶良が天皇を中心とした日本の国柄に対してどのやうに考へてゐたかは憶良の歌を少しでも読んで見ればすぐわかることです。例へば父母を養ふことを忘れ妻子を顧ることなく、自ら倍俗先生（俗に倍く人）と称して得意になつてゐる人に与へたといふ「惑へる情を反さしむる

歌」の中で、憶良は次のやうに言ふのです。

「天へ行かば 汝がまにまに 地ならば 大君います この照らす 日月の下は 天雲の
向伏す極み 谷蝮の さ渡る極み 聞し食す 国のまほらぞ」

天に行くならお前が好きならやうに生きるのもよからう。しかしわれわれはこの大地の上でしか生きていけないはずだ。その大地——この現実の国土は遠い地の果てまで天皇がお治めになつていらつしやるすばらしい日本の国ではないか——憶良は天皇を中心とした日本の国柄に対しては、これに反感をいだくどころか非常な誇りをさへ感じてゐた。そのことはこの歌一つを讀んだだけでも疑へない事実でせう。「貧窮問答歌」もさういふ憶良の抱いてゐた国家像、社会像の上に浮べた上で讀んでいかなければならないのです。勿論当時の政治のあり方に対して憶良がきびしい批判をもつてゐたことは当然でせう。貧窮問答歌の最後には、原本では「山上憶良謹上」と書いてあります、その謹んで上つた相手が誰であるかには諸説がありますが、ともかく当時の政府の高官には違ひない。地方官として民衆の苦しみをじかに見て知つてゐた憶良はその状況をつぶさにこの歌に表現して、政府の当局に迫つたのでせう。しかしそれは決して反抗といふ姿勢ではなかつた。一人一人の民衆が天皇を中心とした国家秩序の中に、安定した生活が営めるやうに憶良は心からさう願つたに違ひない。そのやうな憶良がねがつた社会の全体像をこそ教育の場で教へてほしいのです。

さらにもう一つ申し上げておきたいのは憶良の歌に見られる現実精神と、その底に流れてゐる深いかなしみです。すなはち憶良は現実が苦しいからと言って、或は醜いからと言って、それをボンと投げ捨ててしまつて、空想の中に逃避するといふやうな態度は決してとらなかつた。例へば先ほど申しました倍俗先生を教へたとす歌の中で憶良は「父母を 見れば尊し 妻子見れば めぐし愛しうつく 世の中はかくぞ道理ことばり 鶉鳥もちのかかはらしもよ 行方知らねば」と詠んでゐます。たしかに現実が苦しいが、父母や妻子に対する限りない愛情は、丁度もちにくつた鳥のやうに、われわれを現実の家庭生活にむすびつけてはなさないといふのです。さういふ気持を憶良は別のところでも次のやうによんでゐる。

術すべもなく苦しくあれば出で走り去いななと思へど児らにさやりぬ

家庭生活——その象徴としての「子」故に、現実をのがれられない「術なき」——それは憶良の歌の主調音とも言つていいほど数多くの歌の中で繰りかへし繰りかへし述べられてゐるのです。先ほどの貧窮問答歌の最後のところでも、この「術なし」といふ言葉は、「かくばかり術なきものか 世の中の道」といふ言葉ででてゐます。貧窮のどん底にゐながら、しかも現実からはなれられないかなしみ、その深いかなしみがこの「術なきものか」といふ言葉の中にこめられてをり、それが貧窮問答歌に生命を与へてゐることに注意しなければなりません。

この歌は

世の中を憂しと恥しやまと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば

といふ反歌で終るわけですが、この反歌の中にも、このやうなかなしみが一貫して流れてゐる。このかなしみぬぎに、貧窮問答歌を単なる現実呪咀の歌と理解するならば、それは憶良に對するこの上ない冒瀆だと言はなければなりません。勿論そのかなしみを子供に理解させるのは困難でせう。だがそれにしても教科書の編集者自身、そのかなしみが本當にわかつてゐるのか、もしわかつてゐるならば当然それなりの配慮があるはずでせうが、教科書にはその片鱗さへ見られないのです。そしてそこにはただ抵抗の詩人憶良といふ姿だけがある。とすればそこに描かれた憶良の像は階級史観に染め上げられた単なる戯画にすぎないのです。

全体像の喪失

憶良にかぎりませんが、教科書では過去の人物の全体像が扱はれることは実に少い。常に前もって用意された歴史観によつて適当にピックアップされた、部分的な、いびつな像しか出てまゐりません。例へば先程から問題にしてをります天皇の問題にしても、歴史に登場する天皇のお姿はただ権力者としてのそれではないのです。後鳥羽院が討幕の兵をおこされて遂に戦ひ敗れ隠岐に流され給ふた歴史についても、教科書には例へば

「かねてから政権を取り戻す機会をねらつてゐた京都の公家は、源氏が断絶した機会に北条氏を討たうとして、一二二一年に後鳥羽上皇を中心に幕府に不平をもつ武士や寺や社にはたつきかけて兵を挙げた」

と書いてあるだけです。承久の乱が日本の歴史の中に占める重大な意味については今更いふまでもありませんが、ここではそのやうな、国の成り立ちの基本にかかはる問題はすべて捨象されてしまつて、どこにもここにもある、單なる権力闘争といふ面からしかとらへられてゐません。これではどうして日本の歴史の真髓、いはば歴史のいのちとでもいふべきものにふれることが出来ませう。これではその後につづく後醍醐天皇のことも、南北朝の悲劇もそれらにどのやうな意味があるのか、子供たちに全く理解出来ないのも当然でせう。

このやうに言へばそれはお前が天皇を中心にする歴史観に立つてゐるからだと考へる人も多いかと思ひます。しかし問題は決してそのやうなことではない。どちらが中心といふやうなことではなく、私たちは過去の日本人がどういふ氣持で、この歴史的事実に心を痛めて来たか、一切の先入観なしに知らなければいけないと申し上げてゐるのです。自分の恣意で一つの立場からものを見るのではなく、我々の祖先がどういふ氣持で歴史を見てきたか、歴史上の事實を偲んできたか、その偲び方を自らのものとし、祖先の氣持と一緒に、一つの感動を味はなければなりませんまい。

例へば松尾芭蕉は吉野を訪れたときのことを、「野ざらし紀行」の中で次の様に書いてゐます。

「山を登り坂を下るに秋の日既に斜になれば、名ある処々見残して先づ後醍醐帝の御陵を拝む。

御廟年を経てしのぶは何をししのぶ草」

吉野にはずゐぶん有名な所もあるはずでせうが、芭蕉はそれをすべて後にまはしてまづ後醍醐天皇の御廟に詣でるのです。この「まづ」といふ言葉にも心をとめていたのだと思います。そのあとの句の中にも、年古りた御霊屋の屋根に垂れてゐるしのぶ草、そのしのぶ草を見ながら、遠い歴史に思ひをはせてゐる芭蕉の心が痛いほどに感ぜられます。芭蕉の胸の中には、左手に法華経の五の巻をおもちになり、右手には剣をお握りになつたまま、遠く北の都を望みながら、この地に命終られたといふ後醍醐天皇の悲痛な御姿が必ずや描かれてゐるに違ひない。

このやうな国民的心情は、同じ「野ざらし紀行」の中で伊勢の皇太神宮にお詣りした折の次の文にも色濃く表現されてゐます。

「暮て外宮に詣で侍りけるに一の鳥居の陰ほのぐらく、御燈処々に見えて、また上もなき峯の松風身にしむばかりふかき心を起して

みそか月なし千とせの杉を抱^{だく}あらし」

「千とせの杉」といふのは単に杉が千年の月日を経てあるといふだけではなく、悠久の歴史に対する深い憶念の情がこめられてゐますが、「千とせの杉」のそそりたつ森厳な神宮のたたずまひが、折から吹きつけるあらしの中に、身にしみるやうに感じられるといふのです。このときからさらに四年、芭蕉は又伊勢神宮に詣でるのですが、その折に芭蕉は次の「伊勢参宮」といふ一文を書きとどめてゐます。

「貞享五とせ如月^{きさらぎ}の末、伊勢に詣づ、此御前のつちを踏む事、今五度に及び侍りぬ。更にとしのひとつも老行ままに、かしこきおほんひかりもたふとさも、猶思ひまさされる心地して、西行のかたじけなさにとよみけん涙の跡もなつかしければ、扇うちしき、砂^{いさご}にかしらかたぶけながら

何の木の花とは知らず匂ひ哉

武陵 芭蕉桃青拜

「此御前のつちを踏む事、今五度に及び侍りぬ」といふ言葉の中にも、自分のふるさとに帰っていくやうに伊勢に詣でる作者の心がにじみ出てゐると思はれます。西行の歌はいふまでもなく「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」、その歌を偲びながら、「涙の跡もなつかしければ」と歴史の流れに心をよせつつ「扇うちしき、砂にかしらかたぶけ」て次の句をよむのです。「何の木の花とは知らず匂ひ哉」——これもやはり西行の「何

事のおはしますかは知らねども」に、ほのかな匂ひをただよはせる花をそへて、俳諧の世界に導いてゐるのです。そして武陵―すなはち武蔵の国江戸から詣でてきた芭蕉、そのあとにそへられた「拜」といふことばの中にも、単なる挨拶の句といふ域を越えた芭蕉のつつしみ深いおもひがにじみ出てゐるやうです。

ここにはつつましく伊勢の大宮の前に祈りをささげる芭蕉の姿がありますが、この姿こそ日本人すべてが生きてきたありのままの姿ではないか。芭蕉が何か特別の思想をもつてゐたわけではない。私たち日本民族はすべてがそのやうな清らかな世界の中に生きてきたのです。歴史を蘇らせるといふことは祖先が生きてきたその世界の中に私達自身の身も心も一度ひたしてみることではないか。だが人々はその世界とは何の関係もなく、「文学者芭蕉」といふ姿だけをとり上げて、いたづらに芭蕉の句を鑑賞しようとする。しかし本当に芭蕉に迫らうとするならば蕉の生きた全人生を憶念し、その中に我が身をひたす以外に道はないではないか。伊勢神宮に対する敬虔なおもひも知らず、後醍醐天皇に対しても新らしい歴史解釈をふりまはすだけで、一体どうして芭蕉の世界に近づくことが出来ませうか。憶良にしても芭蕉にしても、私たちの胸に先人の姿を蘇らしめるためには、それだけの心の用意がととのへられなければいけないのです。天皇の問題にしても、そのやうにととのへられた心の中にはじめて、その正しい姿を見ることが出来るのではないでせうか。

戦争の問題

歴史を支配してゐる偏見のうち、これまで階級的な見方、全体像の喪失といふことについて申し上げてまゐりましたが、もう一つ戦争の問題があります。戦後、日本では戦争を二度と繰り返してはならぬといふことが、あらゆる問題の中心に据ゑられてきたため、過去の一切の戦争はすべて許すべからざる罪悪であつたといふ烙印を押され、さういふ観点からだけ歴史を見るやうに徹底的に訓練されてきたのです。だがさういうことで果して歴史が見えてくるか。もしも戦争といふ手段に訴へたことはすべて悪かつたといふことになれば、日清戦争から大東亜戦争まで、戦争にあけくれた明治以後の歴史はすべて罪悪の歴史といふことになってしまふ。だがそれで日本の現代が直面した深刻な悲劇を説明し得るか否か、答へは明らかに否でありませう。

例へば真珠湾攻撃についてインドのパール判事は、あの様な条件に追ひこまれたなら例へばナコのごとき国であらうと剣をとって立ち上つたにちがひないと東京裁判で証言した。一方ソ連は原爆を投下されて將に瀕死の状況にあつた日本に対して怒濤のごとくに進撃を開始し、日本が降伏したあとも攻撃の手をゆるめず満洲、千島を席捲、降伏後五日目にして、やうやく戦闘を停止したのですが、真珠湾爆撃とソ連の参戦と、その二つを一緒にして戦争は許せないと

言ってみてもそれに一体何の意味がありません。

この場合もやはり前から申し上げてある通り、一つの見方を先に立てるのではなく、その時代を生きた人の身になって一緒に歴史を生きてゆくといふことが必要になってまいります。その時代の全体像を私たちの中に蘇らせる努力こそ何にもまして大切であって、自らを高みに置いて過去を見下し、自分の好みにあつた事象だけをとりあげ、それを組み合はせて歴史を解釈し、歴史を裁いても何の意味もなさないのです。しかし特に教育の場では戦争に対しては頭から之を否定するといふ立場に立つて歴史を教へようとする。例へば戦ひの先頭に立った人々の行為は、それがいかに崇高な人間精神の発露であらうとも、戦争讚美につながるといふ理由で、一切子供たちの目にふれないやうにカットされてしまふし、戦争を前にした国民的な緊張の場面も、戦ひに勝利を収めたときの湧き上る感動の場面も、一切が子供たちには伝へられない。かうして日本海大海戦の勝利のよろこびも真珠湾爆撃の時の国民的感激も一切が歴史の教科書から締め出されてしまったのです。

ここに日清戦争に従軍すべく広島島の宇品の港を出で立つ折の国木田独歩の文章があります。独歩は丁度日清戦争が勃発した日に大分県の佐伯をはなれて東京に帰るのですが、その後国民新聞の記者として従軍、現地状況を弟に与へる手紙といふ形で新聞に発表する。題して「愛弟通信」といふのですが、その第一便が次の文なのです。

「波濤を蹴って遠征にのぼる、第一に感ずるは『吾が国民』の思ひなり、『同胞の念』なり、余は一個の弟あり、今亦国民新聞社に勤む。さんぬる十三日、相携へて京橋なる新聞社に出勤せり。

弟余を顧みて曰く、秀吉の時代、義経の時、或は又明治の初年に逢遇せざりしを恨みしは一、二年前の事なりしも、今にしては実に当代現今に生れたりしを喜ぶ、後世の少年吾等を羨むこと幾許ぞと。余、甚だ然りと答へ、ともに奮励して、大いに為すならんことを誓ひき。」

ここで弟が独歩に語った言葉、そしてこれに対する独歩の答への中には、当時の国民的な緊張と感激がさながらに表現され、このやうな時代に生をうけたよろこびが、うてばひびくやうな会話の中にあふれてゐるのが感じられます。次の文章は祖国をはなれて、大陸にむかふ軍艦の中での感慨です。

「○○日、○○丸の吹煙室に某少佐と語り、東方の形勢を論ずるの際、吾が眼、端なく窓外千里の波濤に転じて水天一髪の光に注ぎたる刹那、こみあげ来るは慷慨の涙と、吾が同胞四千萬よと叫ぶ、天外遊子の懐郷の涙なりき。」

遠く水平線の彼方に見ゆる光に目を注いだ刹那、あふれてきた独歩の涙は、単なる感傷の涙ではなかつたはずです。現に、その前に「東方の形勢を論ずるの際」といふ言葉がある。ロシアをはじめとして雪崩をうって押しよせてくる西欧の帝国主義的侵略の牙から、いかにして東洋

の民族を守るか、朝鮮も支那もすべて眠り呆けてゐるこのとき、日本に与へられた使命の重さは比類を絶したものがあつた。その重さにいま全力をもつて耐へてゐる日本民族、それを思ふとき独歩の胸ははげしく波打つのです。「吾が同胞四千万よと叫ぶ。天外遊子の涙」は、その国民的緊張を除いては絶対に考へられない涙だつた筈です。だが先程の芭蕉の場合と同じく、文学者独歩の姿は教科書に登場する。しかしそこには独歩をして独歩たらしめてゐた、この痛烈な同胞感はずつぱりとぬけ落ちてしまつてゐる。それどころか日清戦争は朝鮮の利権をめぐる日本と清国の争ひだといふのが一般の空気になつてしまつてゐるのです。教科書にもそのやうに説明されてゐるし、御丁寧にもどの教科書にもフランスの漫画家ビゴの諷刺画が掲載されてゐる。その漫画は朝鮮といふ魚を釣らうとして日本と清国が釣糸をたれてゐる。そのうしろで漁夫の利を得ようとロシアが狙つてゐるのです。

当時の東亜の情勢をフランスの漫画家がどう解釈しようと勝手だが、それをどうしてこともあらうに、日本のあらゆる歴史教科書の中に掲げなければいけないのでせうか。独歩の「涙」を教へようとはしないで、このふざけた漫画で日本の旧悪をあげかうとする、こんな出鱈目な教育をしてゐる国が一体世界のどこにあるでせうか。思へば思ふほど腸が煮えるやうなおもひがいたします。

いま独歩の例をあげましたが、このやうな感激は独歩だけには限らない。独歩が従軍した翌

年、明治三十八年四月、正岡子規もまた次の文を残して宇品の港をあとにするのです。

「此大戦争の結果は已に今日に於て我日本帝国の上に幾多の光榮を添へ、幾多の名聲を博し、今迄は白雲漠々の間に埋没せられたりと思惟せし、欧米人が、思はぬ空に富嶽の高きを仰ぐに至りたり。此の名譽を購ひ得たる者は何ぞ、神州武士の紅血と、帝国臣民の赤心とに外ならず。而して、吾人身を筆硯に委する者、特に社会の耳目となり、国民之氣の幾分を鼓舞せざして可ならんや。従軍の許可を得て命を広島に待つこと幾日、漸く〇〇丸に投じて〇〇を発す」。

この時はすでに日本の勝利は確定的になつてゐたので、このやうな表現になつてゐますが、この文に見える国民的感激もやはり、独歩と同じ世界のものでせう。だが今の子供たちはこのやうな世界は全く知らされないで育つてゆく。もしそのやうなことを知らせれば戦争の讚美につながるから——。だがそれで一体いいのか。戦争反対は結構だが、そのやうな理由で、歴史の全局面から、ことさらに一つの動きをカットするといふやうなことが許されるでせうか。勿論私たちは戦争の惨禍から人類を守るために、さまざまに心を砕かねばなりません。しかしそのためには過去に行はれた戦争に対する正しい理解が用意されてゐなければなりません。歴史といふ鏡に自らの姿を正しく映し得たとき、私たちには未来に生きてゆく力を自身のものにするものが出来るのであつて、いかに戦争に反対だからと言つて、戦争の歴史を歪曲して教へることは決して許されないし、それでは子供たちに未来に生きてゆく力を与へることは出来ないの

です。過去を観念によって裁断した者の目にうつる未来図は、やはり一片の観念にすぎないことを知らなければなりません。

歴史を蘇らせる力

歴史上の人物と一緒に生きてゆく、その心得を福田恆存氏は「乃木將軍と旅順攻略戦」といふ卓れた評論の中で、「見えぬ目」を持たねばならないといふ言葉で述べてをられます。

「歴史家が最も自戒せねばならぬ事は過去に対する現在の優位である。吾々は二つの道を同時に辿る事は出来ない。とすれば、現在に集中する一本の道を現在から見遙かし、ああすれば良かった。かうすれば良かったと論じる位、愚かな事は無い。殊に戦史ともなれば、人々はとかくさういふ誘惑に駆られる。事実、何人かの人間には容易な勝利の道が見えてゐたかも知れぬ。が、それも結果の目から見ての事である。日本海大海戦におけるT字戦法も失敗すれば東郷元帥、秋山參謀愚將論になるであらう。が、当事者はすべて博打をうってゐたのである。丁と出るか半と出るか一寸先は闇であつた。それを現在の『見える目』で裁いてはならぬ。歴史家は当事者と同じ『見えぬ目』を先づ持たなければならぬ。」

歴史が動いてゆくほんの一瞬の心の動き、それを私たちは心の中に蘇らせなければ歴史はわからない。一寸先は闇、その闇の中をたどりながら日本はここまで生きてきた。しかし結局は

戦ひ敗れてしまった。だが敗れたからと言って、過去をそのやうな目で、初めから敗けることはわかつてゐるではないかといふやうに歴史を見、歴史を裁くことほど傲慢な態度はないと思ふのです。「見えぬ目」といふことの真義を思ひみるべきであります。

いろいろ申し上げて参りましたが、結局は一番最初に申しましたやうに戦後といふガラスの玉を打ちくたくといふこと、そして人生を部分的にはなくその全体を把握して生きていたいただきたいと思ふのです。私は戦後が誤つてゐたから戦前にかへれと申しあげてゐるのではない。こちらの立場が間違つてゐるからもう一つの立場に立てと言つてゐるのでもないのである。戦前とか戦後とか、一つの立場とか、さういふ一切の限定を排除して、過去の日本人が生きてきたすべての体験をわれわれの中に蘇らせなければいけない。そこに本当の歴史の面白さが読みとられるはずだと申しあげてゐるのです。歴史の面白さ——それは筋の面白さで人々をひきつける歴史小説の面白さとはちがふ。もっと地味でせうが、もっと重い、もっと手応へのある、人生そのもののもつ面白さと言つていいのです。吉田松陰先生の「士規七則」のはじめに

「冊子を披播すれば嘉言躍々として人に迫る」

といふ言葉がありますが、ガラスの玉を破つて、この「躍々として人に迫る」言葉を皆様の中の心の中にしつかりつけとめていただきたい。そこにはじめて歴史は私達の心に蘇ってくるはずで

(福岡県立修猷館高校教諭)

革命の危機

川井修治



革命は到来するか？

革命の進行過程

革命の前兆——「知識人の離反」と「為政者側の臆病と拙劣」

革命の過激化——「テロと道徳の支配」

日共の擬態

革命防止のために

革命は到来するか？

今日の雲仙の空は、多少夏雲はあるけれども青空が拡がってゐて、まづ爽やかなお天気と言へるでせう。しかし私には、日本の上空は目に見えない悪気流に覆はれてゐる、といふ気がしてなりません。その悪気流とは何か。それは、題目に示したやうに「革命の危機」であるとは思ひます。言ひ換へれば、日本はこのまま共産革命への道をつ走るか、それとも瀬戸際でもちこたへて、自ら大刷新を敢行することにより正道にたち還るか、の岐路に立たされてゐるといふことです。ここ一・二年間の情勢を見ると、この暗い予感がいよいよ本物になって来たのではないか、と思はせられるこの頃です。

しかし、このやうな見通しが正しいか、否か、については、人によって異論があることであらう。皆さんの中にも「まさかこの日本に革命など起りはすまい」と考へられる方があるかも知れません。私の経験から言へば、この間ある現職教師達の集会で私の話に対して、「日本には革命など起る筈はない」と、猛然と反論して来た人——この人は私達の同志の一人なのですが——がありました。その論拠はかうなのです。第一に、日本の国民の大多数は共産革命などを欲してはゐない。自分の周囲の日教組の教師達を見ても、多くは利害や習慣から日教組にくっついてゐるだけで、本当に日本を革命に持ち込まうと考へてゐる者は極少数でしかない。第二

に、革命の前提となるべき生活不安や社会的混乱は起つてゐない。さうではなくて、経済は繁栄し、国民はむしろレジャーの洪水に溺れてゐるのが実情ではないか。要するに、日本に革命が起るなどといふのは一種の杞憂であつて、実際に革命が起るための前提条件が欠けてゐると言ふのです。

日本に共産革命を起させたくないといふ一心から、比較的眞面目な人達の間にもこのやうな意見のあることは、私もよく承知してゐます。しかし私をして言はしむれば、このやうな観方には、ある種の先入主に基づく重大な事実誤認があるのです。その先入主とは、第一に「革命は多数の国民の支持によつて行はれるものだ」といふこと、第二に「革命は社会的矛盾から必然的に発生するものだ」といふことで、これらはいづれも革命史の事実についてつき詰めて行くと、間違つた認識であることが明かになるのです。

最初の「革命は多数の国民の支持によつて行はれる」といふ考へ方は、逆に言へば、「多数の国民の支持がなければ革命など起る筈はない」といふ、前記の反論の第一の部分の論拠となるテーゼです。ところが革命の歴史の示すところによれば、多数の国民の支持によつて行はれた革命などといふものは、どこにもあり得ないのです。革命を企てるほどの人物ならばこのことは夙くに見通してをり、不特定多数の国民の支持などをあてにはしません。例えば兇猛なテロによつて一世を震撼させた革命家集団「ナロードニキ」の指導者であつたP・トカーチエフ

は、「革命的少数者による権力の奪取こそが、革命の最大の眼目である」と言つてゐます。「国民多数の支持を得るのが革命の眼目である」などとは言つてゐません。この考へ方を継承発展させて、ロシア革命の実現に成功したのが、かのレーニンであつたのです。その証拠は、彼が、「何を為すべきか？」（一九〇二年）といふ著書の中で展開した革命戦略、つまり「職業革命家の戦略」が、明かに提供してくれます。レーニンは党員の多寡など問題にしません。たとへ少数でも、全生涯を革命に捧げるといふ気魄を持ったプロの革命家、この精鋭の団を率いて革命の条件を自ら創り出すのだ、と言つてゐるのです。そしてこの言葉通り、一九一七年の一月六日を機として武装蜂起し——当時ボルシェビキは二四万程度、一億六千万の全人口に比すれば九牛の一毛でしかない——革命の創出に成功したのでした。

要するに、多数の国民の支持が有効なのは、多数決の民主主義が健全に作用してゐる平和時のダイナミクスなのです。政権をめぐつて右せんか、左せんかといふ革命時には、往々にして逆のダイナミクスが働くのです。このやうな時には、漠然たる多数を当にするよりも、決断と実行力に富む少数精鋭の突進力の方が、直接の効果をもたらすのが普通です。勿論、国民多数の支持を時の政府が有効に組織し、政治の前面に押し出すことができるならば、話は別です。例えばフランスのポンドゥウ大統領が選挙の直前に、テレビで全国民に「自由か、共産か」の選択を迫り——これは故ドゴール大統領がよくやった手——、左翼を制圧したのはその好例で

す。韓国の朴大統領が国民多数の支持を背景に、電光石火の如く憲法改正をやつてのけたのも別の型の実例だと言へるでせう。しかし日本の現状はどうでせうか。肝心の非常大権すら現憲法からは除外されてゐます。革命動乱まさに至らんとする時、これ程弱体な国はほかにないのではないでせうか。従つて、国民多数が共産革命を支持してゐないといふ現実は、それ自体まことに結構なことだと思ふけれども、これが革命防止の最終的保障にはどうしてもなり得ない——少くとも今の日本では——、と私には思はれるのです。

第二の点、「革命は社会的矛盾から必然的に発生するものだ」といふ先入主は、これを裏返しに言へば「生活困窮や社会不安がない以上、革命など起る筈はない」といふ主張につながるものです。かういふ主張の底には、当人は気づかないかも知れませんが、マルクス主義の考へ方が横たはつてゐます。すなわちマルクス主義の唯物史観によると、革命といふものは人間が思ひ通りに起せるものではなく、前時代の社会的矛盾（失業・恐慌・貧窮等）が昂じて行つていよいよ堪へ切れなくなつた時自然必然的に発生する、といふことになります。だから、例へば国民の多くが貧窮に喘いでゐるといふやうな前提条件がなければ、とても革命など起りはしないといふ観測が出て来るわけなのです。

けれども革命の歴史を見てみますと、事實はこんなにならなく理窟通りに行くものではありません。例へばフランス革命ですが、この革命の直前期はアンシャン・レジームとよばれ、貴族



や僧侶は贅沢三昧の暮しをしてゐる半面、大部分の民衆は貧窮のドン底にあつたといふ印象を皆さんは持ちながらも知れません。しかしこれは事実に反します。実際の経済状態から言へば、この時期のフランスは隆々たる発展の過程にあり、周囲の国々——イギリスは例外——を圧するに足る富強な国でした。有効な重商主義政策により、生産量や貿易量はとみに増大し、人口増加率もまた急激に上昇中でした。ただ分配の不平等はあつたので、その為に農村の貧しい小作人層に生活の困窮が見られます。ところがどうでせう。フランス革命の主導勢力は、これらの貧しい小作人層ではなくて都市の中産市民層、つまり経済的活力においては尤に特権身分を凌駕しつつあつた新興ブルジョア階級でした。生活の困窮が革命の原因になるといふことは、スローガンの意味では理解できませんが、実際に革命を起し、これを導いて行く階層は、いつの場合でも次の

時代を担ふに足る實力を持った強力な階層であつたのです。

以上のことはロシア革命の場合においてもあてはまることなのですが、ここでは時間の関係もあつて詳説は省きます。そこで言へることは、先程来言及してきたやうな革命についての通り一ぺんの理解を先入主として、現状では革命など起り得ないと結論する態度は避けてもらひたい、といふことです。一体、革命とはすぐれて人間的な行為なのです。物質的メカニズムの上に立つ自然現象ではないのです。むしろ人間の心理的要因が重視されるべきです。マルクシスト流に言へば、革命の客観的条件（社会状勢）よりも主観的条件（革命を意図する側の意志力や組織力）に注目すべし、といふことです。何故なら、いかに革命に有利な社会状勢（例へば生活上の貧困や政治上の失策）が存在したとしても、それだけで革命が勃発するものではない。そのやうな素地の上に、革命を宣伝し大衆を動員し、一定の戦略戦術の上に、その力を政權奪取へと振り向ける革命者側の努力がなければ、革命は発生し得ないからです。

さういふ見地に立つて日本の現状を見てみると、戦後二十余年の思想的混迷の累積の結果、革命の要件はかなりの程度成熟してゐると、私には思はれてなりません。

革命の進行過程

それでは問題を一つ先に進めて、もし革命が勃発したとして、爾後それはどのやうな経過を

迎るであらうか、といふ点を考察してみませう。とは言つても、日本では未だ革命が起つてゐないから、それ以後のことは厳密に言えば予想の域を出ません。だが、将来の予想の手がかりになるものならば提出することができます。それが歴史の役割です。バイロンも言ふやうに、「将来に関する予言の最善なるものは過去である」からです。ここで革命の歴史に鑑みて、その将来の進行過程を考察してみることは、決して意味のないことではないと思ひます。

そこで取り上げたいと思ふのは、C・ブリントンの『革命の解剖』といふ書物です。著者はハーヴァード大学の政治思想史・革命史専門の学者で、内容は題名の示すごとく、過去の四つの代表的な革命（イギリス・アメリカ・フランス・ロシア）をとり上げて、恰も臨床医師の手法をもつてその病理を追求した、甚だ興味ある書物といふことができます。私が最初にこの本を知つたのは、林健太郎先生の御紹介によつてで、それ以来私の思索に少からざる影響を与へてくれた本です。唯残念なことは、発行所である岩波書店が今ではこの本を絶版にしてをり、古本屋でしか手に入らないことです。絶版にしてもいいやうな本は他に沢山あるのに、どうしてかういふ貴重な本を……と訝しく思ふことです。

(一) 革命の前兆——「知識人の離反」と「為政者側の臆病と拙劣」

さて、この『革命の解剖』によれば、革命が起るためにはまずその一〜二世代前から、「革

命の前兆」とも言ふべき種々の先行現象が起り始める。それは前にも一寸触れた経済上の窮迫とか政治上の失策とか、或ひはまた外交上の葛藤などであるが、ブリンントン氏が強調し私も注目するのは、国民の心理、特に知的指導層の気持が体制側から離れてしまふことです。ブリントンはこの現象を「知識人の離反」と呼び、次のやうに説明してゐます。

「一八世紀末のフランスの……サロンやクラブでのおしゃべりを如実に知ろうとするならば現存制度に対する不平、批判のコーラスを発見するであらうし、また、十全の政治を実現しようとする『自然』の単純なプランへの探求を見出すであらう。……一九世紀末および二〇世紀初期のロシアの知識人の生活を瞥見しただけでも明白なことは、当時において著作したり、教えたり、説教したりすることは、政府の非を鳴らすことに外ならなかった。」と。ここで「『自然』の単純なプラン」といふのは、当時の流行哲学であったルソーの「自然状態」、すなはち自由と平等が両立する原始の自然状態に還るために、一切の人為の歴史的制度や習慣を断滅すべしといふ過激な主張を意味します。いづれにしても、知識人の間にこのやうな反体制的気風が横溢してゐたことが、革命の重大な兆候であつたと言ふのです。

しかしこのやうな知識人の反体制的気風が、必ずしも正当であつたといふわけではありません。ブリントンは若干皮肉気味に、次のやうにつけ加へてゐます。「彼ら知識人は、責任を負うやうな行動をした経験がないために、新しい行動というものが、通常いかに可能性が少ない

かということ、又は効果が少ないものであるかということを知らないのである。」と。つまり知識人特有の特性として、実務の経験がないから現実の複雑さを知らず、えてして観念的な空理空論をもてあそぶきらひのあることを突いたもので、このことは我国においても『進歩的文化人』の言動に幾つも類例を見ることができます。

次にこのやうな喧しい反体制的な動きに対し、時の為政者側がどう対応したかが問題ですが無論種々の対策を講じようとするのです。しかし革命直前期の政府は多かれ少かれ綱紀弛緩し威信を失つてゐるので、どうしても国民の信頼を回復するには至らない。とどのつまり実力を行使して抑圧に出なければならなくなるのですが、その実力行使がまたとなく拙劣なので、ブリントンの言を借りると「政治権力を掌握する支配階級の人々が、ついに実力を行使するに至つた時、その行使の仕方は散発的であり、無能であつた。」といふことになり、これがこの時期の政府に殆んど法則的にあてはまると言ふのです。

例へばフランス革命の発端は、パリのバスチーユ牢獄の襲撃にあつたと言はれてゐますが、その襲撃の発端はまたその二日前、パレ・ロワイヤルに蟄集してゐた群衆が「ネッケル罷免」の情報に昂奮して街頭にとび出し、パトロール中の竜騎兵一箇中隊とはからずも衝突した、といふ突発事件に発します。この衝突で竜騎兵の馬蹄にかけられて、群衆の中の二人の市民が負傷したことから、「すは、血が流された!!」といふ叫びが口から口に伝へられ、パリ全市を挙

げての大騒ぎになったのでした。もしこの時に周到な規制が行はれてゐたなら、元來が他愛ない街頭騒動だったのですから、いきなりあのやうな大騒ぎに発展することはなかつたでせう。ところが、当時シャン・ド・マルスに宿営してゐた本隊の司令官ベザンバール將軍は決断を欠き、部隊の出動を躊躇したことから重要な数刻を逸したのでした（夜に入つてやうやく部隊を出動させたが、この時には既にパリ全市が狂乱状態に入つてをり、手がつけられなかつた）。

ロシア革命の場合は一層典型的です。一九一七年三月七日。この日は国際婦人デーに當るので、首都ペトログラードで女工さん達が恒例の街頭デモに出かけたのが事の始りです。このデモそれ自体は別段革命を目ざしたものではありません、「夫を（戦場から）返してくれ！！パンの配給を！！」といふ生活防衛のための本能的な要求を掲げたものに過ぎません。ところが第一次世界大戦に足を踏み入れてから四年目のロシア、特に都市部では、生活の逼迫に対する不平と厭戦感情が渦まいてゐたため、このデモは一日で終るところか次の日も、また次の日も、拡大して反復され、「専制政府打倒」といふ革命的スローガンも加へられて一層過激化して行つたのです。首都の治安を担当したのは地区軍司令官ハバロフ將軍ですが、この人物がまた老齡で、優柔不断の塊りでした。やうやく鎮圧出動を命じたのが十日になつてからで、このため死活的な三日間が空費されたことになります。やつと重い腰を挙げて出動した車隊は、既に市中の空気に感染してをり、はかばかしい鎮圧行動に出られない。コサツク兵も無力です。かうして三月

十一日夜から二十日の朝にかけて、首都駐屯の軍隊の一部が革命側に移るに及んで、勢ひは急湍の如く革命側の勝利に傾いたのでした。

このやうに革命勃発時においては、政治上・経済上・社会上のありとあらゆる不平不満が、喧喧囂囂として持ち出されます。しかしその不平不満が新聞ダネになつたり、ある種のデモに表明されたりしてゐる程度では、未だ真面目の革命とは言へません。それが権力に対して直接攻撃を加へて来た時、もつと端的に言へば、武力の掌握に立ち上つた時、革命は本格的に開始されたと言へるのです。革命の成否は、実に武力を手に入れるか、手に入れないか、にかかつてゐるのであり、観念的な歴史家が言ふやうに「自由」だの、「平等」だのといふやうな理念の勝利などではさらさらありません。そして多くの場合、旧支配者側は初動先制に失敗することにより、武力上の優位を失つてしまひます。かうなると後は簡単です。綱引きに引き負けた組のやうに、ずるずると引きずられてしまつて、つひには一切の支配権を放棄させられてしまふのです。今の日本は果してどうでせうか。今はまだ真面目の革命勃発期にまで至つてゐないのは、せめてものしあはせですが、武力の発動に弱いと見られる節々が多くの場合に看取されますね。新左翼のやうな目に見える暴力犯は取りおさへられますが、「スト権奪回のスト」といふやうな法理上成り立たない暴走を敢てする組織勢力に対しては、まるで無力ですね。破防法はあつても、体制破壊を目ざしてゐるに違ひない共産党に対しては、全くおこまひなしで

す。久しく泰平に狎れ、国の権力発動に対して必要以上に警戒的な世論の動向からすれば、万
一の場合に有効な武力の運用ができるかどうか、甚だ心もとない次第です。「最後には自衛隊
があるさ」と高を括る人もありますが、いよいよとなつた時に自衛隊が充分に力を発揮できる
やうな状況にあるかどうかは、大いに疑問だと言はねばなりません。

〔二〕 革命の過激化——「テロと道德の支配」

ところで旧政府が倒れて政権が革命派に移るといふことは、革命の終りではなくて、むしろ
革命の始まりを意味します。その後の事態は過激化の一途を辿ることになります。ブリントン
氏はこのあたりの推移を鮮やかに分析してゐますが、面白いことに、最初に政権をリードする
のは、同じ革命派の中でも比較的穏和な一派——フランス革命の時のフェーイヤン党、ロシア
革命の時のケレンスキーらの臨時政府——なのです。ところが状勢の悪化、窮迫と混乱の増大
は、とてもこの常識的な意味での民主的な穏和派の手に負へなくなつて来ます。さうなると、
より過激な一派——フランス革命のジャコバン党、ロシア革命のボルシェヴィキ——が極端な
スローガンを掲げて混乱の増大を煽り、それによつて穏和派政府の威信を傷つけつつ、自派勢
力の拡大を図る。両派の激突は通常第二革命の形で現れるが、この場合勝を制するのは、より
戦闘的で陰謀的な過激派であるのが普通です。かうして事態は、最終的には過激派の革命的独

裁をもって局を結ぶわけですが、この革命的独裁期の様相をブリントンは独特の用語法をもって「テロと道徳の支配」と表現するのです。

つまりブリントンによれば、革命的独裁は二つの顔、一つは血なま臭いテロリズムの顔、もう一つは理想主義的な道徳の顔を持つてゐるといふ。実際にロベスピエール等フランス革命の指導者達、それにレーニン等ボルシェヴィキのリーダー達（イギリス清教徒革命のクロムウェルは言ふ迄もない）は、個人的には極めて潔白人達でした。それ故に彼らは世間一般にも厳しいモラルを要求し、泥酔や賭博や売春や、それに買占めや売惜しみなどの一寸した経済事犯をも厳禁し、これを反革命罪として処断したものでした。しかし一方仮借ない流血の弾圧を行ったのも隠れない事実で、この両面が表裏となって絡み合つてゐるところに、革命的独裁期の異常な特徴があると言ふのです。

過激派が穏和派の手から政権を扼取るに當つて興味深いのは、ブリントンの次のやうに言つてゐることです。「過激派が少数であるということは、過激派を強いものにする大きな原因の一つである。数が多いということは、戦場の場合と同様に、政治においても足手まといなのである。革命の政治過程において重要なものは、迅速に行動する能力、明瞭にして断乎たる決定をなす能力、目的に向つて突進する能力なのである。……大衆が革命を遂行するのではない。彼らは、活動的な少数者が革命を戦いとつた上で、劇的なお祭りに参加するだけである。」と。

つまり平和な時には数の多い政党の方が強いに決つてゐます。多数決で決まるから……とこ
ろが革命の時に働く力学によれば、数が多くて水ぶくれしてゐる政党は却つて動きが鈍く、不
利になります。さうではなくて、少数精鋭の鉄の規律と中央集権的組織を持った政党の方が、
はるかに機敏に動き易く、陰謀やクーデターを実行するに適してゐるわけです。この過程では
大衆の意向など問題にはなりません。革命の絵画などによく大衆が歓呼してゐる場面が画かれ
てゐますが、あれは少数の革命のリーダーによって煽動されたもので、大衆は単にしつらへら
れたセレモニ一の要員であるに過ぎません。「そんな馬鹿なことが……!!」と皆さんは思はれ
るかも知れませんが、そんな馬鹿なことが現実に行はれるのが、革命の実相なのです。

またかういふ指摘もあります。「狂乱の時代、危機の時代においては、正常な時代において
現実的なものと理想的なものとが演ずる役割は極度に逆となる。簡単に結論的に言えば、盲人
——または幻想家——が王なのである。はつきりした完全な視覚のごときは、この場合ほとん
ど無用なのである。……人を愛するが故に人々を殺す。……暴力を通じて平和を達成する。……
人々を奴隷にすることによって人々を解放する。」と。革命時には平常時の価値が逆倒して
しまひます。寛容・細慮・節度のやうな平常時の価値は、この狂乱の時期には邪魔物でしかな
くなりません。「愛情」と「殺戮」、「暴力」と「平和」、「奴隸化」と「解放」など、論理的には
本来結びつかない相反概念が、いとも簡単に結合されて怪しまれないのもこの期の特徴です。

現にロベスピエールはジャコバン党絶頂期のフランスを指して、「自由の専制時代にある」と誇らしげに申しました。「自由の専制」とは何たる形容矛盾でせう。しかしギロチンの音が絶え間なく響いたこの時期にあつては、論理的整合や客観的思考法を求めることの方が、どだい無理であつたと見るべきでせう。

もう一つ引用しておきます。「一たび過激派が政権を掌握すると、もはや個人の自由とか合法的形式などというものは重んぜられなくなる。過激派は、反対派であつた時代においては自由と寛容を喧しく要求するのであるが、一旦政権を掌握すると甚しい権威主義者となる」。これも事実です。例へばレーニンですが、政権をとるまではケレンスキー政府に対して憲法制定議会を開くことを執拗に要求したものでした。ところが政権を取つてしまふと、この議会の選挙の実施をしぶり出し、更に選挙結果が自党に不利であることが判明（ボルシェヴィキはこの選挙で全投票の二五%しか得ることができず、五七%はライバルの社会革命党に投ぜられた）すると、今度は銃剣の力でもつてこの議会を——僅か半日の討議の後——強制解散させてしまひました。この実例は共産主義者が自由だの民主主義だのと真面目に考へてゐるのではなく、ほんの御都合主義的にしか考へてゐないことを如実に物語つてゐます。

以上種々と申しましたが、皆さんに特にお願いしたいことは、革命といふものを単に文字や言葉によつて理解するのではなく、その情景を具体的に思ひ浮かべながら理解してほしい、と

いふことです。先刻ブリントンが革命的独裁期の殺戮について触れた箇所を引用しましたが、史書によるとジャコバン独裁の絶頂期四九日間にギロチンによつて殺された人の数は、パリ市だけで突に一三七六人に上ると言はれます。この割で行くと、一日平均二八人強が群衆の叫喚の中に——見物のためにわざと群衆を駆り出したと言はれる——、残酷極まる方法で斬首されたことになりましたが、その情景は思ふだに戦慄的であると言へませう。更にロシア革命となるとその比ではありません。既にレーニン在世中にも流血の嵐が荒れ狂つてゐますが、スターリン時代になると概数四〇〇〇万といふ天文学的な数字に達します。ざつと二億の国民が二世代間に四〇〇〇万の犠牲者を出したといふことは、この五〇年間にロシア国民は一〇人に一人の割合で革命の直接間接の犠牲者になった、といふことを意味します。泰平無事の今の日本ではとても想像できないことですが、その想像できないことが実際に行はれるのが、再び申しませうけれども革命の実相であるのです。

日本共産党の例へば不破哲三氏の如きは「我々は過去の革命史の真似はしない」、「我々は新しい理想的な平和的な革命を遂行する」などと、口幅ったく申します。誰しも初めはさう言ふものです。初めから「我々は何十万、何百万の人間を血祭りに上げて、流血の革命をやつてみせる」などと言ふ者はありません。あのロベスピエールですら、もとは極めて人道的な裁判官で、ある罪人に死刑を宣告しなければならなくなったことに思ひ悩んで、たうとう判事の職を

捨てて弁護士になつた程のか弱い神経の持主でした。そのロベスピエールがどうでせう。ひと度革命の齒車にのせられるや否や、自分の嘗ての同志友人に対してさへも容赦ない刃を揮つたではありませんか。力と力の激突する革命のダイナミズムのさ中においては、非情に徹せねばならないのが宿命でせう。今平和な日本で悠暢なことを言つてゐる不破氏が、ひと度革命の波に巻き込まれた時、果して今のやうにのほほんとしてをられると信ずる人は誰も居ないでせう。しかも彼の属する党は、先程述べた史上最大の殺戮を実行したレーニンの党の後継者たることを自認してゐる党ではありませんか。思はざるも甚しい、とはこのこととせう。

日共の擬態

先程はからずも不破哲三氏を引き合ひに出しましたが、日本共産党は総じて現在のところしきりに柔軟路線を打ち出してゐます。彼らが「我々は決して暴力革命はやらない。平和革命で行く。」と宣言し、それに附随して「議会主義を守る」「反対党の存在を認める」「自由も人権も守る」などと宣伝これ努めてゐることは、皆さんも御存知でせう。問題はそれらの発言が戦術なのか、本心なのか。その路線が一時的な限界づきのものなのか、最後まで貫徹されるものなのか、の検討です。もし前者、つまり一時的戦術的なものに過ぎないとすれば、日共がこの頃仰々しく言ひ立ててゐるものは、一種の擬態に外ならないといふ結論になります。

卒直に言つて私は、日共の柔軟路線は一時的なもの、すなはち或る時点までしか通用しないものと見てゐます。その時点とは例の民主連合政権段階のことで、それ以後は先程来縷述して来た革命の独特のダイナミクスの働く時期ですから、とてもこんな柔い態度で行けるものではない、と思ひます。このことは日共綱領からも推察されることで、日共綱領では革命の諸段階は民主連合独裁政権—社会主義政権—共産主義政権の三段階が規定されてゐます。いはゆる民主連合政権はこの三段階のうち一つ前の段階として、一昨年頃から唱へ出されたものですから革命の諸段階の中では一番初歩のものになるわけです。そしてその内容は社会党・公明党・それに保守党の一部すら加へようといふのですから、共産党の本性など出せるものではない。当然本性を押し隠した柔軟路線で行くしかない、といふことになるのです。

それでは日共の革命構想はこの民主連合政権段階で終るものなのでせうか。断じてさうではありません。それはあくまで最後の共産主義政権に到達しなければならず、前の段階は次の段階の踏み台と理解して、はじめて首尾一貫します。それでは民主連合政権以後の段階を導びく考へ方は何であるかといふと、それは日共規約に明示されてゐる如く、マルクス・レーニン主義に外なりません。さうなると、問題は次のやうに整理されます。現在の日共の柔軟路線が果して日共の本心であり、最後まで貫徹される思想であるかどうかを知るためには、それが日共本来の公式思想であるマ・レ主義と一致するか否かを検討せねばならぬといふこと、そして

し背反するならば、柔軟路線は最も初歩の段階に即応して採用された一時的な戦術に過ぎないと結論されること、かういふことです。残された時間はあまりないのですが、少しくその検討を進めてみませう。

焦点を平和革命か、暴力革命かに絞って申しますと、次に挙げるのはマルクス、エンゲルス、レーニンの革命方式に関する主張の基本的部分です。

「われわれは公然と宣言する。われわれの目的はこれまでのすべての社会組織を強力的に転覆することによってのみ達成せられる。」(共産党宣言)

「暴力はマルクスの言葉をかりれば、新社会をはらんでいる旧社会の助産婦である。……暴力はそれをもって社会的運動が自己を貫徹し、そして硬直し麻痺した政治的諸形態をば粉碎する道具である。」(反デューリング論)

「プロレタリア国家のブルジョア国家との交代は、暴力革命なしには不可能である。」(国家と革命)

これ程明白な暴力革命の積極的な肯定は外に例を見ないと言っていいでせう。そしてそれが唯物弁証法の論理的帰結、つまり物と物との対立がギリギリまで昂じて行つて、そこに生ずる突然の飛躍的变化によって、はじめて総合されるといふ、あの論理の必然的結論でもあるのです。これと似たやうな表現は、マルクス・レーニンの文献の到る処にあるのですが、まづマ・レ

主義の本領は暴力革命に立つものと見ていいでせう。

ところがかういふ風に言ふと、必ずマルクスやレーニンの文献にも平和革命を容認した部分がある、といふ反論が出て来ます。私をして言はしむれば、それはほんの言葉のあやで、暴力革命肯定の本質は変らないといふことになります。誤解が残るといけないので少しく文章を引用しつつ検討してみませう。

マルクスに関して言へば、それは通常次のやうな箇所です。「あたらしい労働組織をうちたてるために、いつか労働者は政治権力を獲得しなければならぬ。……合衆国やイギリスのように、労働者が平和的手段によってその目的をたつするのぞみのある国が存在することを、吾々は否定しない。もし私が思いちがえていないとすれば、オランダも同じ部類に属する。……」(アムステルダムの公開集会における演説)成程、この部分だけを見れば、マルクスがある特定の国々に関しては平和的手段による革命を容認してゐたことが、はっきりと見て取られさうです。この演説は第一インタゐの集会でなされたのですから、傘下の労働者団体、特にイギリスのそれを顧慮しての発言であつたらうと察せられます。しかしここまででこの文章を切つてしまふのは片手落です。この文章は意味上次に数行続くので、全部をつぎ合はせてから総合的に判断しなければなりません。

次はかうなつてゐます。「が、たとえそうであるにしても、たいていの大陸諸国では、暴力

が革命の挺子とならなければならぬだろう、ということを確認しなければならぬ。もし窮極において、労働の支配がうちたてられるはずだとすれば、労働者がやがてうったえるべきものはまさに暴力である。」と。皆さんよく見ていただきたい。この「が、たとえ」から「認識しなければならぬ」までの文章は、読めば解るやうに、前記のアメリカ・イギリス・オランダでは例外的に平和的手段で政権を獲得できるかも知れないが、多くのヨーロッパの国々はやはり暴力革命が本則である、といふことを言つてゐます。そして次の「もし窮極において」から最後まで文章は、意味上大陸諸国にもかかりますが、より多くアメリカ・イギリス等にかかるものと解さねばなりません。つまりマルクスの本音は、アメリカやイギリス等民主主義の進んだ国では、議会的（＝平和的）手段によって政権にありつくぐらゐることは可能かも知れないが更に進んで「労働の支配」が確立するためには、断じて暴力に訴へる必要があることを強調したものと見られます。従つてマルクスの平和的手段の容認は、革命といふ巨大な現象の極く初発の部分にのみ、しかも例外的にあてはまることであり、全体としての革命遂行には依然として暴力が必要であることを否認してゐない、といふ結論になりませう。日共の言ふ平和革命もせいぜいこの程度のものに過ぎません。

以上によつて、日共のいはゆる柔軟路線が一時的戦術的なものに過ぎず、マ・レ主義の本領からすれば一種の擬態に外ならないといふ私の主張は、ほぼ論証し尽くされたと言へませう。

悲しむべきことは、左傾したマスコミの口舌によって、この擬態が本質と見誤られる危険があることです。例のチリの革命が平和革命の模範例だとしてえらくもてはやされてゐますが、チリでは現在経済は混乱し政権は不安定だし、特に政府が軍権を掌握し切つてゐないから、果して社会主義革命が定着するかどうかは今のところ不明だ、といふのが正しいでせう。マスコミの意図的な世論操作を適確に見破つて行つてほしいと希望します。

革命防止のために

最後に、残された少しの時間で、革命防止のために只一つの事を申して置きます。いや、本当はもっともつと申したいのですが……。私は戦後シベリアに抑留された経験もあり、共産統治の冷酷さは身をもつて知つてゐるつもりです。あの人間の心までも支配しようとする残忍な権力統制は、人間を生きながら地獄にはふり込むやうなものと思つていただきたい。このやうな状態を日本に持ち込むことを、私は何としても容認するわけには行かないと声を高くして訴へたいのですが、時間もないことだし、只一つの事だけを申します。

それは、一言にして言へば、革命と改革とを峻別せよといふことです。今の世の中に多くの欠陥があり、従つて種々な不満のあることは事実です。それを改めるのに、大きく言つて二つの方法、つまり革命と改革との二つがあると思ひます。この二つは、字面は似てゐるけれども

意味内容においてはまさに対蹠的であることに注目してほしい。すなはち革命とは旧社会の全面的変革（＝断絶的）のことで、通常下からの大衆蜂起といふ非法的手段によって行なはれるものです。これに対して改革とは旧社会を歩一步是正して行くこと（＝連続的）で、手段は上からの法律的・行政的処置をもってするのが普通です。前者は一挙に急進的に進められるから、生ずる犠牲も大であるに比し、後者は漸進的に進行するから時間がかかるけれども、犠牲ははるかに少なくてすみます。そのどちらを皆さんは選ぶか、いや、人間としてどちらを選ぶべきか、一つ皆さんに考へてほしいのです。

私は断乎として後者を選びます。それこそが有限の人間には、ふさわしい途だと思ふからです。一〇〇パーセントの完全社会を夢想して、革命も独裁も流血も権力統制ものかはとばかり突進するのは、神を畏れざるやり方だと申したいからです。しかも人類の近・現代史は二つの途を選んだ双方の結果を、我々の眼の前に鮮やかに提示してくれてゐるではありませんか。資本主義を断滅して、革命の途を進んだ国、ソ連や中共や東欧やキューバの姿が一方にあります。他方（古典的）資本主義を絶えざる修正によって改革した欧米先進諸国、それに日本の姿がこれに對置されます。そのいづれに軍配を挙げべきかは、自ら明らかであらうと思ひます。しかし改革の途は決して容易に達成されるものではありません。却つて革命の途よりもより強靱な精神要素を必要とします。それは忍耐であり明智であり、そして人と人との信頼感であ

りませう。短気・狂信・そして虚無は革命の途に通じません。このやうな精神要素を練り鍛え、身につけ、手を取り合つて正々堂々と改革の途を進むことを、皆さんと誓ひ合ひたいものと、つくづく思ふことです。

(鹿児島大学教授—西洋史)

吉田松陰『対策一道』『大義を議す』

山口宗之



日本の道義の源泉

討幕論の提唱

当時の情勢

橋本左内の意見と松陰の立場

違勅調印に対する攻撃

国防論と国体論

“功業の論”批判

日本の道義の源泉

『対策一道』とは安政五年（一八五八）松陰先生二十九歳の四月中旬に書かれた建白書であります。二年前の八月来日した米国使節ハリスとの間で日米修好通商条約の調印が焦眉の問題となり、この年一月老中堀田正睦^{もとむら}みづから上京して勅許をお願ひするといふことがあり、攘夷・開国をめぐる国論大いに湧いてゐたとき、日本人としての心構へはいかにあるべきかといふことについて説いた文献です。

松陰先生に対しては一般に幕末尊王攘夷論の代表的志士といふやうに評価されてをりますが決して固陋な鎖国論者でなく、積極的な開国への展望を十分に持ってゐたのでありまして、このことは国禁を犯してペリーの軍艦に搭乗し海外への遊学をはかった有名な下田踏海事件の一事をもつてしても、十分に理解できるところであります。全文を通読して口語訳を加へればよろしいかと思ひますが、時間も限られてをりますし、お読み下さるだけでも大体の内容は御理解いただけると思ひますので、特に、問題となるやうなところを引出しながら読んでまゐります。

嗚呼、神州の振はざること久し。一旦勅諭震発するや、正論鬱興^{うつつこう}す、誠に曠代^{こうだい}の盛事なり。凡そ

臣子たる者之れが承順を為すこと能はずんば、其れ之れを何とか謂はん。況や墨夷の脅嚇、幕府おそ懼れて之れを聴き復た国体を顧みず。凡そ士民たる者之れが匡救きやうきゆうを為すこと能はずんば、亦之れを何とか謂はん（『吉田松陰全集』八普及版、以下『全集』と略称）第五卷一三八頁）。

ここで勅諭と申しますものは、幕府の条約許可願ひに対してこの年三月二十日に出された不許可の勅答を指すのであります。今や幕府はアメリカとの間に条約を結ぶことをもって当面の危機打開策としてゐるやうであるが、果してそれはわが国将来の発展にとつて正しい道といへるであらうか、あるひは戦ひをおそれる気持からきたものではなからうか。ハリスの強要に屈して和睦を結ぶことについては、天皇がもつとも御心配なさつてゐるところである。今もし幕府がわが長州藩の殿様に対策を問ふてくるやうなことがあれば、殿様はつぎのやうにお答へになるべきである。すでに不許可の勅答が出されてゐる以上これを奉ずる以外に道はないではないか——と、松陰先生ははっきりいひ切つてゐるのであります。ところが殿様父子は現在参勤で江戸にゐられる、このときにあたり、もし苦しまぎれに幕府が「万一の挙」すなはち勅令にそむいて条約を結ぶやうなことがあつたらどうしたらよろしいか、これについて松陰先生はつぎのやうにいはれるのであります。

天日の照す所、皆皇神をきの御めたまふ所なり。天子の勅は乃ち皇神の旨なり。其れ奉揚せざるべか

らざることを論ずるなくして可なり。勅を奉じて死すれば、死は猶ほ生のごとし。勅に背きて生くれば、生は死に如かざるなり。此の義や天下の人皆之れを知れり、而して征夷独り知らざらんや。征夷或は知らずとも、二百六十大名乃ち一の知る者なからんや（同書一四三頁）。

すなはち日本の民たるもの、天皇の御意志が条約不許可になる以上、ただひたすらにこれに従ふ以外に道がないのはあきらかであり、將軍がこの道理をわきまへないはずはないと断言するのであります。要するに攘夷・開国をめぐり紛糾する政局の鍵を解くものは、天皇の御意志に勅諭をただひたすら体得し順奉することにあり、ここにわが国の道義の源泉があるといふことを鋭く喝破したのであります。

討幕論の提唱

ところがこの年四月、幕府の最高責任者となった大老井伊直弼はこのあきらかな勅諭を無視し、六月十九日いはゆる無勅許調印事件をひきおこすに至ったのであります。これに対し痛烈なる批判を加へたものがつぎの七月十三日付でしたためられた『大義を議す』であります。ひたすらに順奉すべきはずの勅諭にそむいた幕府を討つべきであるとの明確な討幕論が、すべく展開されるのであります。

墨夷の謀は神州の患たること必せり。墨使の辞は神州の辱たること決せり。ここを以て天子震怒し、勅を下して墨使を絶ちたまふ。是れ幕府宜しく踏躓遵奉之れ暇あらざるべし、今は則ち然らず、傲然自得、以て墨夷に詔事して天下の至計と爲し、国忠を思はず、国辱を顧みず、而して天勅を奉ぜず。是れ征夷の罪にして、天地も容れず、神人皆憤る。これを大義に準じて、討滅誅戮して、然る後可なり、少しも宥すべからざるなり（同書一九二頁）。

ここで松陰先生はハリスの強要に屈した幕府が条約不許可の勅諭をふみにちつて通商条約に調印したことを「征夷の罪」と断じてその責任をついたのであります。ところが明治維新史の展開過程をみてみますと、軍事専制権力の把持者たる幕府を討つといふことは、さうかるがるしく出てくるものではありません。たとへば桜田門外の変の志士たちが懐中してゐた『斬奸趣意書』を読んでみますと、自分たちは幕府・將軍家に敵対せんとするものでは決してない、井伊大老の所業は徳川家の名譽をおとしめること甚しいものがあり、われわれ御三家水戸藩恩顧の武士として黙止しがたく、現將軍家ないし東照宮家康公に対し真の忠誠をつくすべく一命にかへてこの拳に及んだものである、と明言されてゐるのであります。このやうな一般的風潮の中にあつて幕府違勅の罪を正面からとりあげ、「大義に準じて、討滅誅戮して、然る後可なり、少しも宥すべからざるなり」といひ切つた松陰先生のはげしい氣魄のもつ意味を考へてい

ただきたいと思ひます。

ところが非常に注意すべきことはこの松陰先生の討幕論は一つの運動目標として設定され、現実の情勢に対応したところの、政策論といふかたちで提示されたものではないといふことです。さうではなく、我が内なるやむにやまれぬひとすぢの要求、耿々の志ともいふべきものから発してゐるといふことであります。この点につきまして『大義を議す』に

義を正し道を明かにし、功利を謀らず。是れ聖賢の教たる所以なり。勅を奉ずるは道なり、逆を討つは義なり。公侯夫士、生れて此の時に際ひ、苟も道義に違ふことあらば、猶ほ何の顔面ありて聖賢の書に對せんや。士大夫の志たる、死生甚だ小にして、道義甚だ大なり。道に違ひ義に戻り、徒爾に生を偷む、何の羞恥かこれに加へん。乃ち国家と雖も亦然り。不道不義、以て一日の存在を謀るは、君臣上下、義に仗り道に徇ひ、以て始終を全うすると孰れぞや（同書一九三頁）。

とあるやうに、功利を謀らずひたすら義を正し道をあきらかにすることにこそ、国のよって立つ生命があるといふことを非常にはっきりしたことはで示されてゐます。さらにこれより一年前の安政四年八月二十八日、松下村塾の門人吉田稔麿としまろに与へました手紙の一節にも「天下国家の御事は中々一朝一夕に参るものに之れなく、積年の至誠積みにつみての上ならでは達するものに御座なく候」（『全集』第八卷五八七頁）とのべ、天下国家の重大事は多年の至誠をつみ



重ねた上ではじめて行ふことができると断じたのも同じ意味合ひのことであります。要するに松陰先生の討論幕論は現実的な政策論の次元の問題でなく、内なる精神のやむにやまれぬ必然の要求に発するものであったのであります。

当時の情勢

さてつぎにこのやうな松陰先生の主張がどのやうな歴史的背景のもとで論ぜられたかといふ点について、皆さんの理解を深めていただく一助にもならうかと考へ、当時のわが国内外の諸情勢について若干申しのべたいと存じます。

寛永以来鎖国令二百余年の太平の夢をゆさぶつたものは、いふまでもなくラックスマンの根室渡来（一七九二）にはじまるところの、外国艦船の来航であります。つづいてレザノフの長崎来航（一八〇四）、フェ

ト号事件（一八〇八）、イギリス捕鯨船の水戸大津浜上陸事件（一八二四）、アメリカ船モリン号打払事件（一八三七）とつづき、一八五三年ペリー来航を迎へるまで外国艦船のわが国接近ないし入港は無慮四十数回を数へることができるのであります。これに対する幕府の方針も一八〇六年（文化三）の撫恤令ぶじゆつれい、一八二五年（文政八）の打払令、そしてアヘン戦争の教訓にもとづく一八四二年（天保一三）の薪水給与令といふやうに二転三転したのであります。

さて天保改革失敗のあとの内外ともに重大な時期にあつて幕政を担当したのは老中阿部正弘であります。就任当時二十五歳の若さでありましたが、彼は諸大名のなかで衆望もつとも高かつた水戸藩主徳川斉昭、また斉昭の周囲に集まつた大名グループ——名古屋徳川慶恕よしくみ・越前松平慶水（春嶽）ら親藩大名、また薩州島津斉彬・土佐山内豊信（容堂）・宇和島伊達宗城むねなりといつた外様雄藩々主たちと協調関係を保ちながら中央政治への参加を希求するそのエネルギーを巧みに吸収して幕政の上に反映し、せまりくる危機打開の道を求めようとしたのであります。開国への幕開けとしてのペリー来航はこのやうな情勢の中で訪れたのです。

ペリー来航事件はいっぱんに破天荒の重大事件のやうにいはいはれてゐますが、すでに前年八月オランダ商館長から予告がなされてをり、黒船来航の噂は事前世上にあるていど流布してゐた形跡があります。熊本の思想家横井小楠のごときは来航一月前の五月三日越前福井藩の友人岡田準介へ与へた手紙の中に、最近西洋の情勢はただならぬものあり、定めて夏中には浦賀へ外

国船がくるであらうといふことを書きとめてあるほどであります〔横井小楠遺稿〕一九一頁〕。ところが阿部老中はこれといふ対策を講ずることはしてをりません。といふのもこれまで来航した外国船の場合、鎖国の祖法を説明し要求に応じられないことを伝へると、ほとんどはおとなしく引揚げてゐたためです。これに反しペリーは終始強硬な姿勢をもって交渉にあたり、武力行使も辞せぬとの態度をみせつけたため、幕府は押切られてペリーのたづさへたアメリカ國書を受領せざるを得なくなつたのであります。さうして翌安政元年再来したペリーの強要を拒み通すことができず、つひに三月三日米和親条約の調印となり、ついでイギリス・ロシア・オランダとの間に同様の条約を結ばざるを得なくなつたのであります。

ところがここで問題となつて参りましたのは、江戸幕府開設以来一切政治的發言をなさらなかつた朝廷が弘化三年（一八四六）海防嚴戒の勅諭を幕府に下されたのを皮切りとして政治の上での御意志を表明せられるやうになり、それとともに大名たちのなかにも、開國の是非のごとき國家の重大問題の決定にあたっては、事前に天皇の御意向を伺ふべきであるといふ發言があらはれてきたことあります。和親条約締結の段階までは名古屋徳川慶恕の意見書にみられたくらゐでありましたが、安政三年のハリス來駐、翌年の江戸登城・將軍謁見、ついで幕府側との間で通商条約の接衝がはじまつて参りますと、大名や志士たちの中には事前に伺ひをたて勅許をいただいた上でなければ調印はまかりならぬといふ空氣が支配的になつてきたのであり

まして、幕府を代表する老中堀田正睦（阿部正弘は前年三十九歳で没してゐます）みづから上京したのも、この情勢に圧されたからにはかなりません。

橋本左内の意見と松陰の立場

以上が『対策一道』の書かれた背景であります。なほ当時の与論の動向をうかがふよすがとして松陰先生と同じく安政の大獄で刑死いたしました越前福井藩出身の橋本左内の場合を御紹介したいと思ひます。この人は蘭・英・独語を解し、海外の事情にあかるく積極的な開国策をとなへ、英明の一橋慶喜を將軍継嗣に推挙する運動を推進し、幕府の規模における統一国家体制の構想をかかげて活躍した人物であります。この左内が『対策一道』の書かれた年の四月、友人の一橋家々臣平岡円四郎との間で外国貿易の是非について議論をしてをります。まづ貿易を行へば庶民困窮の因となつて国の衰へを招き、キリスト教の流入が仏教界を動揺させ混乱をひどくする危険があり、外国使節の国内旅行は無用のトラブルをひき起し、はては戦争の端緒ともなる危険が考へられるといふ平岡の慎重論に対して左内は、貿易とは彼我の物資を相通じて富国強兵をもたらす基礎であり、キリスト教流入に反対する僧侶の代表者を外国へ送り、研究をやらせ、彼ら自身に正邪の弁別をやらせるべきであるとし、また外国人をめぐるトラブルは時が解決するはずであると答へ、むしろこの際思ひ切つて開国にふみ切り大いに貿易

を行ひ武器・艦船を購入し海外に発展すべきであると左内は主張するのであります。〔昨夢紀事〕第三、二九〇（一頁）。

このやうな与論のなかにあつて松陰先生のいふところは、今幕府当局がとらうとしてゐるところのアメリカの強要に屈服するといふかたちでの開國通商は絶対に認めるべきではない、したがつて堀田老中の調印許可願ひは許されてはならないといふ立場です。松陰先生はこの年一月六日あらはした『狂夫の言』で反対の理由を七つあげてゐます。第一、朝廷の議が反対である。第二、ハリスに屈服することに対し国民的義憤が根本にある。第三、清国が英仏兩國に侵蝕されつつある現状にかんがみ、ハリスの好意なるものが信じ難い。第四、自由貿易は金銀を海外に流出せしめ財政破綻を招く。第五、外国の偽善的態度に庶民があざむかれる。第六、戦争になつた場合わが国民は死を賭して戦ふ意志をうしなつてゐるから亡国はまぬかれない。第七、やがて外国人は將軍継嗣の争ひのごとき国内問題にも介入するやうになり、重大な事態を招く（『全集』第五卷九四頁以下八玖村敏雄『吉田松陰』一五二頁所引）、等々通商条約締結に反対する理由を列挙するとともに、今はさきの和親条約を厳守して国内の充実をはかり、航海遠路の策を行ひ、しかるのちはじめて対等の条約を結ぶことができるとしたのであります。かうして松陰先生は幕府側の勅許奏請とこれに対する朝廷側の反応とを見守つたのであります。三月二十日に至りさきに結んだ和親条約以外は許容しがたい、再度諸大名の意見を徴し

てこれを報告するやうに、その間もし外国側が事を構へるなら開戦もまたやむを得ないといふ条約不許可の勅答が表明せられたのであります。しかるに六月十九日井伊大老による違勅調印事件が起ります。過去百年間この井伊大老ほど評価のゆれ動いた人物は珍らしいのですが、彦根藩主井伊直中の十四男に生まれ、三十二歳のときまで埋木舎うもれどこのやの一隅に世を避け、わづか三百俵の捨扶持をたよりに国学・和歌・茶の湯・居合術の修練に明け暮れてきたその経歴からみてひとかどの人物ではあったと申せませう。『公用方秘録』といふ彼の記録をみてみますと、問題の六月十九日勅許なくして条約調印を行なったことを憂へる家臣に対し「今日拒絶して永く国体を辱かしむると、勅許を待たずして国体を辱しめざると孰れが重き（中略）勅許を待ざる重罪は甘んじて我等屯人に受候決意に付又言ふ事勿れ」といひ、時機を失すればイギリスの来攻を迎へ容易ならぬことになる、したがってわが国存立のため臨機応変の処置としてかうせざるを得なかつたと答へてをりますが（井伊大老史実研究会『井伊大老の研究』一、三九頁）、これは大老の重職にある者としてのひとつの立場と申せませう。

違勅調印に対する攻撃

違勅調印問題は七月に入つて松陰先生の耳に達しますが、これに対するはげしい批判が『大義を議す』であり、また七月十六日にしたためられたこの『時義略論』であります。『時義略

論』においては第一、幕府違勅の罪をあきらかにし第二、幕府を諫めることを説き第三、天皇が外国問題について宸襟を悩ましてをられることを論じ第四、睿慮を安んずる道を考へ第五、機先を制し対策を講ずべきことをのべたのであります（『全集』第五卷一九九頁以下）。かうして松陰先生は名分をみだした幕府の責任をはげしく追及するのでありますが、それならただちに兵を挙げて幕府を討つべきであるかといへば、たとへば『講孟余話』第四場第七章をみてみますと

是に於て列藩と心を協へ、幕府を尊崇し、上は天朝に奉事し、下は封疆を守り、内は万民を愛養し、外は夷狄を威服せしめば、其の偉功盛烈孰れか是れに如かんや（『全集』第三卷四一頁）。

とあり、また安政二年四月二十一日兄の杉梅太郎へ宛てた手紙の一節にも

幕府への御忠節は即ち天朝への御忠節にて二つ之れなく候（中略）何分二百年來の大恩も之れある事、夫れは扱て置き、今幕府を易へ置く事を反覆思惟仕り候へども、徒らに天下を擾乱するまでにて未だ其の人物出で申さず候。幕府に御随従の上は、幕府に少しも隔意之れなき様仕らず候ては神州の不幸、外夷心を生ずる木に御座候（『全集』第八卷四二三頁）。

とのべてゐます。つまり幕府の支配体制をストレートに破壊するとは決していはず、二百年の太平をひらいた功績をも認めるべきであり、いったんの激情に任せ討幕をあげつらふのは天下の擾乱と外国の干渉とを招くだけであるといふのであります。同様な論は『大義を議す』のなかで違勅將軍の罪を問ひつつ、なほつぎのやうにいふのです。

大義已に明かなるときは、征夷と雖も二百年恩義の在る所なれば、当に再四忠告して、勉めて勅に遵はんことを勸むべし。且つ天朝未だ必ずしも軽々しく征夷を討滅したまはず、征夷翻然として悔悟せば、決して前罪を追咎したまはざるなり。是れ吾れの天朝・幕府の間に立ちて、之れが調停を為し、天朝をして寛洪に、而して幕府をして恭順に、邦内をして協和に、而して四夷をして懾伏せしむる所以の主旨なり。然れども天下の勢、万調停すべからざるものあり、然る後之れを断ずるに大義を以てせば、斯ち可なり（『全集』第五卷一九四～五頁）。

要するに違勅を犯した幕府の責任をただ追及するだけだすむものではない。大義をあやまつた將軍といへども二百年来の恩義がある以上、いさめて正しい道にひきもどすべきであると説くのであります。要するに松陰先生は井伊大老の違勅問題を契機として討幕論を唱へるのであります。性急な直接行動をいふのでなく、勅諭をあくまで順奉することに一切の価値の基準を置いたのであります。さうして国の生命が保たれるか否かといふもつとも重大な問題も、結

局ここにつながつてゐることを喝破したのであります。

この点につきましては安政三年『丙辰幽室文稿』の中の「斎藤生の文を評す」といふ一節に非常にはっきりとのべられてゐます。

本邦の帝皇或は桀紂の虐あらんとも、億兆の民は唯だ当に首領を並列して、闕に伏し号哭して、仰いで天子の感悟を祈るべきのみ。不幸にして天子震怒し、尽く億兆を誅したまはば、四海の餘民復た^{げつる}子遺あるなし、而して後神州亡ぶ（『全集』第四卷一四〇頁）。

つまりもし天皇が昔の支那の桀王・紂王のやうに暴虐をなさることがあつても、民たるものは泣いて天皇が感悟して下さることを祈るのみ、どうしても天皇が怒りををさめられないときはすべて誅せられてもまたやむを得ない、といふきびしいことばでもつて天皇の御意志の無條件の順奉こそ一切の道義の源泉があるといふことを論じたのであります。

国防論と国体論

当時、多事多難の現実に対応して国の存立をいかに守るかといふことに関するさまざまの議論がなされてをりますが、さきほどもちよつと御紹介いたしました橋本左内の主張に関連させて少しのべてみたいと思ひます。左内は親藩松平家の武士です。親藩の立場はあくまで徳川家

・幕府を中心とする考へに於つたことはいふまでもありませんが、左内の場合問題となつてゐるのは現実の国土としての日本であります。すなはち制度・組織・機構があり、当世風にいへば権力構造をもつてゐる、昨年の山田先生の御講義（日本への回帰第八集）で申されました、
“外なる国家”といふ視点からとらへられてゐると思ひます。たとへば条約調印をいそぐハリスの強要に対して、ゆくゆくわが国が亡びない目途がつくなら今は一時の恥をしのんでも申し出を受入れるのはやむをえないとし（『橋本景岳全集』上巻六九一―六頁）、勅許を与へない朝廷の態度を批判して諸大名の意見を天皇のお耳に入れることさへすれば天下はたちまち治まるものでせうか、このままでは幕府は責任ある外交措置をとれません（同書七五六頁以下）、とめてをります。また朝廷・幕府間の外交意見の対立から当時一部に政權返上論が唱へられたのですが、左内は長い間政權から遠ざかつてゐた朝廷がこの重大な時期天下の大政を握られるとすれば、外国側の思ふつぼとなり、たちまち日本は侵略されてしまふに違ひないとして王政復古に反対の意志を表明したのであります（同書七一八―七二〇頁）。

この左内の意見に対して松陰先生の立場は、国土を現実にどう守るかといふことよりも、日本の理想といふか、あるひは日本の伝統・日本独自の道といふか、現実に知覚することのできぬところの日本の生命ともいふべきものをこそ、もつとも重大視してゐるのであります。そして具体的には天皇の御意志を体し、あくまでそれを順奉することに一切の価値の基準を置き、

たとへそのため現実の国土が亡びることがあってもあへて辞せぬとの決意を固める、その上ではじめて現実の国防の方途が出てくるのではないか、といふことにつきると思はれます。もちろん現実には有効な対策を講ずることは必要であります、それだけで終つてはいはゆる功業の論となつてしまふ、さうではなくて義を正し道をあきらかにする、わが内なるやむにやまれぬ志に従ふ、そこに松陰先生の世界があつたのであります。多くの書を読み思考を深め、また門人たちを教へ導いた蟄居幽囚の「静」の時代から「動」の時代へ、その帰結するところは刑死となるのであります、松陰先生三十年の生涯の最後の時期に入つてゆくころからこの問題をめぐり、火花を散らすやうな議論が展開されてゆくのであります。

幕府の違勅調印を知られた孝明天皇はいたく憤慨せられ、六月二十八日讓位の意志を九条閑白に洩らされ、七月三日御三家もしくは大老のうち誰か一人上京して事情説明するやうにその勅命が発せられます。しかし幕府はこれに従はず、九月に入つてから井伊大老の旨を含んだ老中間部詮勝あきかつが上京してまゐります。しかして間部老中は梅田雲浜以下在京尊攘派の指導的志士たちをつぎつぎに捕縛し、朝廷に圧力をかけていったのであります。この中にあつて九月、松陰先生は幕府の黒幕となつて奸悪を働いたとみる紀州藩附家老水野忠央ただなか暗殺の策を門人の松浦松洞に授け、また尊攘の志あつてい京都の公卿大原重徳しげとみを長州に迎へこれを擁して松下村塾一同が決起せんとする計画をねり、十月には門人赤根武人を京都へ送り梅田雲浜らがとらはれてゐ

る伏見の獄を破壊させようと画策し、つひに同志十七名と間部老中要諫を考へ、長州藩当局に對しそのための鉄砲の貸与を願ひ出るに至つたのであります。かくのごとき計画はふつうなら当然秘密にめぐらされるべきであります。松陰先生にとつては堂々たる天下国家の問題であると考へ、公明正大に事を運ばれたのであります。ところが長州藩当局としては安政大獄の嵐が吹きまくつてゐる当時軽々しく動くわけにはいかない、むしろ松陰先生を保護禁足して置いた方がよいと考へ、十一月末一室蔽囚令を發し、十二月二十六日先生を再び野山獄へ投ずるに至つたのであります。

このころ江戸に居りました門人——高杉晋作・久坂玄瑞・中谷正亮・飯田正伯・尾寺新之丞らは連署血判し、先生は非常にあせつてをられるが、幕府がさらに有志大名を処分するとか、貿易が開始され看過できなくなる時期がくるまでじつと辛抱すべきである。いま動いては時期尚早であり、いまは形勢を見守るべきときである、といふことを進言してまゐります。またこれよりさき水戸藩有志（桜田門外の変の指導者関鉄之介ら）が長州藩との提携を求めて萩を訪れますが、藩当局はこれに会はず、ことわつてしまふのです。

“功業の論” 批判

このやうに四面楚歌ともいふべきなかにあつて松陰先生の真骨頂ともいふべき“功業の論”

批判がでてくるのであります。

江戸居の諸友久坂・中谷・高杉なども皆僕と所見違ふなり。其分れる所は僕は忠義をする積り、諸友は功業をなす積り、さりながら人々皆々長ずる所あり、諸友を不可とするには非ず。尤も功業をなす積りの人は天下皆是れ。忠義をなす積りは唯だ吾が同志数人のみ（安政六年一月十一日、某宛書簡、『全集』第九卷一九二〜三頁）。

松陰研究家で著名な玖村敏雄氏は、大義で濡らした手をもって粟をつかむ、それが功業の立場であり、絶対に同調するわけにゆかないとした松陰先生の態度をするべく示してゐるといわれます（『吉田松陰』三〇八頁）。かうして安政六年一月二十四日から二十六日にかけて獄中の絶食となるのです。いっぽう参勤交代の時期がきた長州藩主毛利敬親は江戸へ出発しようとするのですが、これに対し松陰先生は、いま参勤すれば長州藩が違勅將軍に加担したことになるのです。また藩主が江戸に居るとなればいよいよ自分たちが決起するとき非常にやりにくい、と考へ途中京都伏見にさへぎって思ひとどまるやう献言することを画策し、十八歳の門人野村和作が命にしたがって脱藩上京したのであります。ことやぶれて野村は萩の岩倉獄へ投ぜられてしまふのです。この野村へ宛てた安政六年四月四日付の手紙の一節につきのごとくあります。

僕が死を求むるは生きて事をなすべき目途なし。死んで人を感じずる一理あらんかと申す所と、此の度の大事に一人も死ぬものなき、餘りもく日本人が臆病になり切ったがむごいから、一人なりと死んで見せたら朋友故旧生残ったもの共も、少しは力を致して呉れうかと云ふ迄なり（『全集』九卷三三二頁）。

非常にはげしい気魄のみなぎつてゐることがお分かりでせう。しかし五月十四日松陰先生を江戸へ送るやうにとの幕府の指令が届き、二十五日萩を出発するのであります。このとき松陰先生はむしろよい機会である、この際正しい議論をもって幕府を説得しよう、至誠をもって幕吏にぶつかりこれを動かさうと決意し、村塾の門人たちにつぎの有名なことばを残したのであります。

至誠にして動かざる者未だ之れあらざるなり。吾れ学問二十年、齡亦而立なり。然れども未だ能く斯の一語を解する能はず。今茲こゝに関左の行、願はくば身を以て之れを験さん。乃ち死生の大事の若きは、姑しばらくこれを置く。己未五月（『全集』第一二卷二一五頁）。

かうして幕吏の訊問に対し、まだ幕府側が知るに至らなかつた大原西下策・間部要諫策をあへてぶちまけ、幕府の悔悟を願つたのであります。しかしこれが直接の因となつて「平生の学

間淺薄にして至誠天地を感格すること出来申さず、非常の変に立到り申し候」といふ深刻なことば（十月二十日、父・叔父・兄宛書簡、『全集』第九卷四八〇頁）、二十五日から翌二十七日にかけてしたためられた『留魂録』、および巻頭の和歌「身はたとひ武蔵の野辺に朽ぬとも留置まし大和魂」、そして二十七日朝いよいよ呼出しの声を聞いたときの絶筆

此程に思定めし出立はけふきくこそ嬉しかりける（『全集』第七卷四二二頁）

これは字足らずになつてゐましてそれと気づきそこへ点をうったのみで獄卒にひきたてられ

吾今為_レ国死、死不_レ負_三君親、悠々天地事、鑑照在_二明神_一（同書四二二頁）

の絶唱をのこして数へ年三十歳の至誠純忠の生涯を閉ぢられたのであります。二日後の十月二十九日木戸孝允・伊藤博文ら四人がやうやく獄卒の手から遺体を受け取り、水で洗ひ清め、小塚原回向院の一隅に埋葬したのであります。報告書の一節に「此の時四人の憤恨遺憾御推察下さるべく候」（『全集』第一二卷四二八頁）とあります。「死んで人を感じずる一理あらんか」といふそのことば通り、身をもってこれを行った松陰先生三十年の生涯のかがやきが、その後における長州藩維新運動の方向性を決定したとも申せませう。

以上、『対策一道』『大義を議す』を手がかりとして松陰先生の存在そのものについて御紹介して参りました。幕末内外多事多難のときにあつて政治情勢の展開に対応した政策論の立場から問題を考へる、そこに人を納得させるやうな客観的な論理の大系を築くのも必要なことでありませう。しかしわが心の内に発するやむにやまれぬ一筋の精神、耿々の志に照らしてみづからの思考と行動とを律した松陰先生の生き方、ことに一切の価値の基準を天皇の御意志のひたすらなる順奉の中に見出した松陰先生の全存在こそ、百年の歳月を越えて今なほわれわれの前に迫ってくる最大の意義あるものと確信いたします。

最後に『講孟余話』第一場（安政二年）六月十三日の一節、ここに政策次元を越えたよりすぐれて道義的な国防論—国体論の唱導がなされてをります。松陰先生をわたしたちの胸の中にかみしめ、日本の道義を考へる上でのよるべにしたいと思ひます。

聞く、近世海外の諸蛮、各々其の賢智を推挙し、其の政治を革新し、駭々然として上国を凌侮するの勢あり。我れ何を以てか是れを制せん。他なし、前に論ずる所の我が国体の外国と異なる所以の大義を明かにし、閩国かうの人は閩国のために死し、閩藩の人は閩藩のために死し、臣は君ののために死し、子は父ののために死するの志確乎たらば、何ぞ諸蛮を畏れんや。願はくば諸君と茲に従事せん。

（『全集』第三卷二〇頁。）

（九州大学教授—国史学）

教育と学問との乖離かいりを憂うれふ

小田村 寅二郎



はじめに

学問はすべて科学でなければならぬか

歴史の学び方のポイントは何か

人生の事実には直面せよ

集団の中から自己を救ひ出すために

遠因と直接の原因を分離せよ

われわれのいのちを日本語に托さう

科学的思考だけでは天皇や日本のことはわからない

天皇の問題で考へるべきこと

不断改革の道

はじめに

お話にはひります前に、これまで三日間すごしてきた合宿教室をふりかへってみたいと思ひます。これまで木内先生や村松先生をはじめ多くの先生方が壇上にお立ちになったのですが、それらの先生方が心魂を傾けて披瀝されたことは一体何だったか。先生方のお話のテーマはそれぞれ異つてゐたけれどもそれらを通じて私たちの心に沁みるものがあつた、それは何か。いろいろなことが考へられませうが、私はそのうちの一つは、「自分の一生は自分自身で背負つていかなければいけない」といふことだつたと思ふ。

人々は様々のグループに属して生きてゐますが、私達はともすれば自分の生き方や大切な判断を、それらグループの命ずるところや、周囲をとりまく雰囲気委ねてしまつて、容易に自己の尊厳さを放棄することがしばしばあるやうに思はれます。すなはち或る一つの決断が要求される時に自分自身でそれに判断を下すのではなく、誰かに判断してもらはうとして周囲を見まはす。或は自分で判断するのを躊躇する。たとへば村松先生がマスコミの偏向に対してきびしい批判を下されると、心の一方ではなるほどと思ひながら、村松先生の批判そのものが偏向してゐるのではないかと考へたり、それも一つの見方にすぎないと考へたりしてお茶を濁す。さうして自分の手で全力をつくして問題にとり組まうとはしないのです。そんなことを繰り返

してゆけば、どんなに多くの話を聞いても何の意味もなさないでせう。先生方のお話の中から一つのことでもいいから皆さんの心にうけとめられるものがあれば、それを自分の人生の中に積極的に生かしてゆく勇氣と決意と、それについての深い思慮が諸君の中から生み出されていかなければならない。いま諸君にとって大切なことは、或る思想を身につけることではなく、現実ととり組む勇氣を身につけることである——諸先生方が口を揃へておっしゃったことはさういふことだったのではないでせうか。たしかに私共は宇宙天地の中の眇たる一存在にすぎないけれども、その短かい人生の間に、最高度に生き甲斐を感じさせる生き方は何か、それは、これが大切だと思ったら全身全霊をこめてそれととり組んでみることに、それを自らの人生の中に生かしてゆくことでせう。さういふ勇氣の中に人間が大きく成長してゆく姿を先生方は要求されたのだと思ひます。

学問はすべて科学でなければならぬか

さて表題に即してお話をすすめてまゐりませう。先づ第一に申し上げたいことは、現代において学問は非常な発達を遂げたといひますが、そこには何か大切なものが欠けてはゐないか。すなはち生きてゆくことの意味を深く考へながら、自分の生活をおし進めてゆく「英知」、その英知を求める生き方、それが何にもまして大切な筈ですが、それは一体いまの学問の分野

では、どこに位置づけられてゐるかといふことです。例へば法律学には刑法とか民法とかたかさんの分野がある。その中で憲法は群を抜いて大切な位置づけをもつてゐる。それと同じやうに人生の営みの中で一番大切な、人生の英知を求め、それを訓練するといふことが学問の世界では一体どこに位置づけられてゐるのか、それを考へていただきたいのです。

現在、大学教育では、社会の発展とともに社会科学としての体裁をもつ専門科目の講座が次々に増設されてゆく。しかし人生にとって一番大切なものは依然として忘れ去られたままになつてゐるのではないか。一体何故こんなことになつてゐるのか、それを考へてみたいと思ふのです。それは結局、学問は科学でなければならぬ、科学としての体裁がとつてはならないものは学問ではないといふ牢固とした考へがあるからではないでせうか。だが果してさうなのか。学問と科学はイコールでなければならぬのでせうか。

科学とは実在する事実——すなはち眞実を追求する。いふまでもなく眞実と眞理はちがふ。眞理とは理念的なもので、それは哲学的な、或は宗教的な要素を帯びてくる。しかし科学が扱ふのはあくまでも眞実なのです。すなはち科学は事実を調べてそれを記録し、その記録を整理してその中に共通した法則性を発見する。だからそれはあくまで客観的でなければならぬ。誰もが納得しうる客観性を持たなければならぬ。科学といふ学問はそれで進んで来て今日まで人類に多大の貢献をしてきたのです。ところが人間はすべて客観的な尺度によつて生きてゆ

くわけではない。十人十色とも言ひますが、十人集まればみな違ふ顔をしてゐる。といふことは一人一人がみな主観的な眞実をもつて生きてゐるといふことです。さういふ主観の交錯の中に人間社会は構築されてゐるのです。さう考へてくれば、客観的眞実を追求する科学によつて世の中を進歩させてゆくことは、今後とも無限に続けてゆくべきでせうが、それと平行して、科学を駆使する人間自身の、いはば主観的眞実とでもいふべきものを、より正しく練磨する努力がなされなければならぬ。さうでなければ、人類が眞に進歩するといふことにはならぬのではないでせうか。

主観を練磨するといふことは、主観的な判断が誰の目から見ても正しいと思はれるやうに、主観をより普遍的なものに高めてゆくといふ努力です。もつとくだいて言へばどんな人が見ても納得出来るやうな行動が出来るやうに自分を鍛へるといふことです。だがそれはどこまで行つても主観は主観です。行動の責任は結局は自分で負はなければならぬ。科学では扱へないけれども、人間としてはどうしても欠かすことのできない大切なものがある。それを追求し、鍛へてゆくといふこと、それこそ何にもまして大切な学問ではないでせうか。

現に明治維新までに日本人が呼んでゐた学問とは現在のやうに客観的眞実を追求する科学ではなく、このやうな意味での主観的眞実を追求する学問でした。すなはち「外を見る科学」に

対して「内を顧みる学問」だったと言ってもいい。さういふ学問が蓄積されて、明治以後外国の学問にとりくむ素地がつくられてゐたのです。明治といふ時代がすばらしかったといはれませんが、それは明治以前に培はれてゐた素地がすばらしかったからだと言つてもいい。さういふ素地があつたからこそ、外国の文明をとり入れるとき、無駄のないすぐれた選択がなされたと言へるのです。このやうに日本や東洋における学問とは主観の世界を徹底して訓練することだつたのです。

歴史の学び方のポイントは何か

かう考へてくると「科学」が日本に育たなかつたことも決して輕蔑すべきことではない。日本人は外を見ても常にそれを自分の内なる心につなげて見る民族的性格があつたために科学が発達しにくかつたとも言へるのです。例へば村松先生が、虫の音一つ聞いても、日本人はそれを心の中にしみじみと味はつてきた。それは外国人には到底理解出来ないところだとおっしゃいました。日本人は外なるものを観察しても、常にそれを内なるものにつなげるのです。それは科学が厳に戒めるところです。しかしそのことのもつ重大な意味を今こそ本当に考へなければいけない。そして学問はすべて科学でなければいけないといふ錯覚から一日も早く脱却しなければどうにもならぬところに来てゐると思ひます。

例へば歴史を学ぶ場合に、現在大学でなされてゐる通り、歴史上の様々な事件を科学的な立場で、客観的に処理する力を身につけることは、それはそれとして意義があることではあるが、しかしそこに生きた人の、生きた心を偲ぶ、偲び方こそ歴史の一番大切なポイントではないか。それを学ぶことによって人生の英知は鍛へられてゆくはずで、ところがそのことは現在の大学教育では殆んど無視されたままです。たしかにそのことは非常に主観的な世界ですね。主観だから人によって違ひが出てくる。Aといふ先生とBといふ先生では教へ方が当然ちがつてくるはずで、しかしそこにこそ歴史を解く一番大切な鍵があるのではないでせうか。ところが人々はその主観的なものが排除されないと学問らしくないと考へる。しかしその主観を排除しなければ学問ではないといふ、それが一つの主観ではないでせうか。そのことは誰一人として指摘しようとはしない。

もう一つ次のやうなことも考へて下さい。日本人は世界のどの民族とも違った、非常に心ゆたかな、人の心に感動しやすいといふ独自の情緒をもつてゐる。それが日本の歴史を動かして、歴史を作ってきたのですが、さういふ情緒を理解するためには、私達自身が心を動かしてそれを偲ぶ以外にはないはずで、しかし偲ぶといふことは主観的になる。だからさういふものは排除する、といふことになれば、我々の目には本当の意味での日本の歴史は見えてこないのではないでせうか。

歴史はさまざまな主観の綾なす葛藤の中にめぐりめぐって動いてきた。さういふ歴史を学ばうとする時にわれわれ自身の主観を排除してかかるといふのは極めて不自然であり、無理ではないでせうか。にもかかはらず、それがただ客観的であり、科学的であるといふことだけで、そちらの方が優位に立つものだといふ考へはどう考へてもをかしい。そこには一つの選択が行はれてゐるのですが、その選択それ自体の主観性といふ点は一体誰がどこで問題にしてゐるのでせうか。

人生の事実に直面せよ

ともかくこのやうな学問に対する誤った考へ方から、大学教育において「道——人間の生き方」を求めることが欠けて久しい年月を経過してしまつたのです。しかも今日の日本の教育界では大学の影響のもとに高校、中学、小学校の教育が組み立てられてをり、大学における学問のあり方が圧倒的な影響力をもつてゐると思はれますので、高校以下の段階においても、人間の生き方に対する考へ方が甚しく曖昧になつてしまつてゐるのです。人間が自分自身の生き方を正し、人間としての心を鍛へるといふこと、それが小学、中学、高校と積み重ねられ、さらに大学において磨きをかけられてこそ、人間は総合的に成長してゆくはずです。しかし現状はそれとはあまりに程遠い感じがします。たしかに大学改善のために大勢の人が努力してをられ

ることは存じてをりますが、結局はいま私が申し上げました、学問の意味合ひから建て直さな
い限り、それは不可能なやうです。東大でも安田講堂事件以後、いろいろな改革がなされてゐ
るやうですが、本質的な問題を放置したままに行はれる改革は、すでに作られてしまつてゐる
枠の中における多少の変化でしかなかつたやうです。このやうな現状を見てをりますと、日本
の大学を改革することは、殆んど絶望に近い感じさへいたします。

しかし日本には、仏教の言葉で「逆縁の恩寵」といふのがある。それは非常に辛い目にあつ
たら、そのことが逆に身のためになる、仏道に入る機縁になるといふことですが、この絶望的
な状況が、日本の将来にとって「逆縁の恩寵」なのかもしれない。とにかくどうにかして道を
開かなければいけないのですが、ここで考へなければいけない第一の問題は「価値観の再検
討」といふことです。科学文明に幻惑されて人間の精神的価値が混迷の淵をさまつてゐる。そ
の中で人生にとって一番大切な価値は何かといふことを考へなければいけない。その際どうい
ふ態度でそれに臨んだらいいかが問題になつてくるわけですが、それには人生の事実を重視す
ること、言葉をかへていへば権力とか平和とかいふ既成の概念に自分を托することをやめなけ
ればいけません。われわれはともすれば概念に翻弄されて生きてゐるわけですが、そのやうな
概念の泥沼の中から一人一人が自らのかけがへのない人生を救ひ出すこと、概念的な用語を出
来ただけ使はないで政治、教育を語り、人生を語るやうにつとめて、概念を通さない人生の事

実そのものに直面すること、それが価値の再発見の際の不可缺の条件です。

さらに大切なことは人生の事実はただ一つしか實在しないといふことを確認することです。われわれは一つのものについて幾つもの見方をもつことは出来るけれども實在する事実は一つしかない。その事実をどうして正確に知らうかといふのがわれわれの努力の目的でなければなりません。このことと関連しますが、實在といふものはやはり自分が決断を下さなければ近づけないといふことも知るべきです。いつまでたっても両方の意見を聞かなければ気がすまないといふ人がありますが、さういふ人は一見實在に近づく位置にありさうですが、実際はいつまでたっても、真実に目を開くことが出来ず、結局傍観者で終ってしまふ。實在を自分の目で知らうとする意欲と決断をもたない傍観者には、真実は何にも語りかけてはくれないのです。もう一つ申し上げたいことは対象に対する深い愛情がなければ、實在は見えてこないといふことです。例へば日本の新聞は北ヴェトナムからの報道ばかりを掲載する。しかしそれでは真実は伝はらない。人類を愛するといふなら、イデオロギーの対立は対立として、南も北も同じ心で見なければならぬ。到底真実はわからない。それを簡単にイデオロギーにふりまはされて南を軽蔑し北を応援する。それは世界のすべての国々が全力をつくして生きてゐるといふ現実に目をふさいで、それを手軽な概念でわりきって茶飲話にするやうな態度と言はなければなりません。真剣な生き方を茶飲話にするやうな、愛情を喪失した不真面目な者の目には、決して真実は見



えてこないのです。

さらにその実在なるものは、固定的に停止してゐないといふことにも注意していただきたい。いま判断を下した今日の実在が次の瞬間から移り動いてゐる。それが世の中の姿なのです。だから固定した判断で物を見ることは許されぬ。さういふ意味からしても、イデオロギーの角度からのみ世の中を見る風潮の危険性について、我々は慄然たる思ひを禁じ得ません。

集団の中から自己を救ひ出すために

実在は一つしかない、実在は常に動いてゐる、そのことをよく心に定めて、それからわれわれの価値観の再検討といふ問題にとり組んでゆかなければなりません。そのためにはくりかへして申し上げてをりますやうにイデオロギーから離れて一人の人間に立ち戻らうとする努力が要求されるわけですが、それとともに、

最初に申し上げましたやうに、私達は私達を包みこんでゐる集團域、職域、組合域……その他もろもろの規制の中から、自己をとりもどすやうに努力しなければなりません。すなはち私たちは集團の要請と自分自身の生き方との矛盾にぶつかって、そこで一つの選択に迫られることが多いのですが、その場合、常に選択の自由をわが身に保留しておくこと、自分の価値判断を集團域なり、組合域なりに托してしまふといふやうなことをしないことです。殊に国鉄などで繰り返し見られる順法闘争などを見てゐると、その中で組合員一人一人の人間の価値打ちといふものはどうなつてゐるだらうか、折角この世に生まれてきた人間の貴重な生命と判断力といふものは、彼らの場合、一体どうなつてゐるのか、本当に情なくなるやうなおもひをするときがあります。これに関連しますが、自分が屬してゐる組合などの集團が一つの行動をおこすときには、その目的や意図を正しく把握するやうにする力をしっかり身につけなければいけない。その判断の有無が、組合員一人一人が正しく本当に、生きてゐるかどうかといふ証拠になるのです。さういふ大切な曲り角で、自分自身の生き方をなげやりにするのではなく、集團の中から何とか自分自身を生き返らせるやうに努力しなければなりません。

遠因と直接の原因を分離せよ

さらに遠因と直接の原因とを同格にしないこと——これも現代の問題として非常に重要なこ

となのです。たとへば公害問題などの場合いつもくつついて来るのが、保守政権が政治を担当してゐるからとか、現代の日本が資本主義社会だから——といふ考へです。このやうに人々は直接原因を固定されたイデオロギーによつて、直ちに遠因と結びつけて論議する。かういふ考へ方からすればあらゆる問題が、体制か反体制かといふ問題に結びついて、結局反体制運動をやりさへすれば皆片づいてしまふといふことになるのです。

国防の問題でも同じことで、国防は大切であつても、資本主義社会といふ体制の中にある人間のやることは信用出来ないといふ考へ方が大前提として存在してゐますから、同じ日本人同士が信用できなくなつて、現体制下ではすべての国防は戦争につながる、従つて軍隊は一切まかりならぬといふことになる。結局はすべて資本主義体制打倒といふことになるのです。かうして人々は問題を直接に具体的に解決しようとする努力を放棄して、すべてを遠因にむすびつける。例へばあの街頭のデモを御覧なさい。二十を過ぎた位の若い女性が車に乗つてマイクで言葉を流す。するとそれに唱和しながら大の男がプラカードをかついで道を練り歩く。マイクの女性は具体的な問題を契機として、それを遠因にむすびつけ、その遠因をマイクで流してゐるのです。それに唱和して大人がぞろぞろと町を歩いてゐる。もしも地球の外のどこかに生物がゐて、この様子を見たとすれば、この不様な姿を一体何と思ふでせうか。要するに彼らは集団の奴隷であり、イデオロギーの奴隷であるといふより言ひ様がないのです。

たしかに世の中には沢山の欠点がある。私達はそれを一つ一つ直していかなければならないのですが、それをすべて遠因にむすびつけて行けばとんでもないことになってしまふ。遠因は遠因として、政治の問題は政治の問題として別の場でそれを討議すべきなのです。ともかく現実社会の中のものすべての問題を遠因に結びつけるといふ風潮からわれわれ自身を救ひ出さなければいけないと思ひます。

日本が戦争に負けたといふことについてはいろいろ反省すべき点があるでせうが、その一つは軍部の行き過ぎに対して政治家がこれを正さなかつたといふことがある。軍人が政治に関与してはいけないといふことは誰でも知つてゐた。しかし軍人の剣の前に皆が萎縮して、集団の奴隷になりかけてゐたのが日本の政治家だった。さらに大切なことは、さういふ政治家や軍人の犯した誤りを正すのが学者の任務であり、学問の役割りだったのであるではないでせうか。ところが学者は何にもしなかつた。仮に軍人が責めらるべきであるにしても、その当時の政治家が責められないでいいといふことには全くならない。それと同時に、といふより、それにもまして当時の学者が最も責めらるべきものであつたといふことを否定することは出来ません。にもかかはらず、当時やるべきこともしなかつた学者たちが、終戦後に進歩的文化人として登場し、今になつて戦時中の軍部のあり方を口を極めて罵つてゐるといふのが日本の実態なのです。これも所詮は日本人が集団の奴隷になり、イデオロギーの奴隷になつて、自分自身の生きた心

で、現実の人生に正面から取り組まうとしなかったために生まれた現象だと言はなければなりません。

吉田松陰の言葉に「天下の人方且に富貴に淫れ貧賤に移り、安楽に耽り艱難に苦しみ、以て其の素を失ひて、而も自ら抜く能はず」（講孟餘話序文）といふのがありますがこの「抜く」といふ言葉に注意していただきたい。物質生活の渦の中ではば物質の奴隷になってゐる、その中から自分を救ひ出すこと、自ら抜くこと、そのためにはどう生きてゆけばいいか。それについて松陰は深くおもひめぐらしながら孟子を読んでいくわけですが、このことは松陰にかぎらずそれが昔から人類が常に苦しんできた問題だと思ふ。それは、現代では集団域の中から、或はイデオロギーのわなの中から自らを抜くことにも通じるのです。その自らを抜く努力の中に人間が生きてゆく知恵がひそんでゐるはずで、その知恵を鍛へてゆくこと、それが学問の中でどのやうに位置づけられてゆくのか、私が申し上げたいのはそのことです。

われわれのいのちを日本語に托さう

以上のことに真剣にとり組まうとすれば、まづ第一に直面するのは「ことば」の問題です。「ことば」、具体的には、私たちがいま使つてゐて、それなしにはお互ひに生きてゆけない「日本語」といふものについて本気で考へてみる必要があると思ふのです。

いふまでもなく「日本語」といふものは、自分で作り出したものではないので、それはわれわれの祖先のころの無限のつみかさねの中に生まれてきたものです。われわれはそのことばを使って何かを要求したり、自分の意志を人に伝へたりしてゐるわけですが、われわれは、その言葉の中に生きてゐる。それなしには生きられないといふことをよくよく考へていただきたい。日本語の中に生きてゐる人、それが日本人なのです。それが日本人といふものに対する最も正確な定義であると思はれます。さてその日本語では、ものごとを概念的に把握するのをさけるのです。人間が楽しいことや、辛い思ひを経験する場合には沢山の感じ方がある。日本人はその一つ一つの違ひを様々の言葉で実に細やかに表現してきた。かういふ経験の場合は、かういふ言葉でないと気がすまないと考へた。それは一つ一つの経験の微妙な違ひを確認してきたといふことでせう。鋭い観察がなければ、違った言葉が無数に生まれて来るはずはない、といふことは我々日本人は自然の変化に対しても、或は人の心の動きに対しても、細かな観察をしてきた民族だと言へるのです。

従つて我々が日本人として生きてゆくことは、この細やかな大和言葉の美しさを身につけ、心をこめて大和言葉を話すことに他ならないのです。そのためには先程から申し上げてゐるやうに概念やイデオロギーの中に我と我が身を托することをやめなければいけないのです。

私がイデオロギーから抜けてほしいと言ふのは一つのイデオロギーから抜けなさいと言って

ゐるのではない。イデオロギーそのものに人生を、青春を托するといふことがどんなにつまらないかといふことを言つてゐるのです。諸君の命を直接に、言葉に、日本語に托していただきたいのです。

科学的思考だけでは天皇や日本のことはわからない

さてこれまでお話ししたことをふまへて天皇の問題にはひつて行きませう。先程申しましたやうに日本人は常に外のものを内心につなぐ生き方をしてきましたし、概念的にもものを見るのではなく、具体的にもものを観察するといふ強い、現実的な性格をもつてゐた。だから日本には科学が発達しなかつたとも言へるのですが、その科学が発達しなかつた日本に続いてきたのが天皇制だつたといふことをまづ考へていただきたいのです。ところがその科学的頭脳、或は概念的図式で天皇制の可否を論じようとしてゐる人々が非常に多い。例へば天皇論をはじめるときに、人々は先づ第一に天皇制がこの日本にあった方がいいかどうかといふ論議からはじめ、これが概念的思考の典型ですが、元来天皇制といふものは、大勢の人々が討議をして、それでスタートしたものではありません。いつの間にか生まれそして今日までつづいてきたものです。普通のどんな家でも三代続くことさへ難しいといふ、それが百二十四代も続いて今日に至つてゐる。それは一体何故だらうといふ疑問だつて当然出てくるはずで、しかしさういふ疑問を解くた

めには科学的な頭脳だけではだめだと思ふのです。

国家の問題にしても同じなので、日本人が日本といふ国について正しい認識を持ちたいならば、科学的思考の上に立つ普遍的な国家論に準拠してゐるだけでは不可能でせう。それでは日本のほんの一部しかわからないのです。

元来この地球には昔から現在まで無数の国家が存在した。しかしその国といふのは、一つ一つ全く別々の特異な集団であつたのです。ところが科学としての国家論は、その中に共通した法則性を発見し、それを以つて国家学の論述を体系づけていくし、国連などでは一つの国は、一票の投票権しかないといふことで、どこにあるかわからないやうな国も、アメリカもソ連も中共も日本も対等の資格で構成されてゐる。それが一応の拠りどころにはなつてゐますが、考へてみれば、国それぞれには、それぞれの意味づけがあるはずで、アメリカと日本との国の意味づけは違ふ。それを同じ国家といふ概念の中に日本を入れてしまつて、安心するわけにはいかないはずで、さう考へてみると、日本といふ国の意味づけを深くほり下げる学問が、国家は人類の一部だと位置づけていく科学としての学問とは別個に存在し得るし、むしろその方がはるかに大切だといふことがわかつていただけのではないでせうか。私たちの祖先は命をかけるに価するすばらしい文化と言葉とを、今日まで蓄積してくれたのです。それを思へば日本人にとって日本は国家であると同時に世界だと言つてもいいのではないでせうか。世界とい

ふイメージと、国家といふイメージと、さらに人生といふイメージが重なって一つになり得る国民としてわれわれは生きてゐる。われわれ日本人はさういふすばらしい恩恵に浴してゐるのではないでせうか。

それを無視して、国といへば日本もアメリカもソ連も皆一緒にして、国家は権力機構だ。だから悪だといふやうな論理を一方的にすすめてゆくなら、それは議論も何もあつたものではないと思ひます。

天皇のことも同じなのです。君主論といふもので天皇を論じることが一部分可能でせうが、天皇そのものは日本にしかなかつたものでせう。日本にしかなかつたものは、日本の歴史といふ独自の世界で、きめ細かに追求する以外にはない。さらに大切なことは日本語を味識する力を身につけることです。日本語を味はひ、日本の歴史を偲ぶ力をもたないままで、単なる科学的な認識で天皇の問題を解かうとしてもそれは不可能です。天皇を知るためには、御歴代の天皇方がどんなお心で生きてこられたかを知らなければならぬ。そのためには天皇方がおつくりになつた沢山の和歌が残つてゐるのですが、そのお歌の中の一つ一つのお言葉を味はなければ、何故日本人が天皇を大切にしてきたかを理解する方法は立たないのです。さらに天皇をお慕ひした数々の臣下の歌や言葉が残つてゐる。それらの言葉を理解する能力、その言葉を通して先人の心を憶念する力によつてのみ、私たちは何故昔の人が天皇を大切にしたのか、何故

天皇が存続してきたのかを理解することが出来るのです。これが天皇を論ずるための不可欠の大前提なのです。天皇ご自身が残された文献に一言もふれることのない天皇論などといふものは、その論理がいかに巧妙であらうと、「科学的」ですらあり得ないと思はれます。

天皇の問題で考へるべきこと

なほ天皇の問題について申し上げたいことは沢山ありますが、そのうちいくつかの問題にしばって申し上げます。一つは最近「御歴代の天皇方が立派であったことはよくわかるが、しかし、天皇はこれまで随分利用されてきた。さういふ危険性のあるものはなくした方がいいのではないか」といふ質問をうけましたがそのことについて述べてみたいと思ふ。問題は二つあるので、その一つは質問の中にある「が、しかし」といふことです。その人は天皇は立派だと言つてゐるが本当にわかつてゐるのだらうか。充分にわかりもしないで、論理だけをずんずん進めてゐるのではないか、それでは全然話にならないといふことが一つ。もう一つは天皇は利用された、悪用されたといふが一寸待つていただきたい。世の中にはいいものと悪いものとがごっちゃに存在するのだが、世の中をよくするために、いいものを大切にしておいて悪いものをなくす様に努力する以外にはないか、さういふ簡単な大前提をもう一度考へ直すべきでせう。悪用されるといふ、その悪の指摘を怠つて、利用される危険性のあるものをすべて排除す

ればいいといふやうに論理を進めてゆくなら、世の中は一体どうなるのか、さういふ考への中には、要するにいいものを助けて悪いものをなくさうとするやうな「志」がないのですね。そのことをよく考へていただきたいのです。

もう一つ、申し上げたいことは現在「しか象徴論」といふ言葉があるさうです。天皇は象徴で「しかない」といふことださうです。さういふ考へ方があるから、いつか国会で問題になったやうに天皇が政治のことに発言なさると怪しからんといふことになるのでせう。しかし実にかしいことですね。どうして天皇様だけが、軍事を語り政治を語ることが出来ないものでせう。それは天皇は象徴でしかないのだから、人間扱ひをしないといふのに等しいではないか。私も現在の憲法はあのままがいいとは思ひませんが、しかしあの第一条に述べてあることは、あくまでも天皇は象徴であられるといふことであつて、天皇は象徴でしかないなどといふ解釈が出てくる理由は全くありません。さういふことが白昼公然と論じられてあるところに、現代日本の思想界のとんでもない混乱の状況が如実に現はれてゐると思ひます。

ここで明治天皇の御歌を数首御紹介しておきませう。最初は「歌」といふ題の御歌二首
おもふことうちつけにいふをさなごの言葉はやがて歌にぞありける

おもふこと思ふがまゝにいひてみむ歌のしらべになりもならずも

先程も申しました通り日本人の命を知り、魂を知るよすがは大和言葉しかないのだから、そ

の言葉に自分の心を寄せる修行をつまうではないか、それが歌を詠むといふ修練だとおっしゃってをられるのです。次は虫の歌

さまざまの虫のこゑにもしられけり生きとしいけるもののおもひは

かれがれになりぬる庭の虫のねはなかな夜よりもさびしかりけり

日本では虫を昆虫箱に入れて科学的研究の対象にする学問は発達しなかつたけれども、日本人は虫の声を内なる心の響きにつないで長い歴史の中を生きてきた。この二首の御歌にはさういふ日本のところが的確に表現されてゐます。自然は人間が駆使すべきもの、利用すべきものといふ感覚の中に生きてゐる現代の風潮に対して、大自然の中に生かしていただいてゐるといふ自己把握、己がいのちを空の雲の動きに、雨の音に、嵐の響きに、虫の音に托しながらより豊かに心を鍛へていかうとした大和島根の人々、その人々が生み出した言葉、その言葉を味はふ中に現代の問題を解決する一つの重大な鍵がひそんでゐるやうな気がするのです。さういふ意味からしてもこれら御歌一つ一つを正確にうけとめてゆけば、そこには政治学的な、宗教的な、人生的な、あるひは哲学的な意味までふくめて様々な問題を拾ふことが出来ると思ふのですが、このやうなことが現在では学問の世界から完全に除外されてしまつてゐる。それをいま何とか元に戻して、その価値にふさはしい位置づけをしなければいけないと思ひます。

不断改革の道

最後にこのやうな様々な問題をかかへた教育の世界、大学教育の行詰りを解決するためにはどうすればいいか、その際に考へられる二つの道筋についてお話しておきたいと思ひます。その一つは大きな権力の力で、それを一気呵成に入れ代へてゆくといふ道です。これは殆んど絶望的な状態である現在の打開策としては非常に魅力ある方法ですが、力をもって行ふものは必ず力によって潰える。革命によってとられた政権はいつの日か革命によって転覆される運命にあります。

もう一つの道はどんなに迂遠の策であっても、遠いところへ行くのに本当に牛の歩みのやうな一步一步の歩みであつても、一つ一つ悪いものを排除していいものを立てていくといふ生き方です。日本人はいかなる危機に際しても、前者のやうな、激しい理想の追求といふ形はとらず、常に後者の、不断に改革してゆくといふ道をとってきた。そこに民族の英知が働いてゐたと言つてもいいでせう。前者の方法に頼れば、必ず無理ができ、弊害が続出して究極の目的は達成されないけれども、後者の道を一步一步ふみしめて行けば、いかに日本の教育や学問が危機的状况にあつても、必ずや一つ二つと新しい息吹きが生れて、それが一波万波を呼ぶことになつてゆく、さういふ意味においては、世の中の危機がどんなに激しいものであらうとも恐れる

ことはない。われわれが新しくスタートする場所はどこ以外にはないと考へてをります。

（国民文化研究会理事長・亜細亜大学教授）

言^{こと}
靈^{だま}
の
幸^{さき}
は
ふ
国
の
信

夜
久
正
雄



棟方志功・母（聖徳太子）

(一)

午後の講義といふことでお疲れのところではせうが、しばらくおききたいと思ひます。午前の小田村先生のご講義を私もうかがひまして、——われわれが自分たちの生きてゆくことをよく深く考へ、さうしてその上に立って自分の生活を進めてゆく英知を養ふこと、それが真の学問である、その真の学問といふものは、歌を詠むことの中にあるといふお話をうかがひました。私もよくその意味がわかりました。

歌を詠むといふことはみなさん昨日、全員が修練したことですけれども、自分の心にある心持を言葉に表はすといふことですが、それは言ふは易くしてなすことのまことにむづかしいことです。自分が感じてゐる心持をありのままに言葉に表はすことはむづかしいことです。言葉に表はすと、その表はした言葉と自分の気持が違つてゐるのがわかる。そこで次々に言葉を選んで気持を表はさうとする、しかし、途中でいろいろの雑念がはひつてきます。上の句だけではできたけれども、あと下の句が出来ない、適当にごまかしておかうとか、——かういふのは比較的純粹の方ですが、何かいい、うまい言葉を使って洒落た歌を作つて驚ろかしてやらうとか、ほめられたいとか、かういふことを詠むと人から笑はれはしまいかとか、いろいろな雑念がはひつてくる。あるひは、とても駄目だから途中でやめてしまはうといふやうなこともあ

る。しかし、さうした雑念を克服して表現に専念することがわれわれの心に形を与へて、自分で自分の心を自覚することを可能にします。自覚とは「さとり」といふことで、自分の気持を言葉にあらはすといふことは実に大切な、人間が精神的に生きてゆくうへの根本の心の修練であります。松陰先生のお言葉の中にも「辞を修め誠を立る、是君子の学なり」といふ言葉があります。（『講孟余話』第六章）『神皇正統記』にも「『言語は君子の枢機なり』と言へり」とあります。「乱臣賊子と云ふ者は、そのはじめ心ことばをつつしまざるよりいでくる也」と言ふのです。

小田村先生のお話の中にもございましたが、明治天皇さまは約十万首に近い歌をお詠みになってをられる、実にたくさんのお歌をお作りになってゐらっしゃるのです。数だけ見ても大変なことなのですけれども、その一首一首といふものがどういふふうにして作られ



たかといふことを、苦勞して歌を作った経験をふりかへつてみて、そのむずかしさ加減を考へてみますと、そこには氣の遠くなるやうな、非常な心の修練が行なはれたことが想像されるわけでございます。

しかも明治天皇おひとりがさういふ歌をお作りになつたのかといふと、さうではなくて、日本の歴史をふりかへつてみますと、御歴代の天皇さまはじめ無数の祖先が、古代からこの道を歩いてきたことがわかります。歴代天皇の御歌については、最近刊行されるはずの小田村寅二郎、小柳陽太郎両先生の『歴代天皇の御歌』によつてその一端をうかがふことができませうが、その何十何百倍かの御製が残されてゐるのです。また各時代の代表的人物も、ふり返つてみますと、そのほとんどの人物が歌を詠んでゐます。歌をよむといふことを教養の基礎にしてゐたのです。（山田輝彦先生との共著国文研叢書No.12 『短歌のすすめ』同No.13 『短歌のあゆみ』参照）

ところが、明治の中年以降、当時の指導的階層であつた大学出身者の教養から「和歌」は排除されてしまひました。どうしてさうなつたかは、いろいろ理由があるのでせうが、その一つとなつた象徴的な事実をお話しておきます。『古事記』を英訳したバジル・ホール・チェンバレンは、イギリスの東洋学者で、日本文化の大研究者として、明治十九年から二十三年まで東京帝国大学で博言学（言語学）及び日本語学を講じました。明治以降いはゆる近代日本の国文

学・国語学・国史学・言語学は、このチェンバレンの影響の下に展開したのです。そのチェンバレンは『日本事物誌』(Things Japanese)の中で、和歌の項目をあげ、「明治の変革以前の日本の紳士たちの教養の中心は和歌であったけれども、明治になってその伝統はすてられてしまった。現在の紳士たちは歌を詠むことをしない」といふ意味のことを書いてあります。これはひとつにはチェンバレンに和歌の価値がわからなかったことに原因があるのですけれども、日本人の教養と学問とにとっては大変なマイナスとなったのです。明治以来の学問及び大学教育はほぼこの説を踏襲して、学問と和歌とは無縁なものとなってしまひました。(国文研叢書 No.10『欧米名著邦訳集』B・H・チェンバレンの「英訳古事記」参照)

(二)

そこで、歌を詠むことの意味について、それから言葉の問題、かういふことについての文章をみなさんと一緒に読んでみたいと思ひます。最初に読んでいただくのは、必携図書の上正一郎先生の『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一七八頁からです。そこに明治天皇の御製が出てきますが、歌を読むには声をあげて読むことが歌の感じを味はふうへで最も大切なことですので、合唱ではありませんから、バラバラで結構でございますから、それぞれ声を出してお読みください。

ふみをひらきてむかしをおもふ
披書思昔

のこしおく書をしみればいにしへの人の声をもきくこゝちして

（明治三七年）

披書知昔

あらはしゝ書を教へとなしにけりむかしの人のこゑはきかねど

（四二年）

月似古

いにしへの人のことばもうたひけりそのよに似たる月にむかひて

（三六年）

披書知昔

文みれば昔にあへるこゝちして涙もよほす時もありけり

（三六年）

歌

まごゝろをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

（四一年）

新しきふしはなくとも呉竹のすなほならむ大和ことの葉

（三八年）

すなほにてをゝしきものは敷島のやまと詞ことはのすがたなりけり

（三九年）

事もなくしらべあげたる言の葉の花にぞ匂ふ国のすがたも

（四〇年）

現身うつつまの人のまことを万代よろづよにのこすや歌のしらべなるらむ

(四〇年)

まごゝろを限りなき世にとゞむるもやまと詞のいさをなりけり

(三九年)

ここに大御歌を引用しまつることは決して単に研究方法の問題のためではない。日本精神を綜合具現したまひし大御心おおみこころを仰ぎまつる国民のころは、此に大御歌を拝誦して人生きんじゆうの帰趨ききうを求めまつるのであって、我らの学びの道もこれによって亦また自ら導たづかるるのである。……一たびきけば忘れざるまことの歌、うつそみの人のまことを萬代にのこす歌のしらべ、それは即すなはち目にみえぬ人のころのまことがもとであることを示し給たまふのである。切實しんじつ真摯しんしの内心こころに伴ともふ自然簡素の表現に国民精神のまことが示さるのである。故に一切の言語問題は常にその表現せらるべき内的體驗より開明せらるべく、此に我らは自ら足らばぬ姿あやに覺めめ、虚偽の技巧空虚の概念を去って、眞實の生命に、またそれを現はすまことの言葉に向はねばならぬのである。国の姿をあらはすごときまことの言葉を理解し、濁悪の世を導く如き言葉のいのちを味識することは、眞に人生を窮めたる偉大悲壯の精神にめざむることである。生死無常の人生ははかなきものであるけれども、人のころのまこととは言葉に残されてとこしへに伝はるのである。うつしく見ぬ人も言葉によりてその心の声を聞き得ることを示し給ふのである。この人の心のまこととは、濁乱の人生にめざめて求道精進し、蒼生と苦楽を同じうして國にいのちをささげしごとき、全体人生の情意に徹入せしところの「すなほに

てを、しき」人のまごころである。わが生のつたなくはかなきをかへりみてこのとこしへの世を照す如き人のところをその残されしことばに求め、此に感応相称の世界を見出すとき、有限の個人生命が無窮の全体生命に帰入するのである。ここにまごころを限りなき世にとどむるやまと詞のいさを示したまひ、また世になき人のことばもありし日の如き月の夜にうたはせ給ひ、こころのまごとのつきざるいのちをよびさまし給ひし大御心を仰ぎまつるのである。……

ここに歌を読むことの意味——真心をあらはす歌を読んで真心を学んでゆくといふこと、その真心にあはせてめいめいが歌を詠んで——「感応相称」といふ、聖徳太子のうつくしい御言葉ですが、共感共鳴の世界に己れを高め、心を通はせあって人生を進んでゆく道を示してをられるのです。かういふ歌の道を、明治天皇さまは「敷島の道」とも「言の葉の道」ともおっしゃってをられます。

このことは遠く日本の歴史伝統を遡って、記紀万葉の時代から語りつぎ言ひつぎ伝へられてゐるのであります。その例として、山上憶良の「好去好來の歌」といふ長歌の中の「皇神の厳しき国、言靈の幸はふ国」といふ言葉を考へてみたいと思ひます。

山上憶良「好去好來の歌」(『万葉集卷五、歌數番号八九四』)

神代かみよより 言いひ伝つて來くらく そらみつ 倭やまとの国こは 皇神すめかみの 嚴いつくしき国こ 言靈ことたまの 幸さきはふ国と語りつ
 ぎ 言いひつがひけり 今いまの世よの 人もことごと 目の前まへに 見みたり知しりたり 人ひとさはに 満みちては
 あれども 高光たかひかりる 日ひのみかど 神かみながら 愛めでの盛さかりに 天あめの下した 尽つし給たまひし 家いへの子と 選えびた
 まひて 勅旨おほみこといただ 戴かぶき持もちて 唐からの 遠とほき境かたに 遣つかはされ まかりいませ 海原あまのつちの 辺へにも 沖おきにも
 神かみづまり うしはさいます 諸々もろもろの 大御神おほみかみたち 船ふねの舳へに 導みちきまをし 天地あめつちの 大御神おほみかみたち
 大和やまとの 大國靈おほくにたま ひさかたの 天あめのみ空そらゆ 天翔あまがけり 見渡みわたしたまひ 事こと了はり 還かへらむ日には 又また
 さらに 大御神おほみかみたち 船ふねの舳へに 御手みてうちかけて 墨繩すみなはは 延のへたる如ごとく あちかをし 值嘉ちかの岬さき
 より 大伴おほともの 御津みつの浜はまに 直泊ただはてに 御船みふねは泊はてむ 恙つつがなく 幸さきくいまして 早はや歸かへりませ
 天平五年三月一日(良の宅に對面して獻ることは三日なり) 山上憶良謹みて大唐の大使
 卿きみの記室きしつに上ある

この長歌は、天平五年三月一日、山上憶良が作って、その三日、大唐の大使卿（遣唐大使）多治比真人広成に奉ったものです。「記室」といふのは書記の意味です。直接は恐れ多いから書記を介して奉る、といふ意味で、後の宛名書きの脇付けの「侍史」などに当る言葉です。

山上憶良のことは、本合宿の導入講義で小柳先生がふれられましたので、みなさんにも親しい人物になってゐると思ひますが、奈良時代の官僚で、大思想家大歌人といつてよい人物です。若い時分、遣唐使の第四等官として唐に行きました。その遣唐使は粟田真人を総裁とする遣唐使で、文武天皇の二年出発し、四年に帰京したのです。白村江戦役後の日唐関係を正常化する目的で渡唐し、唐の高宗の皇后の則天武后に面接して、平和克復の大任を果したものと考へられてゐます。その時憶良の作った短歌が伝へられてゐます。

いざこども早く大和へ大伴の御津の浜松待ちこひぬらむ

といふ歌です。それから約三十年経つていまこの長歌を憶良は遣唐大使に奉ったわけです。當時憶良は七十才くらゐと見られてゐます。

この長歌のはじめの一節、

「神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 倭の国は 皇神の 巖しき国 言靈の 幸はふ国
と 語りつき 言ひつがひけり 今の世の 人もことごと 目の前に 見たり知りたり」

が特に重要です。現代語に訳してみます。

「遠い神のみ代から言ひ伝へて来たことには『そらみつ（枕言葉）大和の国は皇神の厳しき国、言霊の幸はふ国』と語りつぎ言ひ継いで来たのである。現代の人々もこの事実を目前の事実として見てゐて疑ふものはない。」

さて、その語りついで来た言葉といふのは「大和の国は皇神の厳しき国言霊の幸はふ国」といふのです。「皇神の厳しき国」とは、皇祖の神の道の厳しくいまに及んでゐる国といふことです。皇祖の神の道といふのは、天照大御神のお言葉によって日本の国は天照大御神の御子孫である天皇が統治なさる国であるといふことです。小柳先生の引用された憶良の「惑へる情をかへさしむる歌」（『万葉集』巻五・歌数番号八〇〇）の中の言葉で言へば、「天へゆかば 汝がまにまに 地ならば 大君います この照らす日月の下は 天雲の 向伏す 極み 谷ぐくの さわたるきはみ 聞き食す 国のまほらぞ」といふことです。

さて、この「皇神の厳しき国」といふ政治的な意味での国がらを示す言葉と対句にして「言霊の幸はふ国」といふことにさらに深い意味があると思ひます。「言霊の幸はふ国」といふのは、言葉に霊力がある国といふ意味ですが、この場合には呪術的意味をはなれて「言葉のいちががよふ国だ、まごころの言葉は通ずる国だ」といふ意味です。さらにつつこんで考へますと、これは「和歌の盛んな国」といふ意味になります。

それは憶良より一時代前の「柿本人麿の歌集の歌に曰く」といふ歌をよむとわかります。それ

は次の歌です

柿本朝臣人麿の歌集に曰く〔「万葉集」卷十三、歌数番号三二五三、四〕

芦原のあしはら水穂の国はみづほ 神ながらかみ 言挙げせぬ国ことあげ 然れどもしか 言挙げぞわがすることあげ 言幸くことさき 真福くままささき

せとつづみ 恙なくささき 福くいまさばありそなみ 荒磯浪あらいそなみ ありても見むとももへなみ 百重波ちへ 千重波にしきことあげ 言挙げす吾はことあげ

(言挙げす吾は)

反歌

敷島の倭しきしまの国は言靈のたすくるやまと (さきはふ) 国ぞま幸くありこそ

歌としては憶良の歌よりも簡潔で無駄がなく力強いと思ひますが、この歌によると、日本の国は言靈の幸はふ国であるから、まごころから「幸くありこそ」——お大事に！と言ふことは必ず実現されるにちがひない、といふのですが、それは歌にうたはれたことばなのです。つまり、「言靈の幸はふ」といふのは「まことの歌」といふことになるのです。したがって「言靈の幸はふ国」といふのは「まことの歌の心の通ずる国」といふ意味になります。この人麿歌集の歌を承けついでゐるのが憶良の歌です。そこで憶良も、遣唐使の幸をいのる心を歌によん

だのです。

『万葉集古義』を著作した鹿持雅澄は、この言葉を日本の国がらを示すものとして「総論」に取りあげ「その言靈のさきはひによりてぞ、皇神のいつくしき道もうかがはれける。されば皇神の道をうかがふには、まづ言靈のさきはひによらずしては得あるまじく、言靈のさきはふ由縁よしをさとるべきは、この万葉集こそ又なきものにはあれ。から国に心よするともがらの、聖の道を大ろかにして詩文をむねと学ぶをいやしむとは、いたくさまかはりたることなり。」と言つてゐます。期せずして、さきほど小田村先生の御講義にありました、言葉についての修練なくして天皇さまのお心がわかるはずはないではないか。歴代の天皇さまがたが「ことのはの道」の修練をつづけてきてをられるのに、その修練をしないで、それで天皇を論ずるなど全くをこがましいと言はれた趣旨と同じです。

日本の国が天皇が統治なさる国であるといふことと和歌の道をつたへる国であることとは、一つの文化の表と裏、両面を表はしたもののなのです。ですから、歌が衰へれば天皇によせる国民の心も衰へるし、まことの歌が盛んになれば天皇のお心が国民の心によく通ずる、さういふ時代になるのだといふ意味で、この言葉が使はれてゐるわけでございます。もつともこれは歌を作らないものは非国民であるといふやうなことを言ふのではありません。しかし、自分でつくらなくてもいいですが、どんな歌を読んでも何の感動もないといふのでは、智能が劣つてゐ

るのか、あるいは精神的には不具であるといふことになりませう。教養に欠陥があるのです。大学教授などの中にはえてしてさういふ人がゐますから注意しなくてははいけません。

（四）

さきほど『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一節を読みまして、「わが生のつたなくはかなきことをかへりみてこのとこしへの世を照す如き人のところをその残されしことばに求め、此に感応相称の世界を見出すとき、有限の個人生命が無窮の全体生命に帰入するのである」といふ黒上先生の文章を読みましたか、これこそ「言靈の幸はふ国」の解説であると思ひました。「感応相称の世界」とはいはゆる心絃共鳴の世界の意味ですが、黒上先生が特にここに聖徳太子の好まれたこの言葉をお使ひになつたのには深い意味があります。元来「感応相称」とは、「衆生の感に対して仏が応現する」といふことです。まことを求める心とまことの言葉とがひとつになる一体感をあらはす言葉です。まごころの通ふ世界といふことです。聖徳太子が憲法第一条に示された「和」とは、このことをいふのではないでせうか。

聖徳太子憲法第一条の「和を以て貴しと為す」の御言葉は人口に膾炙してゐますので、「和」とは何かといふことはさまざまに論議されてゐます。儒教の文献とも仏典とも中国天子の詔書とも比較されて精細な研究がなされてゐますが、一番大切なことは、この「和を以て貴しと為

す」といふ文を、まず太子の文章全体の中で、受取るといふことです。「和を以て貴しと為す」（以和為貴）といふ文だけでしたら、漢籍の中にある文と同じですから、それだけの意味しかありません。第一条の最初に置いたところに、その強調があるわけですが、それ以上に内容を理解することはできません。そこで「和」といふ言葉を、「平和」とか「調和」とか「和合」とかいろいろにかへてみてその中から、自分の好む概念をとり出さうとするのです。それでは、ただ自分で考へてゐるだけで、聖徳太子がどうして「和を以て貴しと為す」と言はれたのかわかりません。

そこで、少くともこの「和を以て貴しと為す」といふ言葉は、第一条の中で解釈されるべきですし、また十七条の他の条との関連の中で解釈されねばなりません。さらにさかのぼれば、聖徳太子の御著作全体の中で、まずこの「和」の意味が問はれるべきでせう。これをなさったのが黒上先生ですが、いまは、この「和を以て貴しと為す」といふ文は、これからだけではなしに、その内容は、第一条の後の方に示されてゐるといふことを指摘するにとどめます。さう考へて、第一条を読んでください。『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』二三四頁です。

一に曰く、和を以て貴しと為し、な 忤ふこと無きを宗と為す。さか 人皆覚あり、たひら 亦達れる者少し。是を以

て或は君父まつろに順はず、乍たちまち隣里たがに違ふ。然れども上やはら和ぎ、下むつ睦びて事を論あげつらふに諧かなひぬるときは、
則ち事理おのづか自ら通ふ。何事か成らざらむ。

「和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す」のは、「上和ぎ下睦びて事を論らふに諧ふ」ための心構へで、そこではじめて「事理自ら通じ」「何事か成らざらむ」といふ、何事も成らざるなき協力一致の世界が実現せられるといふのです。しかし人生事實は自他ともに、「人皆党あり亦達れる者少し」といふことで、この痛感あればこそ「和を以て貴しと為す」のです。甘ったるい「平和」概念や単なる妥協ではない。深い自覚と痛感にもとづく国民同胞協力の信念であります。「事を論ふに諧ひぬる時は事理自ら通ふ、何事か成らざらむ」とは、「感応相称の一時にして説くが故に物のために利あり」との『法華義疏』の中の御言葉を想ひ出さしめられ、またさながら「言靈の幸はふ国」の信とも仰がれるのです。なお第一条の「和を以て貴しと為す」は右のやうな文脈をたどれば、特に第十条、第十五条、第十七条とともに誦すべき御言葉であることを述べまして、この解説を、レジメとしておくばりしました桑原暁一さんの文章にゆずります。

桑原さんは私どもの先輩で、合宿教室にも度々来られ、講義もしていただいた先生ですが、

今年の五月、乱れゆく国を憂ひつつ亡くなられました。桑原さんは生涯聖徳太子の御言葉を人生のしをりと仰いで送られた方です。御元氣だったらこの合宿にも来てお話ししていただけたでせう。『日本精神史鈔』（国文研叢書No.2）の中に、いま私が述べたいと思つてくどくどと申し上げたことを、うつくしいさはやかな言葉で述べてをられます。

法隆寺五重塔の美しさについては自分などが今さら何も言うことはない。ただ一言だけ言うことが許されるならば、（中略）両の手に広く衆生を抱きつつ、急がず、あせらず、だんだんと衆生を上へ上へと引きあげて行く、といったらよいであろうか。またそれは「和」の形といつてもよい。太子にとつて「和」とは、相共に、より、高きものを志向する、ということであつた。自分は久しい間、目にし口にしてきた憲法十七条をあらためて熟視して、これまでわかつていたつもりのもものが、実はまるでわかつていなかったことを知つた。それをくわしく述べることは別の機会にゆずつて、いまは太子の「和」とは何かについてその一端に言及するにとどめたい。第一条に云々。

くどくなるのはいやだから、なるべく簡単にいうが、「人皆党あり云々」とありながら、次に「然れども上和らぎ下睦びて云々」と言つているところに疑念がさしはさまれる。何となれば「人皆党あり云々」ということが実は「上和らぎ下睦ぶ」ことを妨げていると思われからである。上和下睦は党心（偏執心）なき違れるものの間でなければ期待できぬことである。この疑問を解くためには、党心あつて違りなきものであればこそ、上下和睦して、はじめて事理通うことができる、と読まねばならぬ。第十七条に「夫れ事は独り断ずべからず……故に衆と与に相弁ふるときは辞即ち

理を得む」とある。第一条の「上和らぎ下睦びて事を論ふに諧ふときは則ち事理自ら通ふ」というのは、この「衆と与に相弁ふるときは則ち辞則ち理を得む」というのとまったく同じことではないか。ただそれを一般的に言ったものにほかなるまい。上下和睦してともに議を尽すこと、そのことが党心あって達りなきままに、それを超える方途である、というのでなければならぬ。このようにして太子にとって「和」とは私心を捨て去ることではなくして、お互いに私心あるものなればこそ、衆とともに、議を尽し、論を究めることによって、わずかに個々の私心を超えたもの、すなわち事理が実現されるというのである。自分が太子にとっての「和」とは、衆とともにより高きものを志向することである、といったのは、憲法第一条のこのような理解に基づいているのである。

（前掲書第三篇「塔と橋と」二二九頁—二三二頁）

(五)

聖徳太子の「和」とは桑原さんの言葉にありましたやうに、人みなそれぞれ足りないもの欠陥の多いものであることを自覚して、その足りない者同士が語りあひ力をあはせて国の運命を切り開いてゆかうと努力することです。それを日本の国がらに即して言へば、天皇の下に国民が一体になって進んでゆく姿ですから、山上憶良が「しきしまの大和の国は皇神の厳しき国、言靈の幸はふ国と語りつぎ言ひつがひけり」と歌った神代からの言ひ伝へと、同じ信念と

思はれるのです。多少飛躍がありますから、このことは私の感想をお話したこととどめておきます。

ただもう一言つけ加へさせていただきますが、太子のこの「和」は、やがて日本の国号として用ひられるやうになります。「倭」の字に代つて「和」の字が用ひられるやうになるのは、私は、十七条憲法の「和」をとつたものであらうと思ひます。それまで「倭王」と言つて来た日本の天皇の称号は、太子の作と思はれる日本の国書の「日出処天子」を経て「日本天皇」に代るのですが、それにつづいて「大倭」が「大養徳」に代り、「大和」となります。「倭歌」も「和歌」となり、親鸞の「和国の教主聖徳皇」といふ言葉も出て来ます。「和歌」の「和」には「こたへる歌」といふ意味があると山田輝彦先生がおっしゃいましたが、それはつまり心が通ひあふといふことで、聖徳太子の「和」の御思想にも通ふものがあります。「言霊の幸はふ国」といふこととございます。「言の葉の道」「敷島の道」といふこととございます。「皇神の蔽しき国、言霊の幸はふ国」は現代に通ずる信念であり、聖徳太子の御教へ御言葉は、いまのわれわれの仰ぐべき御言葉でありお教へであります。ご清聴を感謝いたします。

(亞細亞大学教授—国文学)

現代短歌批判

山田輝彦



短歌創作の手びき

現代短歌の傾向

いい歌の例

短歌創作の手びき

合宿で短歌を創作しなければならぬといふことが、合宿参加の前から何となく心の負担になっておろしやったのではないかと思ひます。歌を作つて人前にさらすことは、自分の裸身を人前にさらすのと同じで、恥づかしいといふ気持が先立つことはよく分りますが、どうか気を楽にして、感じたことをありのままに表現するやうに努めて下さい。さうすれば自然にいい歌も生れて来るだらうと信じてをります。

数日前の新聞に、総理府の実施した「現代青年の意識調査」といふ統計の概要が発表されました。これはユーゴなどの共産圏もふくめた十一ヶ国の青年を対象にしたものです。その中で現状に対する不満度といふ点では、日本は圧倒的に高いのです。また、人間はそもそも悪人であるといふ性悪説に同感する青年のパーセンテージも十一ヶ国の中では一番高いのです。これは、現在の教育のもたらす必然の結果でもあり、ジャーナリズムや茶の間に入って来るテレビの影響などもあるのでせうが、ともかく日本の青年諸君の心の奥底には、抜きがたい人間不信の意識が定着してゐるやうに思はれます。どうせ各人の自我といふものは通じ合はないものだといふ意識が、ものを考へる前提として確乎として存在してゐるのではないでせうか。さういふ先入観といふものを打ち破るためにも、是非短歌の創作といふ経験をお持ちになるべきだと

思ひます。ここにかういふ広やかな世界があつた、かういふ細やかな表現の道が自分のすぐそばにあつたといふ発見の喜びがきつとあると思ひます。

最初にごく初歩的なことから入つてまゐりますが、短歌は申すまでもなく、五、七、五、七、七といふ定型詩です。この定型の中に、できるだけ正確に自分の思ひをはめこんでゆくといふところから出発していただきたいのです。短歌の形式は既に六世紀頃には定着してゐたやうですから、一三〇〇年ぐらゐの長い伝統を持つてゐるわけです。一口に一三〇〇年と申しませんが、さういふ長い歲月の間に、一つの詩型が伝承され、現在でも新聞歌壇などに大勢の方が投稿され、それら無名の方々がかなり高い水準の歌を詠んでゐらっしゃるといふのは、世界で全く稀有な例ではないでせうか。詩を作ることは、特殊の能力を持った人へのみ許された仕事だといふヨーロッパ流の考へ方からすると非常に特異な現象であらうと思ひます。では、なぜ短歌といふものが広い国民の間にこれほど長い伝承をもつて伝へられて来たかを考へてみますと、それは短歌のもつ一種のリズム感が、日本人の感情生活の表現に一番ピッタリしてゐるといふことだと思ひます。歌を詠むことは一つの喜びであり、心の解放であつたのです。だから歌を詠むのが苦痛であるといふのはそもそもをかしいことなのです。作るべく義務づけられる苦痛から案外早く脱却できると思ふのです。

短歌と俳句は短詩型文学などと、一括して片づけられたりしますが、根本的に異質なものを

持つてゐます。短歌は一首一文といはれるやうに、途中で切れることがあつても、情緒として、感情として一本ずつと貫通してゐることが必要です。従つて、例へば自分が強く印象づけられたことが二つあるといふ場合、その二つを強ひて一首の中に盛りこむと、中心が二つでき、歌が分裂してしまふのです。自分はこの歌ではこのことを中心にしようといふとポイントを決めて、そのポイントに焦点を絞るといふやうに詠むと統一感のある、きりつとした歌ができるのです。自分の詠みたいものが二つも三つもあるやうな場合は、その一つを主にして、他を従にするやうにするか、あるいは連作形式にすればいいのです。歌が一首一文であることから出てくることですが、歌を表記する場合、上の句と下の句を二行に分けて書くことは、やめて頂きたいと思ひます。一行に書いて、書けない部分があれば二行目に書けばいいのです。

短歌の一首一文に対して、俳句は二句一章と申しまして、焦点が二つあるのが原則なのです。

荒海や佐渡に横たふ天の川

降る雪や明治は遠くなりけり

芭蕉と中村草田男の代表句を例にとりましても、前者には「荒海」と「天の川」といふ二つの焦点があり、後者には「雪」と「明治」といふ二つの焦点があります。「雪」と「明治」の間には、別に直接の関係はありません。さういふ違った二つの概念が、「や」といふ切れ字を

はさんで、一つの論理的飛躍、詩的飛躍によって結合される。その組合はせの面白さ、配合の面白さが俳句の本質なのです。だから、俳句は著しく知的な要素の強い文学だといふことになります。短歌の本質が連続した感情の波であることとくらべて、俳句は途中で切斷されてゐるところに面白さがあるといへませう。

正岡子規には、短歌革新の基本点を述べた「歌よみに与ふる書」といふ有名なポレミックの書があります。その中でくりかへし言つてゐることは、理屈を詠むな、ことに歌の中に因果律といふやうなものを詠むなと説いてゐます。例へばあまりに因果の關係が分りきつたことを歌に詠むとをかしなことになります。「冬寒く夏の暑きは何ゆゑぞ夏は温度の高きゆゑなり」といふのは歌ではないでせう。これは極端な例ですが、とにかく理屈をよむな、切實な感情を詠めといふことです。感情を詠むといふと、叙景詩はどうかといふ質問がでると思ひます。叙景の場合でも、ある風景にうながされた自分の感情を詠むのであつて、悲喜美醜といふやうな、なまの主観の言葉は出なくても、秀れた叙景詩は常にその人が自然から受けた感情の表現になつてゐるのです。例へば源実朝の次の歌です。

大海の磯もとどろに寄する波われてくだけて裂けて散るかも

この歌には直接に感情を表現した言葉は一つもありませんが、実朝といふ一人の若い將軍の心の働きそのものの表現になつてゐます。歌は抒情詩であるといふことは確認されていいわけ

です。

子規の歌論における根本の立場が「写生」であったことは今日常識になりました。そして、写生といふことは自分の感情を殺して、対象をありのままに詠むといふやうに考へられて来ました。しかし、写生とはもつと主体的な意味を持ってゐて、自分の眼でしかと対象を見るといふことなのです。旧派の歌人たちが、長い歴史の間に形成されて来た一つの概念の上に立って、マンネリ化した類型的な詠歌に甘んじてゐた。それに対して自分の眼でものを見て詠めといふのです。自分の感覚、自分の実感を信じなさいといふことなのです。だから「写生」は当時としては大きな革新的意味を持つことができたのです。

歌を詠まうと思つて自然をよく見て下さい。青空といつても、その時々で色彩は微妙に変わつてゐます。その時の、その青さを最も正確に表現する一つの言葉を



さがすことです。正確に写生された歌は必ず人の心を打ちます。これは感情表現の場合でも全く同じことです。自分の心の中に、人に知られたくないやうなことがあっても、できるだけ正直にそれを詠むことによって、自分自身の心の迷ひも正されますし、苦しみや悲しみは表現されることによつて浄化されるわけです。アリストテレスが、芸術の本質はカタルシスであるといつたのは真実です。自分の感情を正確に、素直に表現することによつて、心が安定する。さういふ現実的な効果をも短歌は持つてゐるのです。

万葉集の分顔の一つに「相聞」といふ部があります。これは狭くは「恋」の歌を意味するのですが、広くは「相聞往来」といふやうに、贈答の歌を意味するのです。古くは、短歌はまさに人の心と心とのかけ橋の役目をしてゐたのです。現代短歌は孤独な個人の情の表現になつてしまひましたが、短歌の本来もつてゐる広やかな心の交流の世界を、是非とも回復していただきたいのです。

最後に用語の問題ですが、短歌は本来文語定型詩ですから、歴史的仮名づかひや文語文法の法則によるべきことは当然の前提です。しかし、子規もふれてゐるやうに、どんな言葉を使つてもいいわけで、最初は口語的な発想で、口語的な歌しかできないといふなら、それでも結構だと思ひます。努力して次第に文語的な表現に熟達してゆくことが一つの必須の条件であらうと思はれます。

現代短歌の傾向

技術的な導入はこれくらゐにして、資料に従つて説明してまゐりたいと思ひます。この資料は、この一年間ほどの「朝日歌壇」の切り抜きの中から、あまり主観を交へないで、アトランダムに抜いて来たものです。だから、価値の選択といふものは働いてゐないわけで、現代の間、日本人の感情生活の平均値のやうなものが出てゐると思ひます。諸君がご自分で価値判断をされたものと、私の判断が一致する場合もあり、くひ違ふ場合も当然あり得ると思ひます。まづ私が好ましくないと思ふものから例をあげて説明いたします。

首に手をまわし頬寄すおさなごのおさなき孤独を抱きやる朝

この歌の作者はおそらく若いお母さんでせう。現代短歌の特徴を非常によく現はしてゐると思ひます。一番の問題点は「おさなき孤独を抱きやる朝」といふ下の句です。「孤独」といふのは抽象名詞です。「孤独」を抱いてやるのではなく、孤独なおさな子を抱いてやるのです。しかし「孤独なおさな子」ではなく「おさなき孤独」を抱いてやるといふのが新しい表現だと作者も、選者も思つてゐるのでせう。さう表現することによつて、感動は間接的になります。間接的などころがいいといふやうに、詠んだ人は自信があるわけです。しかし、「おさなき孤独」といふ言葉には、大人の感情移入があり、屈折と陰影があつて、決して素朴ではありません。

ん。例へば「首に手をまはし頬寄すおさな子のいとささひしと抱きてやりぬ」といふやうな、直接的な感動の表現が嫌はれるのです。現代人の感覚では、それはマンネリズムであつて、自分の感情に反省を加へて概括しなければ納得しないのでせう。いちぢるしく愛情が客観化され、概括化されてしまふ。そこに自分なりの新しいポーズを示さうとするのです。価値の標準の違いはあるにせよ、私にはかういふ詠み方はやはり邪道と思はれます。

天井にねずみ騒げば眠りいて体たいかわす父よ坑夫なる過去

歌の意味はお分りでせう。父は長い間坑夫として坑道で働いて来たから、落盤でもあると無意識に身をかわすのが習性となつてゐる。だから天井で物音がすると無意識に体をかはすといふ、坑夫としての過去の生活に対する一種のいとささひのやうなものがあります。この歌の問題点は、最後の「坑夫なる過去」といふ概括的な表現にあります。これは現代短歌の基本的な性格ともいふべきものですが、二つのことが一つに概括されてゐるのです。一つは、天井にねずみが騒ぐと体をかわすのが習性となつた父への悲しみの気持と、もう一つは、それは過ぎた日に坑夫として生きた父が身につけたものだといふ判断です。この二つが概括されることによつて感動が薄められてしまふのです。本来次のやうな二つの内容になるべきものだと思ふのです。

天井にねずみ騒げば眠りみて体かはす父さがの性は悲しき

過ぎし日を坑夫に生きし父なれば落盤避けむとすらし寝る間も

かういふ二首になれば非常に素直になるのですが、それは古いといふ判断があるのでせう。この二首の例のやうに、孤独とか過去とかいふ非常に概念的な抽象語によって概括してしまふ。そこに本来の日本の伝統の抒情詩と異質のものをさうといふのが今日の顕著な傾向のやうに思ひます。

概括化の傾向と共に警戒を要するのは文学的なポーズです。

水仙のかおりとひめぐともちており二十歳はたちの夜の雪の静寂しじまに

これはおそらく若い娘さんの歌でせう。「水仙のかおりとひめぐともちており」といふところが文学的ポーズなのです。私はロマンスの中のヒロインだといふやうな言い方は、作者自身はそこが見せどころなのでせうが、わざとらしく、ポーズが過ぎるのです。この歌は、水仙のかほりがするといふこと、外は雪が降ってゐるといふこと、自分には人にいひがたいひめぐとがあるといふ三つのことが概括されてゐるといふ点と相まって、あまりに人に見せるための歌になり過ぎてゐるのです。

悔いあれば心やさしくなりてゐる我がひぎにひそと子のもたれ居り

これも若いお母さんの作品でせう。「悔いあれば心やさしくなりてゐる」といふ言ひ方は、やはり自分が物語の女主人公のやうになつてゐて、その自己陶酔的な概括は、子規のいふ写生

とは最も遠いものです。正確に自分の感情を表現するといふところからは、さういふ甘えたポーズは出て来ない筈なのです。

次に人と違った新奇な表現によって人の注意を引かうといふのも考へものです。

わが掴む幹肌たねに濃き湿り来て竹伐る森の春の夕暮

ここで問題は「濃き湿り来て」といふところです。濃い湿り気が来たといふ意味で、湿気といふ抽象名詞が主語になってゐます。作者自身の人に見せたいポイントでせう。しかし「わが掴む幹たねしつとりと湿り来て」と直接的に詠んだ方が、どれほどいい歌になるか知れません。

海苔のり生うる岩根をおおい脹ふくらめる波のねばりよ春の確かさ

意味がお分りですか。これは春潮を詠んだ歌ですが、問題は「波のねばり」といふやうな言ひ方です。春の潮がどんなに濃くても、ねばりといふのはをかしい表現です。作者はこれこそ俺の写生だといふでせうが、「波のうねり」ではなぜいけないのでせうか。それから「春の確かさ」とは、まさに春が来たといふ確認でせうが、「春は来にけり」とどうしてはいはないのでせうか。作者は「春は来にけり」では古今集以来のマンネリで、平凡だと考へるから「春の確かさ」としたのでせう。上からスムーズに流れて来た感情は、この表現によって知的に概括されてしまひます。それに、この表現は木下利玄の「牡丹花は咲き定まりて静かなり花の占めたる位置の確かさ」を真似てゐるのです。ここを見てくれといふところは大抵あやしいといふこ

とになります。

ぬかるみを飛び越えて行く園児らは声清々し冬と春またぐすがすが

これは若い保母さんの歌でせう。歌としてはよく感じが出るのですが、問題は「冬と春またぐ」といふところです。子供たちがぬかるみをとび越えて行くことと、「冬と春またぐ」とが比喩の関係になってゐて、理屈が入って来てゐます。作者として一生懸命に考へたところが一番悪い表現になったといふ例でせう。しかし、かういふ表現がむしろ現代歌壇の雰囲気にも最も近いのも事実です。

息子の部屋にテレビン油の香と青年の自我満ち母の入室拒む

現代のいはゆる「断絶」の表現です。息子の部屋は無言の自我の主張で、母を拒絶してゐるといふのです。息子と心の通はぬ嘆きをなせもつと直接的にうたはないのだらうか。かういふ歌を詠んでもお母さんの心は少しも晴れないだらうと思ふのです。

いい歌の例

現代短歌について、少しきびし過ぎるやうな批評をしてまゐりましたが、資料の中にも素直ないい歌があるので、それをいくつかあげておきます。

夏草となりゆく原かたんばの冠毛終日雨に打たるるわたげひねもす

佐久の鯉食べに來ませと戦死せる友が子の文胸あつく読む

風荒らび雪となる夜を着ぶくれて夫は乗りゆく往診船に

定年を明日にひかえて終業ベル鳴りやみてしばし旋盤みがく

これらの歌には、私がさきにあげた、概括化、文学的ポーズ、誇張された新奇な表現といふものがあります。原則として一首一文が守られてをり、何よりも対象に対する温い愛情があります。平凡ですが、結局かういふ歌の方がまっすぐに心に入ってくるものです。

時間の関係で最後に『短歌のすすめ』の中の「牛深を立つ」といふ連作短歌をよんでみたいと思ひます。作者の和多山儀平君は、かつて私も共に勉強をした仲ですが、昭和十九年、大東亜戦争のさ中に、二十一歳の学徒兵として戦死しました。これらの連作は彼の十九歳の時の作です。彼はもちろん専門に歌の勉強をしたわけではありません。合宿でごく初歩の作歌の手ほどきを受けただけです。学徒出陣の間際に作られたものであることも念頭に入れて読んでいただきたいのです。

牛深を立つ

わだつみの波しきうちて砕けちる大きいはほのすがた雄々しも

わだつみのただ中すすむ船の上に弓張月をあかずながむる

真弓なす海原ゆけばつらなれる島山はるけしくれゆくそらに
 舳へさききる波の音とききつつ大空の星をながめぬねむれぬままに

この旅にまいで来ざりし友どちはいかにしあるらむしたはしきかな
 いなづまかあらずあかりかぬばたまの夜空かけりてきらめく光は

渦まける白水泡しづみなわあはく一筋にはてなくつづけり来し方のぞめば

ほのぐらきあかりの下に吾がともははやいねたりきねいきのよろしも

あまつそらふりさけみれば月の暈かきしるく出でたり明日は雨らし

島と島のはざまいゆけばたちまちにうしほははやみ舟躍りゆく

北の方指さすごとく七つ星今日もいでたり友らしぬばゆ

上下にゆるるるままにひたすらに吾が乗れる舟何処ゆく今

ふるさとの家はかなしもこのゆふべ吾いづちゆくとしのびてあるらむ
 百千船ももぢふね泊つる港辺にぎはしくあかりたりたり人影も見ゆ

汽笛ならしゆるやかにこの港辺に吾が船は入るひびきあげつつ

「牛深」とは、この雲仙のすぐ近く、天草の港です。そこから熊本へ帰る途中の船旅の歌です。かういふ歌が、全く歌の素人である一人の青年によって、三十年前に作られてゐるの

です。ここには「国家」とか「歴史」とかいふことごとしい概念はどこにも歌はれてゐません。しかし、自己の生命と国の運命を共に生きようと決心した一人の青年の、実に自由な、柔軟な生のリズムが、いかにも格調の高い結晶として残されてゐるのです。ある一つのこと目覚めたとき、いかに大きな世界が開けるかを、この一連の歌は如実に語ってゐると思ひます。皆さんは初めから一挙にかういふ歌が出来るわけはありませんし、和多山君自身はいくらか天性もあつたと思ひますが、どうぞ先ほどからくりかへした注意を心にとめて、素直に、正確に、しかも自由に自分の心を表現することを試みてほしいと念じます。

(福岡教育大学助教授—国文学)



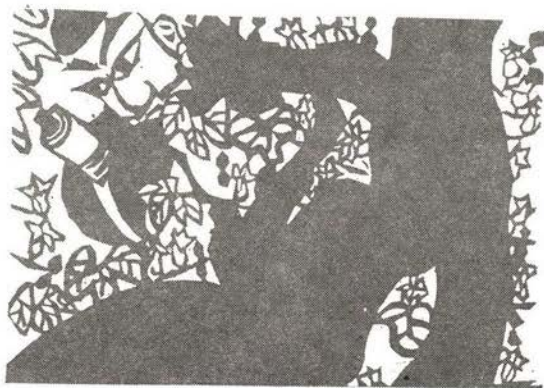
講

義

戦後の第二期が始まった

— 脱マスコミ的理解が望ましい —

木内信胤



戦後の第二期が始まった

―近代西欧文明の任務終了―

脱マスコミ的理解

混乱期に処する道

―日本の個性―

日本語の特色

東西文明の融合

昨年以来の世の中の動き

日華国交回復論

インフレ対策

日本列島改造論

戦後の第二期が始まった

—近代西欧文明の任務終了—

私は、今回で十四年間連続してこの合宿教室で講義してゐるのですが、四、五年前から三つの重要なテーマに基づいてお話ししてゐるわけです。

第一は、自由主義陣営におけるアメリカの実力低下、リーダーシップの喪失”といふこと、第二は、共産陣営にはマルキシズムの死滅と名付けてもいい状態がおこつてゐること”です。マルキシズムが正しいものならプロレタリアは全世界的に団結する筈なのですが、中ソは対立してゐるし、その内部の状態を見ても、マルキシズムはいよいよ消えてなくなる様相を示してゐると思はれます。三番目は、新生日本の誕生”といふことで、これが私の一番大きなテーマです。以上の三つが最近四、五年間における主要テーマであつて、この問題をはっきり理解すれば、世界の動きを捉へることはさほど難しくないと思ひます。

過去四、五年来の世界の動きを、この三つの重要なテーマで捉へると、現在は、戦後の第二期が始まった”と観念すべき段階に達したと考へられます。世界のどこを見ても、全くわけのわからぬこと”になつて来たのがその証拠です。

この現象はマスコミの上にも現はれてゐます。この頃のマスコミは元気がないですね。何か

をリポートしてみても、その通りにならない。たとへばチリといふ国が共産国になりましたが、しばらく前のマスコミだったならそれを左翼陣営の勝利のやうに伝へたでせう。この時もそのやうな報道が行はれたやうですが、元のやうな元氣はない。どうなるかわからないからです。今朝の新聞を見ますと、チリでは交通ゼネストの真最中に全閣僚が辞職願ひを出したといふ記事が出てゐますが、チリの共産革命を謳歌するわけにいかなくなつたのです。世界のどこを見ても、全くわけがわからなくなつて来た”といふ事実を大きく解釈すれば、いよいよ戦後といふものが終つて、これから新しい時期が始まるのだらうと、かう観念したらいい。これが私がお勧めしたい世界の動きの捉へ方です。

さらに申しますのは、最近の世界の動きは、戦後が終つた”といふことを超へて、近代西歐文明は行きづまつたのではなく、任務をめでたく終了したのだ”と見るべきだといふことです。近代ヨーロッパ文明は、約五〇〇年前にイタリーを中心にルネッサンスが起りましたが、これが始まりで、それから現代のやうな文明が作られて来たわけです。

文芸復興の十五世紀頃のヨーロッパ文明は、その当時の支那や印度と比べて、それ程高度ではなかつたのださうです。ところが数百年経つうちにヨーロッパ文明は全世界を押しまくることになった。独立国で残つたのは、日本とシヤムとエチオピアなど少数の国になつてしまつたのです。ヨーロッパ文明といふのは相互に無数の戦争をしながら出来てきた文明ですが、お互

に戦争するから強くなった。殊にこの文明は自然征服的ですから、自然を利用する方法を知って大変強くなった。その文明の素晴しさは、人間が月へ行くといふやうなことにも現れてゐるわけです。

その高度に発達した文明が戦争の原因でもありますが、また平和の原因でもあるのです。なぜなら戦争は、要するに物が不足してお互に取り合ふから起った。ところがさうして出来た文明のおかげで現代では物が余ることが問題になって来たのです。全世界にはまだ物が不足してゐる国もありますが、日本なんかは過剰をもて余し、そこに新しい問題が生じつつある。かういふやうに観念すれば、十五世紀に始まったヨーロッパ文明は世界を押しまくって随分乱暴なこともやっていたけれども、生産力が強大になって物が過剰になるやうになった。物が過剰になるといふことは、戦争をしなくてもいいといふことになるわけです。相互に戦



争をやった、その中から生まれた戦争的な文明によって、絶対平和の基盤が既に出来てゐる、これを私は「西欧文明の任務終了」と名付けるわけです。それに「めでたく」といふ形容詞をつけるわけは、いまの文明の姿を見ますと、随分いやなことが多いのですが、世界の大きな流れをみますと、現代文明はやはりなくてはならなかったものだ、と思ふからです。しかし、任務が終了してしまった以上は新しい文明が欲しくなるわけで、その新しい文明に入る第一歩が「戦後の第二期」と、かう観念してゐるのが私の見方です。

脱マスコミ的理解

そこでその世界の大きな動きについて、私たちは、どうしてもマスコミから知識を得るわけですから、自然マスコミ的理解に陥ってしまふのですが、それはどんな捉へ方なのか例を示しませう。

まず「三極構造」「多極化」「平和ムード」「話合ひの時代」といふやうなマスコミの把握の仕方、これは世界の状態を外形的に捉へたものです。外形的把握が必ずしも悪いとは申しませんが、それら当事国の行動の動機を、相変らず「ナショナル・インタレスト」「バランス・オブ・パワー」といった観点からのみ見ようとするのは、過去になづんだもので感心できません。

国は道義的な動機で動くのではなく、国益で動くのだといふ考へ方、これがナショナル・インタレストです。バランス・オブ・パワーといふのは要するに「力の支配」を前提とした現状維持ですね。しかもそのバランスといふのは、自分が優位にある現状が続いて欲しいといふことを意味してゐるのではないかと、私は思つてゐます。そこでそのやうな観点にいつまでも躊躇してゐては駄目で、新しい世界の秩序といふものは、自分にいいものは相手にもいい、自分の利益と相手の利益は一致する、といふやうな考へ方が基になるべき筈だと思ひます。これは東洋的な考へ方で、非常な理想主義ですから、現実からいきなり飛躍することは出来ませんが、やがてさうなることと思ひます。

次にマスコミでは「地球汚染による人類の滅亡」「資源枯渇による窮乏時代の到来」「人口爆発と食糧不足」などといふ把へ方をします。紀元二一〇〇年にならない間に大変な窮乏時代が来るといふ。モデルを作つて数字をあてはめてみると、さういふ結果になると言はれてゐるのです。人口の爆発といふのは、後進国の人口がむやみに増える、いま世界の人口は三六、七億ですが、あと二〇数年後には六〇億になるはずだが、それだけの人口を一体地球上で養へるのかといふ問題ですね。特に今年には急に世界的な食糧不足が言はれはじめ、危機感が横溢したのです。しかし以上の三件などはセンセーショナルリズムに陥つてゐるもので、ほどほどに聞いておかねばならないといふのが私の考へです。

それから「情報化時代」「テクノクラート時代」「国際化時代」と言ったやうな言葉で世界の動きを捉へて行くのがマスコミ的理理解なので。これらは兩三年前のはやりで、今はすたれたと言つてもいいかも知れません。ここで「情報」といふのはコンピュータにのるやうな情報なのです。しかしあれは人間が資料を入れるのですから、コンピュータの情報といふのはそれを入れる人間の知能程度を超えることはないわけです。「テクノクラート時代」といふのは、技術者といふものが一つの階級を作るだらうといふ見方ですね。「国際化時代」、この言葉はまだすたれてゐないかと思ひますが、いづれにしてもマスコミがその好みによつて使ふ言葉には、余り信をおかぬことが望ましいと思ひます。なほ今申しましたやうに世界は物量を争ふ時代は終了しつつあるので、例へば「平和」といふものに、それさへあればいい、と考へるやうな高い位置付けをしてゐては駄目だといふことを知らなければなりません。「平和」がつまらないとは言ひませんけれども、存外チープな前提に立つてゐるものとして捉へて欲しいのです。平和がないと自由がない。自由がないと眞の創造が出来ない。だから平和が欲しいといふわけですが、何かわけがあつて戦争になつたとすると、人間は割合シャンとする。戦争は人間をシャンとさせるいい機会なのですが、これからはいやでも世界は平和になるでせう。むしろ戦争がなくなりつつあるから捉へやうのない煩悶に陥るわけです。これからは「平和」なんていふものは、実は次元の低い理想にすぎないことを知らなければなりません。さういふ

ことが、脱マスコミ的理解の第一歩だと思ふのです。

混迷期に処する道

—日本の個性—

全くわけのわからぬことになって来た世界の動き、この混迷期にわれわれ日本人はどのやうに処したらいいか。まづ申しあげなければならぬことは日本の個性に目覚めることです。それには文化人類学的に考へてゆくのが近道であらうと思ひます。次に日本の実力を自覚すること。そしてその実力は、日本の個性の然らしめるものであることを認識することです。日本の実力は非常に高いのです。いま混迷度がかなりひどいのですから、悪い面が強調されることが多く、心配にもなるのです。勿論心配することも必要なのですが、そこに止まつてゐてはいけません。日本の高い実力を自覚しなければこの混迷期を正しく生き抜くことは出来ないと思ひます。

ここで日本の個性について少しふれておきます。私たちの若い頃には、日本といふ国は世界独特の国で、万世一系の天皇をいただく金甌無欠の国体であり、神国日本は戦争に負けることはない、といふことであつたのですが、実は負けてしまった。ところがその負けっぷりの中に、私たちは、日本は世界に類のない国だといふことを目の前で見ることが出来たのです。大

東亜戦争の末期の日本国民は、敵を本土に上陸させ引きつけて叩くのだと言つて、一億総決死でどこまでもやるつもりでゐた。これは嘘でも何でもなく、みんなそのつもりでゐたのです。それが天皇陛下のご決断で降伏が決まり、玉音放送が行はれると、からりと気分を変へてしまつた。ほとんど瞬間的と言つてもいいですね。占領軍が進駐して来て日本中をキョロキョロ見回してゐたが、どうしてあの恐しい日本人がかうもおとなしくなつたのかと、彼らは不思議でたまらなかつたのですね。あのやうなことが何故出来るのか、これは私たち日本人が考へてみても、本当の解釈といふのはなかなか出来ません。表面的な解釈なら出来るでせうが、難しいです。

それから戦後の復興を見ても日本人の素晴らしさが説明できます。例へば建設工事、東京駅は地下五階になつてゐますが、外部からは殆どわからないやうに工事をしてしまつた。大体夜間作業で造つたのですね。いまでも夜になると、東京中が別の姿のやうになつて土木工事をやつてゐます。その器用さ、夜間作業を厭はない勤勉さ、末端の人がよく働くし、利巧なのです。だからかういふ風にいくのです。

その他にも例はたくさんあります。東京駅でも新宿駅でもさうですが、通勤時のラッシュです。十二輛編成の電車が二分間隔ぐらゐで発着する。満載した人をワァーンと出して、サラツとさばいて行く。あの状態をアメリカで実現しようとしても到底できません。ドイツ人だつ

たら、まごまごして動かないでせう。彼らは理屈っぽいが、日本人は早わかりするから、サーッとさばけて行くのです。満員電車に押しこめられて大変な苦しみを味はひながら駅に着く。電車から降りると、もうケロッとして何ごともなかったやうな顔をしてオフィスへ通って行く。さういふ頭の持ち方がどうして出来るのだらうか。日本人は特別なのですね。

日本は、最近では、アメリカ、その前はヨーロッパに追いつかうと懸命だったから、彼らと違ふ点は全て日本人が劣るのだと考へて来たのです。ところがいまでは、日本の方が偉いのだといふことが少しづつわかって来たのですから、彼らと違ふ点を発見したら、だから日本は優れてゐるのではなからうかと、かう考へるべきですね。殊に敗戦後の実績を見て、何と不思議な国民だらう、何故さういふ国民が出来てきたのだらうと考へてみると、初めて日本が本当にわかつてくると私は思つてゐるのです。これが日本の個性に目覚めるといふことです。

日本語の特色

言葉にも日本の個性はよく現はれてゐます。言葉といふものは実に大事なもので、日本の国民性、日本民族の特質といふものが、その中に殆ど入つてゐると言つてもいいのです。

私は、戦後の国語政策の誤りを正さうといふ人たちに勧められまして「国語審議会」の委員になつてゐますが、今年で七年目です。私達の団体は「国語問題協議会」と申しますが、この

会は毎年講演会を催してゐます。その講演会での私の話は、一貫して、漢字仮名まじりを使つてゐることの能率^①についてです。戦後には漢字のやうな複雑なものを覚えさせると他の勉強が出来なくなる、だから漢字は止めてしまへ、とまで言はれたのですが、その漢字を使つてゐるから能率がいいのではないか、といふのが私の着眼です。

例へば講演会の立看板、演題や講師の名前が漢字仮名まじり、縦書きで書いてあると、ひと目見て何の講演会かわかるでせう。それが能率のよさです。一番はつきりそれを教へてくれたのは高速自動車道路の標識、グリーンに白い字で書いてありますね。あれを作る際にどうしたら早く読みとれるかと、漢字とローマ字を比較してみました。漢字だと一瞬にして読んでしまふ。ローマ字だと一秒の何分の一かかるとか、場合によっては一秒かかることがわかった。高速で走つてゐるのでから瞬時にわからないと困るのですが、漢字の能率が実証されたわけです。漢字といふものは実に不思議なもので、かつ面白いものです。

さきほど日本の個性に目覚めるためには、文化人類学的に考へるのが近道であらうと申しましたが、そのサンプルの一つに「日本語の再発見」といふ本があります。著者は長い間アメリカ人に日本語を教へて来た池田摩耶子さんといふ方です。この本の中に次のやうな話があるのです。

外国人のためのある日本語の教科書に、川端康成さんの「山の音」といふ文章の初めの部分

がとり入れられてゐる。そのなかに「八月十日前だが虫が鳴いてゐる」といふ文章がある。川端康成を読まうといふ外国人ですから普通の日本語はわかるのですね。「八月十日前」といふ言葉も、「虫が鳴く」といふ言葉もわかる。しかしこの短い文章を理解させるのは大変に難しいのださうです。八月十日といふ日は立秋なのです。秋がくれば虫が鳴くのは当たり前だが、まだ立秋前、しかし山の上だから早くも秋の訪れで虫が鳴いてゐるといふ意味なのです。日本人ならばこの文章を読んだとき、まだ立秋前だが虫が鳴いてゐると、そこにもう千万無量の感慨がこもつてゐることを受けとめるわけです。さういふことを感じとらなければ、川端康成の文章がわかつたとは言へないですね。ところが外国人にはわからない。もつと滑稽なのは「虫が鳴く」といふ言葉です。虫といふのは英語ではインセクトですね。インセクトとは何かと言へば、彼らのイメージは蠅であり蚤なのです。だから「虫が鳴く」といふことがわからない。蟋蟀はアメリカにもゐるので、蟋蟀が鳴くのを聞けばわかるわけですが、それがある情感をもつて味はふといふ風習がないのですから駄目なのです。

要するに語学を教へるといふのは、その背後にある文化を教へることなのだ、だから極めて難しいのだと、さういふ経験を積んで来られた池田さんは、この本でアメリカ人の持つてゐる文化と日本人が持つてゐる文化とは、まるで違ふことを生き生きとわからしてくれているのです。それが、文化人類学的に考へるといふことです。さういふやうに考へると、初めて日本の文化

といふものがわかつてくるので、その文化が日本の実力の基礎だといふこともわかつてくるわけです。「八月十日前だが虫が鳴いてゐる」といふ文章がわかる国民ですから、満員電車に乗っても降りたらケロリとすることが出来るのです。お金を払って電車に乗ったのにひどい目にあつた、これをどうやって取り返さうかと、そればかり考へるやうでは駄目で、虫が鳴くといふ自然を鑑賞するやうな民族、さういふところから日本の実力は出てくるのだと私は思つてゐます。

それからもう一つ、大分前にマスコミが大いにとりあげた「日本株式会社論」です。外人から見ると日本は一つの株式会社であるかの如く、日本国民は一致協力して動くのです。造船の必要が叫ばれると、みんな協同して一所懸命に働く。だから日本の造船業はたちまち世界を圧倒するほど巨大になつてしまふ。何故さうなるのかと言へば、日本国民といふ民族は、自分だけを考へないで周囲の社会、親兄弟はもとより友人知人その他の人々が周囲にあつて、はじめ自分といふものは存在するのだと自覚してゐるからなのです。国家あつての自分、と言つてもいいですね。初めに自分といふものを押し立てないで、まづ自分といふものを無にして、全体の中における自分を考へていく。だから国難といふ事態になれば、一億総決死にもなるし、戦争に負けたとなれば、パスツときれいにもなるのですね。これらのことは考へても考へても尽せぬ泉であつて、大変なものです。

銀行に勤めてゐたのですが、さういふ世の中ですからゆっくりものを考へる、歴史を勉強したり、文学に親しむ余裕など全くなかったのです。一心不乱にやつてゐるうちに終戦になった。戦後の復興過程では大蔵省の連絡部長もやったが追放になった。追放が割合早く解除になり、外国為替管理委員会の委員長をやることになった。日本の国をどうしたらいいかと考へるには、その当時で言へば、やはりアメリカを知らなくては何もできない。だから英語は余り上手ではありませんでしたが、戦後、つまり私が五〇才になってから少しは使へるやうな英語に進歩した。さういふのが私の過して来た人生ですから、東洋的なものをゆっくり勉強する暇はなかったのです。

しかし、西欧文明だけでは駄目だといふ気が何となくあるから、常に東洋的なものを眺めながら来たわけで、いろいろの偶然に恵まれて、私は割合に東洋文明を深い意味で知つてゐる方だと思つてゐます。さういふ自己反省をしてゐれば、ヨーロッパ人、アメリカ人に対して、下手な英語を使ひながらも、決して負けてはゐない。この頃は彼らの愚かさが目について仕方がないですね。何故さういふやうになれるかといふと、彼らの考へ方も知つてゐるが、同時に彼らが持つてゐないものを持つてゐるからで、それが申すまでもなく東西兼備といふことです。

昨年の私の講義、合宿教室記録の最初に「社会科学方法論」といふのがありますが、そこで申し上げたことは社会科学においては東洋的な直感力といふものが学問の基礎になるべきだと

いふことです。その直感による判断を確めるために、可能な範囲、実証的データで検証するのは勿論結構です。それも一つの学問上の方法ですが、その判断を、いろいろの部面に当てはめてみて、どうも間違ひはないらしいと思ったり、あるひは歴史に照らしてみるといふこともある程度可能だと思ひます。このように実証以外の確め方もあるわけです。しかしどんな方法によっても、学問的判断といふものには「絶対に正確だ」といふことは言へないのです。間違つてゐるかも知れないが、いまの場合かういふ前提を立てれば、かう判断するのがいいらしい、といふことですね。これはアメリカ人やヨーロッパ人には通らない議論なのです。通らない議論だけれども、やはりこれがいいと思へてくるのは、私の心の中に東洋的な考へ方が脈打って生きてゐるからですね。問題にぶつかって解決を求めようと思ふと、いつのまにかちゃんとう洋的な考へ方で判断し、解決してゐるわけで、さういふのが、私の心にある日本の姿なのです。

ここで大切なことは「東西両文明の融合文明を創造する」といふのは、日本の国が自分のためにやることで、必ずしも世界のためにやるのではないといふことです。さうしなくてはゐられないからなのです。日本が自分を救へば、結果として自然に世界は救はれる、さうなるべきでせう。さうではなく世界を救ふために、そのやうな日本を作るといふのは、本末転倒かつ生意気な考へ方です。自分が自分のために自分の道を歩むやうに、各個人は自己の救済に専念

た。その後はあまり事件がなく、春斗とたらたら国会ですね。春斗は順法闘争に始まり、交通ゼネストもあって相当激しかったが、国会はだらしのない国会で、法案は何一つ通らない。そのうち左翼陣営では、来年の参議院選挙において野党連合が多数を制するための戦術として、「民主連合政権」と名付けるものがつくられるといふことで、マスコミの話題にのぼるやうな状況になってきた。国会の会期末が近づいた頃、自民党も強い態度をうち出し、参議院で三つの法案を強行採決した。そのあと審議はストップし、そのまま会期切れになってはどうにもならぬので、たうとう六十五日の会期再延長を決めて今日に至ってゐるといふことです。

さういふ状況下に、最近、小さいながら異変と申すべきものが起った。その一つは、自民党の中に血判を押して結成された「青嵐会」といふものが出来たことです。血判といふのは、要するに身を挺してやるといふことでせうが、その人たちが三十三人とか集った。超派閥です。誰が中心かもわからないし、まだ綱領も方針もないが、ただ自民党はこのままでは駄目だといふ認識から、党の幹部を突きあげてゐる。これは自民党の中に思ひもよらぬことが起ったといふことなのです。

その少し前にもう一つ、やや大きな異変が起ったのです。それは東京都議選挙です。これは自民党が大敗を喫し、共産、社会が伸びると思はれてゐたものが、自民党は減らず、社会党は増えず、共産党は欠員だった六名分だけが増えたといふ意外な結果に終つたのです。それが七

月八日です。

自民党は衆議院選挙で負け、名古屋市長選挙で負け、大阪の参議院補欠選挙で負けた。このままでは都議選挙は当然負け、かうしてゐたら来年の参議院選挙も過半数を割る、といふことで、大変な危機意識をもつてゐました。もしもさういふコースを進んで行って、ある決定的な段階にすれば、おそらくは不詳事件が起れば、事態はさらに悪化する。これはいよいよ大変なことになってきたと思ひました。しかし危機意識がこれだけ深まってくれば普通の常識では考へられないやうな異変を起すことが出来るのです。期限はあと一年、それまでにその異変を起さなければならぬ。やれるかやれないか、とにかくやってみるだけの話だと、かういふつもりにはなつてゐました。

ところが都議選挙でいま申した意外の結果が出た。何故か、最大の要因は危機意識の浸透だらうと思ひます。自民党は五一議席が四〇を割るのではないかと思はれてゐたのに、五一議席まるまる残った。これは驚くべきことなのです。いままでは東京都民は、自民党は駄目だと考へて他の党へ投票してゐたが、かうなつて来たからには共産党や社会党に票を入れるわけにはいかないといふやうになつて来た。日本人は非常に悟りが早く、事態が進んでゐる中にこれはいかんといふことを多くの人が気がついて来た。だから不詳事ならざる、都議選挙の結果といふ良き異変が起つたのです。

論を起すのです。国連がどう動くかわかりませんが、さういふ言論を起して、次に「中共をメンバーにするために、台湾を追放したのは誤りであった。台湾の中華民国も立派な国なのだから、再びメンバーになるやう招請すべきだ」といふ言論を起すのです。これは中共が反対するから、国連においては絶対通りません。通らなくてもいいから、さういふ言論を起して、台湾に対して国交の再開を申し入れるのです。台湾はすぐに応諾すると思ひます。国連では「中国の代表権」と呼ばれた一つのもの争つたからいけないので、北京も台湾も両方とも国ではないか、だから両方とも国連に入れるべきだといふ問題提起をすればよかったです。

そのあと中共に対しては、右のやうな法理に基づいて台湾と国交を回復したが、ご不満なら大使館を閉鎖しませうか、貿易も止めませうか、と言へばいい。困るのは中共です。中共は怒つて戦争を仕かけてくるだらうか、ソ連の脅威がありますし、内部的にも混乱してゐますから、勿論そんなことは出来ません。日本は、中国大陸の国民に対しても道義をもって付き合ふ必要はありますが、恐れる必要はありません。道義をもって付き合つて行けば、将来必ず和解するのです。

右のやうなことを私は熱烈に主張してゐるのですが、これをやれば、日本は初めて自主的な外交をやつたと言へるのです。いまの国際社会は、「国際正義」、つまり国家は相互にいかなる

法理に基づいて交際して行くべきか、といふ問題についても、また国際経済のあり方についても迷ひの極であり、全く混乱してゐます。その混乱に対して、日本がいま申したやうな外交をやれば、発言の根拠が出来てくるのです。是非やうて欲しいのですが、これが出来ただけでも日本はすっきりした道を歩むことになりすから、危機を解消できるのです。

（こゝにいふお話をしたのは八月の五日でしたが、その後「金大中事件」が起り、それに対する日本の態度が間違つてゐたために、日韓の關係は残念ながら非常にまづいことになつてしまいました。）

インフレ対策

次はインフレの処理です。今年の四月に「インフレ問題の解決」といふパンフレットを出しまして、田中首相はじめ政府の要人の方へお届けしました。田中首相はお読みにならなかつたかも知れませんが、そこに書いてあることは、是非やうて欲しいことなのです。

まづテレビで首相が、「自分は最近悟りを開いた。インフレ問題といふものは難しくて、自分たち政治家には到底わからない。ついでにはインフレ処理の案をお持ちの方は、是非提言して貰ひたい」と国民に注文するのです。それだけでは案が出ないでせうから、三〇名ばかりこれと思ふ人を指名して依頼する。出題を明確にしないと混乱しますから、「インフレ処理」とは

い。なぜかと申しますと、案を実行すれば必ず弊害が起るでせう。それを口実に野党は妨害するでせう。社共両党の如きは、もしもインフレが止つたら政府攻撃の材料がなくなりますから、妨害するのは目に見えてゐるわけです。その場合、私一人では到底防戦出来ませんから二〇〇〇人の応援隊が欲しいのです。一〇〇〇人でもいいですね。つまり、インフレ処理といふことについては、ミスターハー族の所要の理解なんかはどうでもいいので、それがいまの選挙のやうに一票でも多数なら当選するといふやり方と、原理的に異なるところです。

国民のある程度の理解が得られれば、初めて実弾をうつわけですが、それは二つあります。第一は貿易の出超を押へるのです。昨年は三〇〇億ドルの輸出で九〇億ドルといふ莫大な出超、これだけの出超を持ちながらインフレを止めるといふことは、不可能に近いの



です。出超を押へるには鉄鋼、自動車、船舶などの大商品を規制するのがいいので、ある程度以上の輸出には累進的に輸出税をかける。ここ暫くは貿易収支は入超出超零にしてみまふがいいのです。

第二の実弾として、国債を売れる価格、年利八分でもいい、二兆円三兆円といふ大額を目当に発行するのです。そして三年先には国債の自由市場が絶対に出来るといふことと、国債を三百万円以上貯めたら、同額の融資が得られるといふ優待条件をつける。一千万円でも二千万円でもいい、国債を貯めたら同額の住宅ローンが得られる。またやがて自由市場が出来るから、国債を持つてゐればいつでも換金できる。だから貯蓄しなさいと呼びかけるのです。それと共に、インフレとはかういふものだといふ説明は続けて行くのです。物価といふものは放っておけば下がる筈ののですが、みんなが買ふからあがるのです。物が不足で物価があがるのではないのです。物が不足したってお金がなければそれで済みです。金がなければ生活圧迫だと思ふ、それは違ひますよといふやうなことを教へていくのです。そのやうな説教がある程度行ひながら、このやうな勧誘をすれば、一兆円、二兆円は必ず売れます。国債が売れたらその資金は日銀に預けて政府は使はないことにする。これが新しいところでは。国債を買ふのは庶民であり、国債発行がなければ消費に向ふお金を吸収出来る。お金が消費に向はないで日銀に眠ってしまったら、それでデフレが起らない筈はないのです。いまは楽しんで消費節約をするや

メリカを苦しめ、国内は奇妙にいやな世の中になってゐる。これは日本が資源を浪費してゐるからです。田中首相の「日本列島改造論」における昭和六十年の日本の経済の姿は、国民総生産三〇八兆円、いまは一〇〇兆円ですから三倍です。その上昇率を驚くのではないのですが、その時に使ふであらう資源の量は、その頃輸出される全世界の資源の半分を使ふことになる。さうでない、三〇八兆円は実現不可能なのです。これは絶対に出来ない相談です。だから田中首相の列島改造論は廃棄すべきだといふのが、資源論から来る私達の「提言」です。

では日本列島はどう改造すべきかと申しますと、前からたびたびお話したことです。東京周辺から五〇〇万人、大阪の周辺から三〇〇万人、合計八〇〇万人ほどが、主として東北と裏日本に移り住んで欲しいといふこと。これを列島改造論の中心におくのです。つまり人口の再配置です。いま東京駅は地下五階になってゐますが、さういふ投資をして東京はやっとなんでゐるわけです。このまま進めば収拾がつかない状態に陥るのです。いはば無限の富、無限のエネルギーを食ふのです。八〇〇万人が東北と裏日本に移り住んでくれたら、日本の総合能率はいまよりずっと良くなります。これを日本列島改造と意識して実行して欲しいといふのが私の念願です。

私の列島改造を実行するに際しても、新しい議会制民主主義の進め方が必要です。八〇〇万人を受け入れる各地域のプランは、各地域毎に自主的に作成して貰ひ、中央は干渉しない。そ

して道路建設は、用地買収は地元負担だが、工事費は全て国庫負担とし、県や市町村には負担をかけない。これが骨子です。それと共に、三年後には東京や大阪の税金は高くし、移り住んで欲しい地域の税金は安くするといふことを、国民に周知させる。かうすれば八〇〇万人の再配置は、いつの間にか自然に出来てしまふと思ひます。やってみなければわかりませんが、私は間違ひなくさうなるだらうと思ひます。

それにはもう一つ条件があります。八〇〇万人が移り住んでもインフレは起らないのだと言へなければ駄目です、インフレが止められないやうならば、日本列島改造論などといふ大げさなことは、言はないがいいのです。あの田中首相の改造論が出たお蔭で、日本のインフレは昂進してゐるのです。

さきほどのインフレ対策では、発言力のある人が二〇万人、そのうち一万人が六五点ぐらの理解を持ってくれればやれると申しましたが、列島改造の場合は、全国民の理解がなければ成功しません。案を繰り返し返し繰り返し発表して、全国民の検討に委ね、世論調査をしながら行くのです。全国民が理解したであらうことを確めてから、初めて実行に移すのです。インフレ処理の場合と、大變違ふところを、そのわけを、よく味つて下さい。

案を先に示し、国民の理解を得た後に実行に着手するといふのが、新しい議会制民主主義の進め方です。かういふことが出来る日本になれば、先程お話しした台湾との国交回復論と同様

に、すっかりした日本になれる。これが日本を建て直す所以だと思ひます。

（世界経済調査会理事長）

質 疑 応 答

△問▽内外の諸問題に対して、絶対正しいと確信のもてる判断はどのやうにしたら生れるのでせう。

△答▽どんな問題に対しても、絶対正しいといふ判断は持てません。私も始終自分で判断し行動してゐます。行動に移すためには、決心しなければなりませんから、わからないけれども、いまのところこれしかない、といふところで判断を下して進むのです。もしも、行動を迫られる状況にゐなければ、わからないまままで放っておくのです。無理に判断を下して、これが絶対正しいのだと思ひこんでしまったら、頭の回転は止まってしまひます。やむを得ない場合にだけ、まちがってゐるかもしれないが、仕方がないから決める。さういふ謙虚な気持でやつてゐると、それが積みあげられていつて基盤が広くなり、割合にいい判断が出来るやうになる、かういふことだと思ひます。

△問▽「ナショナル・インタレスト」「バランス・オブ・パワー」は過去のものだと御発言についてもう少し御説明下さい。

△答▽私が今後世界は新しい時代にはひるといふのは、これからはもう物量を争ふ時代ではないと考へるからです。物量については世界に或る程度の自由貿易があればいい。それがあれば資源を国土の中にもつ必要はありません。さういふ状況下の国家のあり方といふものは、昔とは非常に違つてくるのです。ナショナル・インタレストといふ関係は、対立するものが共存する必要がある、殺し合ひはまずいからですが、そこでお互に限度を考へて、それは主張する、それ以上は譲らないといふ関係で生きて行く。それがナショナル・インタレストといふものでせう。しかしこれからの国際秩序は、もうさういふものではないので、自分の利益は相手の利益、真に自分にいいことは相手にも必ずいいことである、かういふことが元になる筈です。これは非常に大きな理想主義ですが、やがてそのやうになる。そのやうになるには、いつまでもナショナル・インタレストにこだはつてゐては駄目だと思ふのです。

次にバランス・オブ・パワーですが、これは要するに現状維持です。世界がバランスして動かないのだから、なるほど戦争はおこらないかも知れない。しかし、そのバランスといふのは、自分が優位である現状が続くといふ大国にとつてのバランスを意味してゐるのではないかと、と常々私は思つてゐるわけです。バランス・オブ・パワーで平和が保たれるのではなくて、世界の中に目には見えないけれども「法」といふものがある、それはどういふものだから本当はわからないけれども、心を空しくし心眼を鍛へて、それが見えるやうになりたい、さうす

れば「世界のもつべき秩序」といふものがわかる。さういふことが段々に自覚され構築されて行く結果として世界は平和になる、とかういふ風にこれからは考へるべきだと思ひます。これまで多くの場合世界の平和はバランス・オブ・パワーによって保たれてきたのですが、その考へ方をこえる時代を、私は世界の新しい時代と考へてゐるのです。

△問▽最近共産党は、天皇の国会開院式での御発言に文句をつけました。これに対して自民党は明確な態度を示さないままです。このやうなことでは、ますます共産党に押しまくられるのではないかと恐れるのですがいかがでせうか。

△答▽私もその心配は感じますけれども、このことについては、自民党に余りあれこれ言つてほしくないのです。天皇の御行動は、みんな政治に関係があるのですが、今はだまってゐるのが一番いいと思ひます。憲法改正問題がいきなり天皇の問題でいますぐクローズアップされるのは、私は恐しくてかなはない。今の国論、今のマスコミ、日教組の教育をうけてゐる若い人が多い今日、この問題はだまってゐてほしいのです。だから私は、自民党がボヤボヤやつてゐるのは却つていいぐらゐに思つてゐる。これは言葉では言へないところにあるものですか、あまり言葉の世界であげつらはないほうがいい。十分な資格のないものがあげつらふと、挙とんでもないとところに話がいくからです。

現代の日本と伝統

村松

剛



棟方志功・聖德太子

今回頂戴しました題ですが、実はこの題を決めます前に小田村さんに日本の文化伝統についてお話をしたらいいのか、それとも現代ということに重点をおく方がいいのかということをおたずねしましたところ、両方しゃべったほうがよろしいというお言葉でした。それでこういうふうになった次第です。要するに現代と過去とのなかで、日本の姿を考えてみるということになります。日本の姿、国の姿といえば、つまり国体です。その国体についておはなししたいと思いますのですが、今日のこの場所はたまたま雲仙として、道の所々に十字架が立ったりしています。そこで本題にはいるまえに、キリシタン文化のことについて少し触れておきましょう。

△1▽

日本に初めてポルトガルの船が漂着して鉄砲を伝えたのが、一五四三年です。このとき持ってきた鉄砲が二挺だった。織田信長が武田勝頼の軍勢と戦いましたとき、信長は三千挺の鉄砲を揃えていました。それが武田の、当時無敵といわれた騎馬隊を壊滅させた。鉄砲伝来からわずか三十年ほどです。そのまえに大分の大友宗麟が、千人の鉄砲隊を編成していた。一五四三年から、この方は十年くらいあとでして、そのあと信長が鉄砲による新機軸の戦略を作り上げる。しかもその鉄砲は、輸入品ではありません。大半が、日本で作られたものです。新兵器を使いこなすにいたるまで、たった三十年間でした。実にこのことが、日本をヨーロッパの植民

地にしなかつた決定的な理由だったので。

日本は鎖国令を江戸時代の初めから布きました。この鎖国の弊害については、和辻哲郎さんの著作が代表ですがいろんな形で論じられてまいりました。諸君もおそらくは、中学や高校の歴史の中で鎖国の理由については教わっていると思います。しかしこの問題には、あまり知られてない側面がある。ポルトガルによる日本征服計画です。ローマ法王庁はこれを知られるのをいやがって、日本のカトリック教徒や学者でさえその一番肝腎な文献は殆どのが読んでいません。ところが最近日本のキリスト教研究も非常に発達してまいりまして、ポルトガルやローマ法王庁の図書館で古い文書、——古いといっても十六世紀のものですけれど——調べてくる人が出はじめた。たとえば慶応の先生で高瀬弘一郎という人がおられました、この先生が、「キリシタン宣教師の軍事計画」という長い論文を書いている。これによりますと宣教師たちは、我日本を明らかに占領支配しようとする意図を抱いていた。ただそのために軍事力をつかうか、つかわないかということ、議論になるのです。日本に対して相当な理解を示していましたヴァリニャーノという宣教師がいます。この人は巡察師として日本にたびたび来ているのですが、このヴァリニャーノも、当初はやはり日本を征服しようと考えていたようです。当時のスペインやポルトガルは、新発見地は自分の征服圏だと思っていましたからこれは当然でしょう。例のコロンブスはアメリカ発見のまえに、発見した土地の副長とするという約束を

王さまからもらっているのです。ポルトガル人だってそんな気持で日本に來た。しかしヴァリニアーノは、上司に手紙を書いて、日本を軍事的に占領することはまずい、といているのです。その理由は非常に簡単で、日本は強すぎるということです。だから日本を占領することは困難である。そのかわり日本軍を使って、シナ大陸を占領してしまえ。日本軍は非常に強いから、日本のキリシタン大名の持っている兵力だけでもこれを傭兵に使ってシナ大陸にはいればシナ大陸の占領は容易である。ということ建言しているのです。同じヴァリニアーノの報告書や、それからフロイスの「日本史」——これはまだ残念ながら全訳が出ていません、部分訳しか出ていませんが、——それによりますと、信長が自分は日本を平定したら朝鮮征伐をやつてその次はシナ大陸に攻めこむ、といっているそうです。どうして織田信長が突如としてこんなことを思いついたのかと思うのですが、キリシタンの宣教師たちによる示唆が大きかったのではないかと思われます。これは推定ですが、それ以前の日本に、朝鮮半島やシナ大陸に押しわたるといふふうな思想はなかったのです。信長の計画は、さきほどいいましたヴァリニアーノの日本軍を使ってシナ大陸を占領せよという献言と、符節がびつたりと合っている。したがって信長の着想のかけには、キリシタン側からのなんらかの示唆があった、と考えることは不自然ではないのではないか。そして計画を現実化したのは、秀吉でした。秀吉は最終的には、北京にまで兵を進めるつもりでいたのでして、計画の根底には当時のスペイン、ポルトガルに



よる政策が、大きな刺激になっていたらろうと思われ
ます。

ところで、そのキリシタンですが、一五四三年の鉄
砲伝来ののちに、フランシスコ・ザビエルが鹿児島に
上陸します。それからさらに平戸にキリシタンが来
て、中心が徐々に大村藩に移って行く。この雲仙から
降りた所が諫早で、諫早の向こうが大村ですね。当時
の大村藩主は養子でした。大村純忠といえます。養家
先の大村家には、ほんとうの子供がいたので、母
親の素姓がわるかったらしい。とにかく実子がいて、
実子を擁する家臣団の勢力が侮りがたかった。しかも
平戸には松浦藩が、佐賀の方には竜造寺がいました。
まわりには強力な大名がおりまして、自分は養子であ
る。立場が非常に弱かったのです。そこで彼は、キリ
シタンの勢力を利用しようと思った。キリシタンをわ
ざわざ平戸から自分の藩内の大村港の沿岸によびまし

て、ここにキリシタンの治外法権の地域、いまで言う租界を作らせた。キリシタンの経済力と武力とを利用して藩内を統一し、戦国を生き延びようとしたのです。キリシタンに転向した人間には、金をやっていた、わずかな金ですけれど。だからアツという間に領内四万人の人間がキリシタンに転じたのです。その後、九州各地にキリシタン大名ができます。ところが秀吉がキリシタン禁制を言い出してからは、次の藩主はキリシタン追放の急先鋒になる。自分のおやじが最も熱心なキリシタンだったから、したがって時世が変わると今度は最も熱心な反キリシタンにならなければ生きられなかった。そこでキリシタンの恨みをかいて、彼は毒殺されています。次の三代目も大村家文書によると、やはりキリシタンの手によって毒殺されています。

このあたりには、キリシタンの迫害の跡が非常に多い。キリスト教から転向しませんと、雲仙の温泉の熱が吹き上げていますね、あの中につけて殺したのです。ああいうのを見ているとまことに残酷でして、宗教がいかに人間を残酷にするか。迫害された個々人は、非常に熱心な、誠実なキリスト教徒だったことは疑いをいれませんが、しかしその背景には、いま申しましたような事情があったということが歴史上のもう一つの側面です。

△ 2 V

キリシタンのはなしを長々としましたが、それは何もここがたまたま雲仙で、キリシタンに

縁が強いからだけではない。じつはこの問題が、日本人の国家認識と密接に結びついているからです。日本の幕末いらいの国体論は、キリシタンをぬきにしては考えられない。吉田松陰がいちばん憂えていたことのひとつも、じつはキリシタンによる思想侵略でした。

織田信長の死んだころの日本の人口は、千八百万人ぐらいだったと推定されています。当時のキリシタン人口は百万近くいたでしょう。これは大変な数字でして、現在日本の人口は一億をこえてますけれど、キリスト教徒の数が百万いるかどうか。

日本人は一般に、外からきたイデオロギーに対しては弱いのです。イデオロギーや哲学は、簡単にいえば風俗習慣を異にする異民族を説得するための論理の体系である、といってよからうと思います。日本人は四つの島の中に暮らしていきまして、言葉はみんな同じです。鹿児島弁と津軽弁とがいっしょにしゃべったらどうなるかわかりませんが、しかし文法体系が違うわけではない。一つの国が一言語というのは珍らしい状態です。フィリッピンは言葉が六つです。文字はありません。インドでは、憲法で指定されている国語の数が十四です。カナダは二つです、英語とフランス語。スイスは三カ国語でしょう。日本のように一つの言葉で国内がともかく通じてしまう、ということは、世界でもそう多い例ではありません。そういう家族的国家ですから、日本では下手に理屈なんかをいうとあいつは理屈っぽいといって嫌われる。肩でもたたいて「よろしく願います」といって済ましていたほうが話はしやすい。異民族の寄合世

帯では、そうはゆきませんから、すべてを論理でやるほかないのです。アメリカのように議論好きの国も少いし、あれぐらい弁護士という商売が発達している国もない。日本は風俗習慣もほぼ同じですね。民族も、もとは、韓国から来たのかインドネシアから来たのかわかりませんが、長いあいだに血がまざりあって、一種の純潔民族ができあがった。これはほかに例のない国家です。日本ほど民族としての純潔度の高い国は、ないでしょう。異民族との接触度が高ければ、風俗習慣の違う民族を相手に、いかに自分が正しいかということを説得しなければならぬ。これが議論です。

たとえばドイツとフランスは、約千年にわたって戦争の連続です。そしてパリからドイツ国境まで、三百キロほどしかはなれていないのです。仮りにパリが東京だとすれば、独仏の国境は大体豊橋あたりに当たる。ドイツ軍は絶え間なしに箱根山あたりまで攻めてきていたのですね。そういう歴史を千年にわたって繰り返している。十七世紀の三十年戦争の始ったときに、ドイツの総人口は千六百万人でした。終つてみたら六百万人に減つていたというのです。三千年間に千万人消えてしまった。これには異説もありますが、わずかといつたって四百万です。それに対して日本は、諸君は知っているかどうか、紀元八一〇年から一一五〇年まで実に三四〇年間にわたって死刑というものが行なわれなかつた国です。人間の生命は、いっぺん滅ぼしてしまつた

ら二度と帰ってこない。だから流罪で結構だという趣旨でした。国家への大逆罪はヨーロッパでもシナ大陸でも、妻子眷族皆殺しになったのですが、日本では流罪です。戦場でたまたま殺された人は別です。正式の裁判の場合は死刑がなかった。三百五十年間にわたって死刑のなかった国は、世界で多分日本だけです。しかもそれが九世紀から十二世紀にわたる間で、ヨーロッパは当時戦争の連続でした。そういう日本という国は実にしあわせな温和な民族であった。したがってここではよその民族を説得する必要はないから、だから説得の論理力が発達していない。いまでも下手でしょう。演説なんか、実に下手です。政治家の演説も上手ではないし、いわんやゼンガクレンの「われわれはア、テーコクシユキノオ……」あれに至っては、酔っぱらいのたわごとにしかきこえない。

最初に申しましたように哲学とかイデオロギーとかいうものは、結局は説得の論理の体系化です。自分たちの側にそれがありませんから、よそから精密な体系がはいつてくると、完全にこれにまいつてしまうのです。シナ大陸から仏教がはいつたときがそうでした。十六世紀のキリスト教もややそれに似ている。そして次は十九世紀の西洋文化の到来、第二次大戦後のアメリカニズム、マルクシズムの横行、どれをとりましても常にその時代の新しいイデオロギーに国を挙げて酔っぱらう傾向があるのです。その傾向がまさに、いま申しましたキリストタンの場合にも出ている。もちろん流行には一応それなりの理由がべつにあつて、当時キリスト教が迎

えられる思想的条件が日本のがわに存在したことも事実です。それはそれなりに、否定できない。

この問題に今日は深入りする余裕がありませんが、要するに仏教が現世道徳としての規制力を失っていたことです。日本の仏教は、生き方よりも死に方の教えとして扱った。このことは日本人の伝統の深い部分とつながっていると思いますが、要するに日本人は仏教から、自分の身丈に合うその部分——死に方の部分——をもつばら吸収したのです。仏教は日本では、浄土信仰を中軸として扱ったのです。「南無阿弥陀仏」と唱えていけば西方浄土、つまりは極楽に行けるんだという考え方です。あるいは南無妙法蓮華経でもいい。とにかく仏教の形而上学的部分は、大衆のあいだではどこかに消えてしまった。浄土信仰の創始者の恵心にしてもそのあとの法然にしても、偉いひとだと思えます。彼らは自分の中に、救いがたい地獄を見ていた。どうにも救いがたい人間が、なまじっか自分の力で悟りを得ようとしたってそれはむつかしい。むつかしいからなまじっかな誇りをすててひたすら仏の慈悲にすがること成仏せよ、それが彼らの教えの基本です。徹底した自己認識ですが、ここで問題はその浄土信仰が、世界観の機軸を移し変えたことです。仏教は本来決して、彼岸中心の教えではない。それが浄土信仰によって、世界観の機軸が西方浄土へ行ってしまったのです。西方浄土に行ってしまうとここではもはや人間は動かないし、六道を輪廻りんねすることも無い。不退転であると恵心は書いてい

ます。向こう岸に永劫の实在世界があるのなら、こっちは空しい世界でしょう。だから世の中は幻であり夢である、ということになる。人生は幻であり夢であるという認識は、平安朝から一般化して行きます。幻の世ときまったら、もう道德なんか成立しようがありません。どうせ何をしたらうその世の中なので。浄土信仰を徹底させた親鸞は、戒律を廃するところまで行きました。当然のみちすじでしょう。人生は信じられない。自分も信じられない。だから自分をすてて救われたいと願う。なまじっかな誇りをすてて救われなさい。善人なおもて往生す。いわんや悪人をや。悪人の方が、なまじっかな誇りをもっていないから救われる、ということ。浄土信仰を軸に、日本の仏教は展開したといいましたが、これが徹底すれば現世道德はなくなってしまう。つまり日本の仏教は広ろまっていくにつれて、墮落もしたし、一方では現世の道徳的な規制力を失つてくる。では何がその部分を埋めたかということとして、それが儒教でした。浄土信仰が広ろまったのが鎌倉期ですが、そのときにちょうど宋から知識人が多勢逃げてくる。蒙古に宋がほろぼされたからです。特に禅宗の坊さんが、多勢来ます。これが朱子学を、日本に伝える。それ以前から儒教の典籍は、たくさん日本にはいっていました。しかしつよい実践道徳としての儒教がはいつて来たのはこの時代からです。そこで一方に浄土信仰があつて、現世の道徳としては儒教という形が、鎌倉期を通じてでき上がつて行く。ついでに申しますと日蓮宗は非常に現世哲学的な色彩が濃く、ある意味では日蓮宗は、浄土信仰に缺けてい

た現世道徳の部分に補った教えという性格を、持っていたのです。日蓮宗もそういう時代の要請にしたがって出てきた、と考えていい。そして、そのあとに、キリスト教がはいつて来るのです。キリスト教は一面では彼岸信仰、天国信仰がよく、しかも現世道徳も当時は非常に厳しかった。死んだら天国に行くという信仰と、現世の道徳的厳しさ。これはちょうど日本の浄土信仰とそれから道徳的には儒教とをセットにした形と、非常に似ていたのです。日本の場合は浄土信仰と儒教とは本来別のものですが、キリスト教の方は両者が一貫していて、千数百年間かかって整備されていますから巨大な哲学になっている。当時の日本人が、それまで持っていた教養からわりに簡単にキリスト教にはいり得た理由がそこにあるし、また日本人の期待になつてもいたのです。しかしキリスト教は一神教ですから、ほかの神をみとめない。排他的ですし、政治的野心もその背景にはありました。キリシタンの立場からは、他国を征服してキリシタンにすることが、人類を救うゆえなのです。大名たちははじめはキリシタンを政治的な理由から歓迎しましたが、武士団が、ぜんぶキリシタンになったら、日本はローマ教会の思うままでしょう。そうでなくても豊臣秀吉は、信長の部下として一向一揆と戦い、にがい目にあっています。秀吉は天下を統一するとすぐに、外国人のバテレン追放の命令を出します。

外人バテレン追放令の理由は、いろいろに論じられていますが、根本的な原因は明白と思われ。諸侯のひとりだった秀吉と、天下統一者としての秀吉とは、立場がおのずからちがうの

です。軍事力による日本征服計画をキリシタンがかりに放棄したとしても、教会が武士団を洗脳して、日本がローマやポルトガルにコントロールされたのではたまらないと、秀吉は考えたようです。彼が出した命令書を当りまえに読むと、そのことへの危惧がはっきり浮かび出て見えます。その政策を、家康がうけつぐのです。

△3▽

キリシタンの問題をぬきにして、江戸という時代を考えることはできません。

島原の乱（一六三七年）から黒船の来航まで、幕府の指導者層の上にはキリシタンのかげがつねに尾をひいていました。

江戸に幕府がつくられてからあと、最後に行なわれた大規模な戦いは、いうまでもなく島原の乱でした。島原の一撥の執拗な戦いぶりは、徳川の生残りの宿老たちには、三河一向一揆とのつらい戦いの思い出を、よみがえらせたでしょう。団結力を誇った徳川の家臣団が、このときは分裂しました。キリシタンによる日本支配の謀略という豊臣政権らしいの不安が、その上にさらに重なります。この不安はすでに述べましたように無根の幻影ではなく、明瞭な根拠をもっていたのです。

鎖国令と宗門改役の設置とは乱の翌々年、寛永十六年（一六三九年）のことです。それからあ

との幕府のキリシタン探索のきびしさ、神經質さは、殆ど異様とわいていい。キリシタン禁制の高札は『徳川実記』で見ますと天和のころまでは毎年、ときには一年に二度以上、新しくかけられています。

キリシタンはたとえ棄教しても、棄教以前につくった子は六代目まで「類族」とみなされ、半年ごとに官に消息を届出なければならぬことになっていました。

一世代を三十年とすれば六代は百八十年で、こんなに執念深い探索、監視は、日本の歴史上類例がありません。他国にも、たぶん例がないでしょう。（ヒトラーの、例のユダヤ人弾圧の場合でさえ、ユダヤ人の定義は祖父母——三代まえ——にユダヤ人がいることでした。）それでも元禄の布告では、「類族」はまだ監視の対象にとどまりましたが、享保年間になりますとついに「類族追放令」が出ます。

「邪教類族のもの。これまでは追放にはせざりしが、今より後は追放せらるべし。」

鎖国を幕府は、基本政策としました。その理由としてはキリシタンの問題のほか、幕府の貿易独占慾などの財政的事情の存在が指摘されています。むしろそちらに重点をおく方が最近は通説化しているらしく、キリシタン追放はいわば名目だったという見方さえあります。貿易が拡大されれば農業を基本とする幕藩体制は、根本から揺さぶられたわけですから、経済的事情はむしろ無視しがたいでしょう。しかし八代將軍吉宗の時代にいたってなおキリシタンは罪

六代に及ぶという幕令を出している事実は、名目などということでは片づけられないのです。

一切のキリシタンから日本を「滅菌」状態におくことを、幕府は望みました。前年の享保二年（一七一七年）には吉宗は長崎のオランダ人に作事奉行を通じて、オランダが今後とも日本との通商を望むのなら「天主教を奉ずる国々と通交すべからず」と改めて申しわたしています。

オランダに幕府がカトリック国との修交を禁じたのでして、これでは国内諸侯と同じ扱いです。蘭人はどんな気持で、この申し入れをきいたろうかと思えます。一方でキリスト教と関係のない洋書に関する禁令の解除が、享保五年（一七二〇年）に出ました。この緩書禁令は江戸の蘭学発展に道をひらいた措置であり、吉宗の「進歩性」のあらわれとしてしばしば論じられています。

要するに吉宗の希望は、日本をキリシタンから滅菌状態においた上での新技術の導入でした。キリシタンからの国内の「浄化」は、このころには一応片づいていたのですが、諸事神君のむかしにかえすことを理想としていたこの將軍は、国内には罪六代に及ぶという禁令を出しオランダにはカトリック国との修交を禁じ、その上で、禁書をゆるめるという手順を踏みました。

その神経質な幕府の感情を逆撫でするような事態が続出したのは、同じ十八世紀の末期からです。十八世紀から十九世紀にかけては、造船技術の大きな転換期でした。十八世紀末のヨ

ロッパでは千二百トン級の木造帆船がつくられ、全長五十メートル内外の巨船がアジア航路に就航しはじめました。蒸気機関による鋼鉄船も、十八世紀に出現していません。

日本の近海に「外夷」がさかんに出没するのは、一七九〇年の前後からです。

ロシアからラクスマンが、日本の漂流民をつれて正使として来航したのが寛政四年（一七九二年）でした。ロシアの軍艦はその後、樺太と択捉島エトロフとの日本人村を襲撃しています。松平定信の随想『閑なるあまりシツカ』によりますと江戸は騒然まぢぶれとなり、「至ての遠島の事いやは」だから驚くこととはないと町触まちぶれしても、浮説をおさえることができなかつたといえます。

フェートン号事件が、これにつづきます。イギリスの軍艦フェートン号が文化五年（一八〇八年）にオランダの国旗をかかげて長崎に入港し、だまされて乗艦したオラ



（左から村松講師、小田村理事長、木内講師）

ンダ人を人質にして食料、薪水を入手し、港内を探索した上で引揚げて行きました。当時オランダはナポレオンの支配下にあり、したがってイギリスとは対立していたのです。長崎奉行は割腹して死にました。

こうした一連の事件は、キリシタンへの恐怖をつかの間の眠りから当然呼びさますことになります。異人船の出没のもたらした危機意識が日本人のナショナリズムを触発し、それが尊王攘夷という思想運動となって爆発することは、ひろく知られています。尊王攘夷思想の発火点は、水戸でした。そして幕末水戸学の形成の背景には、キリシタンの再「侵寇」への危惧が、強力な発条として働いていたのです。

水戸学の代表的な著作は、会沢正志斎の『新論』です。文政八年（一八二五年）に書かれたこの論文のなかで、会沢は紅毛人の来訪を何よりもまずキリシタンによる「侵奪」の危機として説いています。「各国邪蘇之法を奉じて、以て諸国を吞併し、至るところ祠宇を焚燬して、人民を誣罔し、以て其国土を侵奪す」（原文は漢文です）。

かつて邪法の徒は、ルソン、ジャワを侵して日本に迫り、「西辺を煽動」して天草の乱までも起こしました。「幸にして明君、賢佐、その姦を洞察し、誅鋤夷滅して、また焦類（残党）なく、邪頑の徒も（キリシタンの）種を中土（日本）に易ふるを得ざるもの、ここに二百年、民をして妖夷の煽惑より免れしめしは、その徳沢たるや大なり。」

鎖国と切支丹禁令とによって、「妖夷」の邪法はあとを絶ちました。ところがいま、新たな危機が迫っていると正志齋は警告するのです。

「今、夷虜は禍心を包蔵し、日に辺陲へんすいを窺伺きしして、邪説の害は内に稔り、百端の窮りなきことかくのごとし。夷狄を中国（日本のこと）に養へば、天下嗷嗷あうあうとして、民に淫朋あり人に比徳あり」

比徳の比は、「おもねる、くみする、へつらう」の意のようです。要するにキリシタンの邪法がひとたびはいつてくれば、民衆は時代の風潮に動かれやすいから、日本はどうなるかわからない。「虜は妖教、詭術を用いて、以て人の民を誘う。」

攘夷思想の根底には、キリシタンという「妖教」への恐怖心があったのです。この事実はいまでは不思議なほど、問題にされません。明治以降、ナショナリズムが文明開化の方向へと路線を一変させたことの余波でしょうか。

文政七年（一八一〇年）の五月にイギリスの捕鯨船数隻が水戸藩大津浜に來航し、十二人が上陸するという事件がありました。水戸藩内に上陸したのは偶然でしょうが、結果からいって彼らは、日本の神経叢の中心に触れたこととなります。水戸は藩祖・光圀みつあきらしい『大日本史』編纂を藩をあげての事業として、尊皇心もあつかった。また水戸藩主は江戸常勤を——参勤交替制の例外として——特認され、それために巷間では副將軍の名で呼ばれていました。それ

だけに藩としての枠をこえた国家意識が、ほかよりは一般につよかったのです。

大津浜の事件のとき、藩命によって現地に赴き、夷人たちと筆談をかわしたひとり、会沢正志斎でした。『新論』はその翌年の執筆で、後はこれを藩主斉脩に献じています。斉脩のあとを嗣いだのが烈公・（いじなりあき）齊昭で、正志斎は齊昭によって拔擢されて藩政に列し、史館総裁に、のちには弘道館総教となります。齊昭は幕府に建白書を上呈し、キリシタン吟味を鞏化することをすすめています。

ヨオロッパの十九世紀は、ナシヨナリズムの沸騰期でした。ヨオロッパにナシヨナリズムの気運をふりまいたのは、周知のように、ナポレオンのひきいる革命フランスのグラン・タルメ（大軍団）です。時期的にはそれとほぼ躡（きびす）を接して、日本にもナシヨナリズムの大思想運動が起りました。日本の場合、訪れて来たのは、異質の宗教世界からの巨船に乗った使者たちであり、植民地化への危機感はこの十六世紀らしい、異質の宗教へのアレルギー反応を噴出させたのです。

国体論もキリシタン再来のその不安のなかで、これに対応する自己確認の作業として形成されました。その国体論がやがては幕藩体制そのものを破壊する、という順序で幕末史は進行します。

Λ 4 V

国体ということを日本で最初に主張しましたのは知られているかぎりでは会沢正志齋です。

会沢正志齋の国体論は、すでに述べましたようにキリシタンの脅威を前提としていました。

キリスト教といっても単一ではなく、天主教（カトリック）のほかにはプロテスタントが出てくることは、彼も知っていたようです。しかしどのみちキリスト教に変わりはなく、「大異あるにあらず。而してその法教を借りて以て呑併を逞くするに至っては、すなはち一なり。」といっています。紅毛人の爪牙にかかっていけないのは、日本のほか「独り満清あるのみ」と彼はいいますが、これは本当でした。（朝鮮・安南等は例外で、「未だ妖法に変ぜられず」しかし小国だからいまは除外する、と正志齋は註しています。）

満清（清国）もそれから十数年ののちには、イギリスに阿片戦争をしかけられる運命にあります。この時代から明治にかけての識者の不安と緊張感とは、現代の人間には殆ど想像できないほどのものでした。

こういう外敵にたいしては、富国強兵策のみでは足りないというのが、会沢の主張の基本です。国内が邪教に染められ、民が「胡神」のためによるこんで死ぬ状態におちては、強兵策は意味をもちません。養った兵は、敵がわにつくでしょう。大前提は、国としてのアイデンティ

ティイの確立です。そのアイデンティティを、会沢は国の体の名で呼びました。「国之体となす其れ何如ぞや。夫れ四体具はらざれば、以て人とはなすべからず、国にして体無くんば何を以て国となさんや。」

そうでなくても日本は、二百年の泰平になれて兵が弱いのです。これにたいして紅毛人は戦闘に習熟し、火器も卓越していることを彼は指摘します。この点は彼に師事し『新論』の影響をつよくうけた吉田松陰でも、真木和泉守の場合でも、同じです。真木和泉守などは、日本の軍事上の弱点を十箇条にわたって列挙しています。

だからこそ、まず国のアイデンティティを確立し、外来の邪説を寄せつけずに兵を養うことが急務であると、『新論』に代表される水戸学派は主張した。攘夷論は世間知らずの排外主義者の言と思われがちですが、少くとも当初の段階では逆に軍事力の劣弱性への切実な認識がその基礎にはあったのです。

日本のアイデンティティ、日本の国体とは、会沢によれば、天祖が国を樹てていらい「天胤、四海に君臨し、一姓歴史として、未だ嘗て一人も敢へて天位を覬覦するものあらずして、以て今日に至れる」ことにあります。すなわち万世一系の皇統をいただく国柄、ということです。

皇祖皇胤を天祖天胤と、会沢は呼んでいます。つまり彼は記紀（古事記と日本書紀）の伝える

皇祖を、儒教の天と同一視しました。天照大神が、そのまま天になります。

その国体を守って「兵は必ず命を天神に受け、」天人ひとつとなって「億兆心を同じく」することが、邪教を武器とする夷虜に対抗する基本であると、『新論』は説くのです。

正志斎の論は、もちろん幕藩体制そのものを否定するものではありませんでした。天皇を戴いた幕藩体制が、彼の抱懐した日本の姿です。「大將軍は帝室を翼戴して、以て国家を鎮護し邦君（諸侯）はおのの疆内きょうないを統治し、民をして皆その生を安んじて寇盜を免れしむ。」と彼は書いています。幕末の用語をつかえば、公武合体論に近いでしょう。

『新論』では、皇祖が天祖であり、記紀の伝える国生みの神話が儒教と結びつけられています。しかしこういう神儒の混合は正志斎の独創ではなく江戸の初期から行なわれていました。山崎闇斎や熊沢蕃山が、有名な例です。闇斎の場合は記紀神代卷に、造化陰陽の発現を見ました。国常立尊くにのとこたちのみことは造化の神であり、その血脈をつぐ日本の皇室は、まさに天帝にほかなりません。江戸初期いらいの天祖の論が、幕末の危機意識のなかで国体論としていっそう鮮明化されるのです。

そのむかし西夷は、日本にただ一法師を派遣しただけで国を傾けた、と松陰はいいいます。一法師とは、フランススコ・ザヴィエルをおそらくはさします。「往昔の葡、伊、一法師を遣はして猶ほ能く人の国を傾く。今、密尼斯篤兒ミニストル（公使）・昆須屢コンスル（領事）の権力豈に特に法師の

比ならんや」幕府はキリシタンを迎え入れて、前車の轍を踏もうというのか。「百憂何ぞ止まん。」〔附論三則〕

松陰は、鎖国の永続を主張したわけではありません。将来は開国すると墨夷に約束しておいて、まず国家のアイデンティティーを——国体を——明徴化し、「貴賤を問はず」兵を抜擢して国防をかため、諸外国に「館を設け将士を置き」外事を十分にしらべ、その上で三年後に加里蒲爾尼亞にこちらから出向いて和親条約締結の約束を果せ、というのが彼の説でした。松陰の有名な外国渡航の企ても、この信念にもとづいています。

和親条約拒否の勅諭が、安政五年（一八五八年）三月に下ります。松陰は、歓喜しました。「嗚呼、神州の振はざること久し。一旦勅諭震発するや、正論鬱興す、誠に曠代こうだいの盛事なり。」〔對策一道〕

だが幕府は、この勅諭にそむいて同年六月に、日米和親条約に調印するのです。このときから、尊王攘夷は討幕へと方向を変えました。「何程巧言奸弁ありとも、幕府違勅の罪は明々白々なる事どもなり。」（松陰『時義略論』）外に向かっていた力が、ここに討幕への奔流となるのです。

かつて十六世紀は、スペイン、ポルトガル等の国々の大征服大航海の時代でした。当時の日本が軍事的に弱体だったら、日本はフィリッピンやペルーと同じ運命を確実に辿っていたでし

よう。

それいらい培養されて来た日本人の警戒心を、幕末に紅毛人の船が荒々しく喚び醒したので、アジアは殆どが彼らの植民地と化してしましたし、ことにとり清国へのイギリスの侵略——阿片戦争——は、日本の識者を戦慄させました。キリシタンの思想侵略に対抗するためには、ナショナル・アイデンティティーの確認がまず行なわれなければなりません。国体論はそれであって、その尊王攘夷の国体論がやがて幕府を破壊するにいたります。

いまでは悪名高い踏絵をさして吉田松陰が、「絵踏の良法」といつている事実はあまり知られていません。「二百年來徳川家第一嚴禁たる天主教をも許し、絵踏の良法を改除し、他日の患害已に目前に備はれり。」幕府が勅諭にそむいてアメリカとの修交通商条約に調印してから三箇月後に書かれた文章です。踏絵は、その前年、安政四年（一八五七年）に廃止されてきました。ここにいたっては、と松陰は右の文のすぐまえにいつています。「天朝格別の御英断なされずては、神州は必ず夷狄の有となるべく、皇太神の神勅も今日きりなり、三種の神器も今日きりなり、豈に痛哭に堪ふべけんや。」

国体論はキリシタンの思想侵略への不安から出発したものであり、「絵踏の良法」は松陰の立場からは当然の発言でした。松陰の弟子たちを指導者層のなかに多く含む明治政府は、幕府を倒してのちは開国の政策をとりましたが、開国はいわば攘夷のための開国で、ナショナル・

アイデンティティ堅持の方針を崩したわけではなかったのです。

こうして形成された国体論が近代日本を支え、明治の教育勅語のなかにも明確に基調としてはいっていることは、諸君も知っているでしょう。国をつくる以上、どういふ姿の国をつくるかということを考えるのは、当りまえです。国なんかなくていい、などと気楽なことをいうひとがいる。若いひとには、ことにそういう極楽トンボが多い。それではなぜパングラデシユはあんなに苦勞して独立したのですか。なぜ世界に、次々に独立国がふえているのですか。第二次世界大戦のまえまで、世界に独立国は五十いくつかしかありませんでした。いまは百四十以上の国があります。国がいらなくて、世界が連邦に向かうのなら、国の数は減っていいはずでしょう。世界の動きは、これとは逆です。

イデオロギーがもしも国境をこえるのなら、中共とソ連との対立は説明できない。中ソ間の戦争がいつ起こるかということ、国際政治の研究家のあいだでの大きな話題です。クウェートとイラクは年中国境で戦争をくりかえし、イラクとイランとも仇敵の間柄です。そしてこの三箇国はすべて回教の国々であり、クウェートとイラクとは同じアラブの国家です。民族国家は依然として世界の単位ですし、次々に新しい国が誕生するのは少数民族は大きい民族の下にいたら不幸だからです。民族国家の形成が、幸福を保障する。

国をつくるのには、国の理念が必要です。日本人は幸いに四つの島に隔絶されて暮らしていま

したから、自分の国はどうあるべきかなどと改めて考える必要に迫られませんでした。立国の意味を、ひとに説く必要がなかった。その必要に迫られたのはキリシタンという強力な思想が目前にあらわれたときからであり、とりわけそれが高度の軍事技術をもって迫って来た十八世紀末からあとでした。日本人は、自分のアイデンティティを考えた。

それが国体論です。キリシタンという宗教に対抗する必要上から、国体論が擬似宗教的な色彩を帯びたことは否定できません。しかしまた「国体の精華」へのつよい誇りと信頼とが、キリスト教世界とはまったく独立の独自の近代国家を築き上げる原動力になったことも、見落すべきではないでしょう。戦争中の特攻隊員は、国体の精華と悠久の大義を信じたからこそ、従容として死に赴いたのです。

敗戦は、国体の理念を破壊しました。アメリカの黒船が結晶させた国としてのアイデンティティを、当のアメリカが再び破壊に來た順序です。教育勅語は、一片の閣議決定で廃止された。それらしい日本人は、国の姿についての合意をさえ得られないでいます。

民族国家は、幸いに残りました。ドイツや朝鮮韓国のように、日本は国土を分割されずにすんでいます。天皇もおられます。しかし国の姿についての合意はない。国の姿についての合意がないということは、国としての基本的方向が、あるいは意志が、きまらないことを意味します。基本的方向なしに、道徳があり得るか。個性があり得るか。

魂を失った日本の繁栄とは、ずいぶんまえにあるアメリカ人のいったことばです。魂を失わせることに大努力を払ったのが当のアメリカ人ですから、ずいぶん無礼な表現と思いますが、向こうがどんなに大努力を払ったとしてもやはり詮じつめれば失った方がわるい。

日本はどこに行こうとしているのか。見失われた姿を、もう一度とりもどすことが、若い世代に課せられた課題であるはずです。現代の日本が国際的につらい立場に立たされていることは、いうまでもない。米ソの力関係を考えても、ソ連の軍事力はいちじるしく巨大化しています。アメリカが世界最強の国だった時代は、とおく去りました。だからこそアメリカは、中間の緊張を利用して中共をうまく使おうとしている。その結果中共の力が国際的に身分不相応に大きくなり、一方では日本には資源がないので、燃料資源を豊富にもつ国のおどかしにも怯えなければならぬ。あっちこっちにウロウロと色眼をつかって歩くという何とも情ない恰好をいまの日本はとっています。背骨がないから、エコノミック・アニマルと罵られもする。

いまは国際化の時代である、といいます。「ソレイユ・ルージュ（赤い太陽）」という映画がありました。三船敏郎が出演して、フランス人のアラン・ドロンが共演して、原作を書いたのはフランス人で資本を出したのはアメリカで、ロケーションはスペイン、出来上った映画をインド人が見て涙を流している、というふうなそういう時代です。こういう時代は歴史上かつて

なかった。まさに国際化の時代です。では国際化の時代だから、外国のことだけを勉強すればいいのか。そういうものではないのでして、私たちが国際社会に出て行って、いくらイギリス人のまねをしたって、本物のイギリス人にはなれません。まがい物になるだけです。いくらフランス人のまねをしたって、フランス人にはなれない。フランス人のまがい物になるだけでしよう。まがい物は決して尊敬を勝ち得ることは出来ない。私たちは日本人であることを止めることによって、国際人なんていう変てこりんなものになるのではないのです。中国人のまがい物になるか、イギリス人のまがい物になるか、ロシア人のまがい物になるか、何かのまがい物になるだけです。まがい物は何人の尊敬も受けません。女がいくら男のまねをしたって、男にはなれない。逆に男がいくら女のまねをしたって、女にはなれないでしょう。女のまがい物になるだけです。まがい物は、尊敬もされず愛されもしません。それと同じで、国際社会でも、本当に尊敬を勝ち得ようと思つたらまがい物になるのが道ではなく、一流の日本人になる以外にないのです。

川端康成さんは横光利一が亡くなったときに、「私は日本の山河を魂として生きる」ということを言われました。若いころの作品はともかくとして、戦後の川端さんの作品はご存知のとおりきわめて日本的なものでした。そしてまた、だからこそ川端さんの作品は、高い国際的評価を受けたのです。三島由紀夫の場合は、もっとそうです。ゲーテが「真に民族的なるものこそ

が真に国際的なのだ」ということをいいました。申し上げるまでもなくゲートは十九世紀に、おそらくは最大の国際的な活躍をした人です。だからこそ、その機微をよく知っていた。これから国際化はますます進行してゆくでしょう。そういう時代であるだけに、いつそう申しあげたい。本当に国際的に評価されるためには、本当の意味で民族的になることが大事だということとをです。

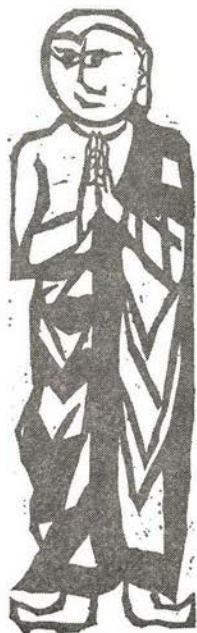
一流の日本人になることをおいて、国際社会に生きるみちはない。そのことを最後に、いいそえておきたいと思えます。ひとを動かすのは誇りであり確信です。誇りも確信もない無個性の「文化国家」などというものが、はたしてあり得るでしょうか。

(文芸評論家)

■ 青年研究発表

私の心は合宿教室の中でかく定まった

戸田建設 働 本社設計部 青山直幸(二十四歳)



ただ今御紹介に預りました青山でございます。私は社会に出て未だ一年半しか経ってをりません。未だ生々しく学生時代の記憶が残ってをりますので、それを回顧しながらこの合宿教室と私のつながりについてお話し致したいと思ひます。

私が、大学に入学致しましたのは、今から五年前、折しも、あの東大紛争が燃え上った時でした。現在も一部の大学では封鎖や、暴力事件が次々に起つてをります。一見平穩に見える大学においても、大学問題は、本当に解決されてゐないことは、皆さんが御自分の大学について思ひ返して頂けばおわかりいただけると思ひます。私が入学すると間もなく医学部を筆頭に、各学部は、次々にストに突入していきましました。教養学部でも、毎日のやうに、クラス討論が行はれました。赤や青のヘルメットをかぶつた活動家達が次々と教室にやってきてはアジ演説を行ひ、スト突入を叫びました。私のクラスは、最初のうちは、クラス六〇人のうち、民青系は、二、三人、全共斗系が、七、八人、他はノンポリといふ状態でした。しかし学内が騒然としてくるにつけ、ノンポリの大半が、全共闘系に同調してしまひました。私はクラス討論で、理由がなんであれ、学生がストライキを行使するといふことに對し、どうしても納得がいかぬ、授業を受けたいといふ学生の氣持を蹂躪してまで主張を通さうとする態度にはどうしても我慢がならないといふ意見を述べました。しかし私の意見は、ヘルメットをかぶつた活動家達の「ナンセンス」といふ怒号によつてあつといふ間に、かき消されてしまひました。クラスに

おいてもスト突入の決議がなされ、つひには学部投票でスト突入といふことになってしまったのです。私はすっかり元気をなくし、下宿に閉ぢこもってしまひました。

さうした状態の時、この「学生青年合宿教室」に、ある友達から誘はれたのです。合宿の初めての体験、私にとって、毎日毎時間が、緊張の連続でした。学園での殺伐としたクラス討論に比べ、この合宿で行なはれてゐる班別の討論は、驚くべきものでした。班別討論において私が学園生活での体験を述べますと、友らは、私の一言一言にうなづくやうに耳を傾けてくれました。又、ある友は、自分にもそのやうな体験があると、その体験をしみじみと語ってくれました。さうして、合宿も第四日目となりました。このたびの合宿で、初日に導入講義をされました小柳陽太郎先生が、登壇され、吉田松陰が、野山獄といふ牢獄で囚人達を前に孟子の講義をされた時の講義録である「講孟余話」をテキストに使はれました。先生は、吉田松陰の言葉の一つ一つを正確に辿られながら、松陰の気魄、心の定め方について肉迫されていきました。大学紛争についてもふれられ、最後に私達一人一人をしっかりとつけるやうにして、かう言はれました。「君達には、孤立化を恐れて、千万人と言へども、我いかむ」といふ感慨がない。そして、多数派の意見であれば、誤りがあると思つても、それを正していく勇氣がないのではないか。」と。さきほど申しましたやうに、クラス討論において自分の意見が全く相手にされずに、ふさぎこんでしまつてゐた私にとって、この御言葉は、余りにも強烈なものでした。突然強烈

な平手打をくらったやうな思ひでした。この瞬間私の心は、定ったのです。こんなにも心をこめて、叱責して下さる方が、今の大学に果してどれだけいらっしゃるでせうか。私は、先生のこの御言葉を胸に、合宿教室を終へ、山を降りました。

○
九月になると直ちに、この合宿に参加した東大の仲間とともに、ストについて、大学の自治について、学問のあり方について、自分達の見解をまとめ、ビラにして配布し、有志を募る運動を始めました。活動家の連中に、とり囲まれ、こづかれることも、しばしばありました。かうした妨害や、一時は増えた有志が次々に離れていってしまふことの寂しさでややもすると、くじけさうになる私達をからうじて支へてくれたのは、この合宿で教へて頂いた古典を、仲間とともに輪読するといふことと、和歌を創作し、それを友と共に批評しあふことでした。昼間の活動に疲れた体をむちうちながら、私達は古典に取り組みました。この合宿の必携書になってをります黒上正一郎先生の書かれた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」にも、初めて自分達だけで取り組みました。その頃、私は、「こんなにも一生懸命やっているのに学内の状況は、いっかうによくありません。僕等の言ふことに本気で耳を傾けてくれるやつなんかあるやしない。何もかも活動家の連中や、何もできないでゐる教官達が悪いんだ。」といふ風に、やけ気味に、又傲慢になつてきてをりました。さうした時、次のやうな聖

徳太子の御言葉に触れたのです。「何となれば則ち若し、天下の道理を論ぜば、悪を遣り、善を取るは、必ず己に始まりて方に能く人を勧む。若し、自ら能くせずんば安んぞ人を進むるを得む。」この文章は「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の五十二頁八行目にございますから、後でご覧下さい。

簡単に解釈しますと「これはどういふことかといへば、もしこの世に住む人として、ふみ行ふべき道を論ずるならば、悪い事を遠ざけ、善い事を取り入れるのは、必ず自分から始めてこそ、人にすすめることができるのである。もし自分からそれを実行するのでなければどうして、人に説きすすめることができるか。」この「若し自ら能くせずんば安んぞ、人を進むるを得む」といふ言葉が、なんと強く私の胸に響いてきたことでせう。たえず、自らを省み、日々の行なひ



の一つ一つに、最善を尽して生きていかうと努力しないものが、どうして他の人に人の道を説くことができませうか。私は、聖徳太子の強く厳しい御声が実際に聞こえてくるやうな気が致しました。古典に取り組み輪読する喜びといふものが初めてわかったやうな気が致しました。かうして古典の輪読会は次第に私たちの中に根をおろしていききました。さらに、私たちは友情を深めていく上でなくてはならないものを見出しました。それは、この合宿で、教へて頂いた和歌を創り、批評しあふことでありました。私達は、その日その日の思ひを卒直に言葉にしていかう、そして三十一文字の中にもりこんで和歌にしてみようと努めました。皆さんも、今日実際に和歌を創られて、たった三十一文字であるけれども、和歌を創るといふことがどんなに難しいことか、しみじみと感じられたことと思ひます。自分の気持をなんとか正確に表現したいと思つても、なかなか適切な言葉が出てこない。ああでもない、かうでもない苦しむうちに、自分のもののみかたが、いかに不正確であるかといふことに気がついてきます。しかし苦勞して和歌を作り得た時の喜びは、格別のものでありました。もっと楽しかったのは自分の作った和歌を仲間同志見せあつて批評しあふことでした。友達といふものが、どんなにありがたいものか、しみじみ思ひました。といふのは、私の和歌について厳しく指摘してくれらることによって、自分では気づかない私の人生に対するとりくみ方の問題点をずばり言ってくれたからです。今の学園生活では、このやうな厳しいつきあひが、果してなされてゐるでせう

か。このやうな友情は、ほんたうに、かけがへのないものだと思ひます。かうしてゐるうちに、私達には古典に取り組み、和歌を作つて批評しあふといふ活動がほんたうに大切なものだと感じられてきました。そこでふれた先人の言葉、友の言葉を胸に刻みつけながら私達は次の活動へとたちむかつていったのです。以上学生時代の経験を中心に述べましたが、最初の合宿において、定つた初一念は、社会に出た現在も變つてをりません。先程申しました古典の輪読会も、それ以後も、なんとか続けることができ、現在も、現役の学生諸君とともに、週一回、出身大学の学生会館の読書会室において行つてをります。

私は、建築設計部に所属してゐる技術者でございます。従ひまして、残業で、夜九時、十時になることも、多うございます。一日の疲れで鉛筆をにぎる手の動きが鈍くなつたやうな時、古典の輪読会での友の言葉が、ふとよみがへつてきて体の底から力が湧いてくるのがよくあります。古典の輪読会及び和歌相互批評においてふれる先人の言葉、友達の言葉が、今まで気づかなかつた自分の欠点を知らしめてくれる、こんなありがたい勉強の場を私は、もつことができるのです。今にして思へば、このやうな、共に学ぶ場を私に知らしめてくれた、合宿教室といふものは、かけがへのないものだと思ひます。今後も学生諸君と共に、益々学問、祖国、人生について懸命に、勉強していききたい、そして職場においても、精一杯がんばっていきたい思つてをります。

学問の「きびしさ」と「よろこび」

大成建設(株)福岡支店管理部 山口 秀 範 (二十四歳)



棟方志功・阿那律

私が早稲田大学に入学した昭和四十三年頃は、安保改訂・大学立法施行等、数多くの問題が世間を騒がせてゐる時期で、所謂第二次早大闘争と呼ばれて、毎日毎日が騒然とした学内でした。大学は学問の府、真理探求の場と言ふけれども、どこを見てもそんな雰囲気は見当りませんでした。大学の講義に出ても胸の踊るやうな言葉は聞けないし、第一、講義中に学生がたばこを吸つたり、また講義の中途でも平気で教室を出て行つたりする。それを見ても先生方も一言も注意されようとしなない。高校時代からすると考へられもしない状況でした。また、我々学生にとっては死活問題であると言つては、講義時間を無理矢理「クラス討論」に替へてしまふ。しかし、その中で話題とされることは、明日ストライキをするかしないかといふことだけであつて、私が漠然とながらも大学の中に期待してゐた「青年の魂と魂がぶつかるやうな会話」はどこにも見当りませんでした。私が郷里の福岡から、態々東京まで出て行つて求めようとしたものはこんなはずではなかつた。もっと素晴らしいものがあるはずだと探し続けましたが、その糸口は仲々得られませんでした。

私が先輩に勧められて合宿教室に初めて参加したのは二年生の時です。阿蘇で行なはれた第十四回の合宿教室で、いろいろな得難い経験をさせて戴きましたが、中でも、世界的な数学者である岡潔先生のご講義は、私にとって一生忘れられないものでした。と言つても、ご講義自体は非常に難しいもので「欧米は間違つてゐる」と題されるご講義の内容は十分理解出来ない

箇所も多々ありました。(この講義録は「日本への回帰」第五集を参照して下さい) ところがご講義後、質疑応答の時間があり、質問に立った一学生と次のやうなやりとりがありました。学生が、「さつき先生が、心理学の対象としての心が第一の心であつて……。」と質問しかかると「いいえ、心理学の対象としてゐる心を第一の心とよぶと言つたんです。」とおっしゃいます。続いて、

「その心は私を入れなければならぬ心だとおっしゃいましたね。」と質問すると

「私を入れなければ動かないと言つたんです。」と正されます。

「では、意志を通さなくても出て来る心とか言はれましたが——

「意識と言つたんです。」——

「意識を通さなくても出て来る心とか——

「心と言ひやしません。意識を通さなくてもわかると言つたんです。何が言ひたいのですか——

その学生が、更に質問を続けようとすると、八十歳に近い先生は、満身の力をこめて、

「悉く君の聞き違ひ。一度ほくの本を読んで下さい。」とおっしゃいました。

このやりとりを聞いてゐた私は、息詰まるやうな緊張感を覚え、語気鋭い先生の指摘に満場が一瞬、ピーンと張りつめたものに包まれるのを感じました。私は講義室の後の方でこのご講

義を聞いてゐたのですが、正直言つて「恐しい」と思ひました。そして暫くして次のやうに考へました。

言葉ひとつひとつを執拗なまでに正されたのは、先生がこの講義にそれだけ自分を賭けてをられるからだ。だから例へ一つの言葉でも誤つて受け取られたならば、自分の気持ちは全く伝はらなくなると、思ひ定めてこの場に臨んでをられるのだ。先生がこのやうな心構へで話しをされるときは、聞く我々にも相應の覚悟がなくては容易にその言葉を受けとめることは出来ない。教へる者と学ぶ者が、それぞれに厳しい姿勢を持ち、心構へを持って初めて、学問の場が開けるのだと考へました。

ご講義が終はつて講義室を出るみんなの顔は生々と輝いて見えました。同時に私も、心が晴れ晴れとして来るのを覚えました。そして、これこそが、私が一年半の間もやもやとした気持ちのまま求め続けて来た学問の場ではないかと思ひ到つた時に、湧然と、心の中からわき上がるやうな喜びに包まれました。学問をするといふことは本当に厳しいものであるが、その中にはこんな大きな喜びがあると知つた時、身体がブルブルと震へるやうな興奮を覚えました。大学の講義では経験することの出来なかつた全く新しいものを目のあたりにしたその時の気持ちは、今でもはつきりと思ひ出すことが出来ます。

かうして、得難い経験をして大学に戻りましたが、合宿教室での気持ちを持続させる事は非常に難しいことでした。ともすれば惰性で毎日を送り、入学当初の素朴な気持ち——ピラがベタベタ貼られた教室、書きなぐられた立看板、こんな汚いところで勉強が出来るものか——といった感覚すら薄れて行き、どうせ大学とはこんな所だ、今更一人で言っても仕方がないと、知らず知らずのうちに物事に対する痛感を失なうて行きました。また一方では、ヘルメットを被つて騒いでゐる連中など相手にせず、自分は自分なりに勉強して行けば良いのだと、学内で様々に展開する出来事に対し、直接自分とは関係のないよそごとだといった受け止め方をするやうになりました。合宿教室後は、学内の輪読会に出てゐましたが、その輪読会の仲間うちだけで気持ちに通じれば満足するやうな気分さへ出て来ました。

この頃、学内の輪読会では「古事記」を読んでゐました。今から引用するのは、その中つ巻神倭伊波礼毘古の命、後の神武天皇のご東征の件りです。天照大神から六代目に当られる命は、兄君の五瀬の命とご一緒に高千穂を發つて東へ東へと上られ、日本の国を統一して行かれます。途中、登美的那賀須泥毘古といふ者と戦をして、兄君は敵の毒矢を受けて遂にお亡くなりになります。命の軍は苦戦を強ひられ、その上お兄様を失なふといふ悲しみの中で全軍をまとめ熊野へ入つて来られます。すると、命の前を大きな熊がすーと横切つて行き、たちまちその妖氣に当てられた命をはじめ全員の体の力が抜け、萎えてしまつて、皆その場に倒れて

しまひます。原文ではこのあと次のやうに書いてあります。「この時に熊野の高倉下、一横刀たちをもちて、天つ神の御子の伏せる地こやに到りて献るときに、天つ神の御子、すなはち寤め起ちて長寝ながいしつるかもと詔りたまひき」

天つ神の御子とは命、即ち神武天皇のことです。熊野の神官が高天原から下された太刀を差し上げると、命はすぐに眼を醒まされて「長寝しつるかも」——長く休んでしまったことだなあとおっしゃったといふのです。この言葉の響きからは、過去を振り返るよりも、むしろ今から進んで行く前方をぐっと見据ゑて発せられた、そんな気持ちが見えられます。「長寝しつるかも」と言ひ終へた時は、既に心は醒めて、太刀の柄にまさに手をかけんとしてゐる、そのやうな気迫をも感じることが出来ます。

この文章を読んで、頭から水を浴びせられたやうな感じがしました。「ああ、俺は眠つてゐた」と思ひました。学内の納得行かない事にも次第に敏感な心を失なつて行き「どうせ大学とはこんな所だ」と思ひ始めたのも心の眠りだと思ひました。また「ヘルメットを被つて騒いでゐる連中とはどうせ話しても解らないのだ」と考へ、学内が日増に荒廃して行く中でその状況に対して毅然とした態度を取ることなく、傍観者的に見てゐたのも、やはり心が眠つてゐたのだと思ひました。こんなことではいけないと打ちのめされるやうな気がしました。と同時にこの「長寝しつるかも」といふ響きの中に、何とも清々しいものを感じました。命は、苦境に立つてく



たくたになる程疲れられ、その上に兄君を失なひ深い悲しみに包まれてゐる。しかし、この逆境を大きく持ちこたへられて「長寝しつるかも」と一言発せられて再び雄々しく進んで行かれるのです。この命のお姿に励まされ、勇気づけられました。それと共に、生れて初めて古典といふものが自分に非常に身近かなものに思へました。千年以上も昔に書かれた書物が自分の心に避へるといふことを経験したのです。これはまた私にとって非常に嬉しいことでした。それからは、進んで古典が読みたくなりました。

○

三年生になる春の合宿で、吉田松陰先生の「講孟余話」を輪読しました。梁惠王下・四章に、次の言葉があります。

「凡そ人と生れ書を読み道を聞かざれば詮方なきことなれども、苟も已に書を読み道を聞くを得ば、此の

学を勤め此の志を励まざるべけんや」

人と生まれて、書物を読み道を聞く機会に恵まれない人はそれは仕方ない。しかしながら、かりそめにも書を読み、人の生きる道を聞くことが出来たならば、その道、学問を深めて行くことに全力を投じないでをられようか、と松陰先生は私達に訴へかけられるのです。

私も、合宿教室で諸先生から生きて行く上での一番大切なことを教はった。そして自分から進んで古典を読まうと頑張つてゐる。苟も書を読み、道を聞くことが出来たからには、それを自分なりに深めて行かなくてはならないと強く思ひました。そして、少しづつではありますが友と一緒に古典を読み続け、その度に、松陰先生や「古事記」の時代の人々、また多くの先人から叱咤され、励まされながら学生生活を送つて参りました。

社会に出て一年半になりますが、会社といふ所は仲々忙しい所です。なにかやりたいと思つても思ふやうな生活が出来ない。仕事が夜遅く終はつて疲れて帰ると、そのまま本も読めずに寝てしまふ日も続きます。しかしながら、合宿教室を経験して、その後も多くの友と共に学んで来た私にとっては、その中で得た大切な生き方が心の中に一つの灯となつて燃え続けてゐることを疑ふことは出来ません。

先程読みました「講孟余話」の続きで、松陰先生は次のやうに言ひ切つてをられます。苟も書を読み道を聞くことを得たならばこの学問を深めないではをられない、この学問を深め、積

み重ねて行つたならば「たとへ縦令、幽囚に死すと雖も、天下後世必ず吾が志を継ぎ成す者あらん」
(自分は獄中で死んでも、後世の人々がきつと自分の志を継いでくれるに違ひない。)

この強い確信の言葉は、同時に私達後に続く者を温く信頼したお気持ちでもあると私には受け取れるのです。先人の心を偲びながら己の生活を正して行き、また同時に、先人の心・先輩の志を仰ぎ、受け継ぎながら生きて行きたいと念願してをります。

太平洋上で定めた私の生き方

福岡県立嘉穂高等学校教諭

小野吉宣（二十六歳）



棟方志功・富樫那

私がこの合宿教室に初めて参加したのは、福岡の西南学院大学の二年生のときでした。私はそのとき非常に多くのことに目を開かれました。それらの詳細については省かせていただきますが、さまざまな問題について私は文字通りに目の覚めるやうな思ひがいたしました。そこで教はったことはその後の私の生き方の根本をなしてきてをります。

合宿教室で出会ひました先生方や先輩方とはその後、福岡の地区での小合宿や、古典の輪読、和歌の創作などを一緒にやらせていただくお陰で、ますます親密なお付き合いをさせていただくやうになりましたが、先生方が書かれた文、或ひは先生方から紹介していただいた本などを私は文字通りなめ尽くすやうに読んでまゐりました。そして先生方や友達と話をするときは一言も聞き漏らすまいといったやうな気持で、いままででない真剣さで、向ふやうになりました。渴いた砂地に潤ひの雨が降るやうに、私の心に古典の文章、先生方のお言葉、友達の言葉がしみ込んでまゐりました。いまはつきりと私に言へますことは、この合宿教室で出会った先生方、友達との付き合ひが深くなればなるほど、私なりに学びの道を深めてゆくことができましたといふことです。

○
このやうにして、勉強してゐたわけですが、昭和四十三年の合宿教室が終つた後に、国民文化研究会主催による東南アジア研修旅行団が編成されました。団長は昨日ご講義なさいました

国民文化研究会副理事長の川井先生、副団長は現在農林省にお勤めの行武さんでした。そして八名の団員に、私も加へていただくことになりました。この旅行には、二つの目的がありました。第一には訪れた国々をつぶさに見てそこに潜んでゐる問題を追求する。次にこの旅行を通じて人としての生き方を練り、真の学問に対する姿勢を鍛へてゆくといふことでした。従つて物見遊山の旅行でなく、綿密なスケジュールのもとに、規則正しい生活を送つてきたわけでありませう。私達の乗り込んだ船は「春光丸」といふ貨客船で、それには船室が十ありましたが、その船室全部を借り受け、いはば、そこを合宿場として一カ月余の長期研修旅行を展開していったわけです。

ここでは私が訪れた国の中で一番私の心に残り、私の生き方に強い影響を与へたフィリピンの事情についてお話したいと思ひます。フィリピンで強く感じましたことは植民地支配を受けてゐたために歴史に断絶があること、それに公用語がないといふ二点でした。フィリピンは現在では、東南アジアでは最も安定した独立国と思はれますが、国家的統一がなされる前に、すでに十六世紀のころから、スペインの支配を受け、引き続きアメリカの占領を受けてきました。その間四百年にわたつて植民地支配による悲しい歴史を刻んできたわけです。ですから独立後の現在と本当の自分たちの国の歴史とをつながうとしても、そこには四百年の断絶があるわけです。仮に四百年前につないだにしても、そこには非常に原始的な部族社会の歴史し

かないのです。実はそのやうなものの上に、危っかしく建つてゐるのがフィリッピンの姿なのです。

次に公用語のことですが、フィリピンは独立後四十幾つあつた土語の中から、比較的中心部に於て用ひられてゐたタガログ語といふのを公用語に定めてをります。しかし現実には英語が公用語としてまかり通つてをります。なぜなら、タガログ語は植民地支配を受けてゐた四百年の間言語としての発達をしてゐなかつた。従つて現代の高度な文明の生み出したもの、或は人間の複雑な心理を表はすには語彙が乏しすぎるのです。ですからフィリピン国民がお互ひに意志を疎通しようとしても、独立後の現代でありながら植民地支配を受けてゐた時代の言語——英語——の力に頼らざるを得ないのです。特に高度な学問研究を行なふ大学に於ては尚更のこととて、殆どすべてが英語でなされてをります。私たちはフィリピン大学を訪れて日本研究会の学生達と会談をしました。そのうちの一人の学生は「日本は第二次大戦後数年にわたつてアメリカの支配を受けましたが、現在は何語で授業がなされてゐますか。」と質問するのです。これは私たちにとっては驚くべき質問ですが、彼らは物理にせよ歴史にせよ全ての学問を英語でやつてゐるわけですから、彼らにとっては当然な質問なのでせう。

私達が日本では大学であらうとどこであらうと学問の研究はすべて日本語でしてをりますと答へますと、彼らは我々をうらやましうな目で見たものでした。彼らは言論活動をするにせ

よ、学問研究をするにせよ、全て英語に頼らざるを得ないのです。このことは私にフィリピンにゐて、遠く想ひを祖国日本に馳せる大きなきっかけとなりました。

日本と云ふ国は今日村松先生も言はれたやうに、一言語一民族にまともてをります。私たちはこのことを、当然のこととしてみすごしがちですが、フィリピンの現状を見てそれがどんなに大切なことであるかといふことが今さらのやうに身に沁みました。そしてどうして同じアジア地域の中で日本だけが早くから独立を保ち続けることが出来たのだらうかといふ疑問が湧いてきました。その疑問に答へてくれたのが船の中で皆で読んでゐた「国史より観たる皇室」といふ徳富蘇峰翁の書かれた本でした。それには「日本は皇室による国家的統一がなされるまでは混合民族の寄り集まりで、それは、ちやうどギリシャのポリスのやうに群雄割拠してゐた。それを武力だけでなく文化的にも統一されたのが皇室である。」といふやうに書かれてをりました。私は、ここを読んで思ったことは、万一、皇室による統一がなかったならば、日本はフィリピンのやうに国家的統一がなされる前に他民族の支配を受けなければならなかつたのではなからうかといふことでした。それを裏付けるかのやうに、フィリピン大使館の熊田といふ方が次のやうな話しをされました。私達が熊田氏に大使館でお会したとき、現在フィリピンは国家建設の為には力をつくしてゐるが、丁度日本の明治維新の頃にあたるのではないでせうかと尋ねますと、熊田氏は「フィリピンは明治維新どころではない。まだ本当には国家的統一がなさ

れてゐない、いふならば奈良以前の状態ではないでせうか。」といはれ更に、「奈良以前のやうな時代に高層ビルを建設してゐるのがフィリピンの現状なのです。いはば原始的な部族社会の上にアメリカの文明を移植してゐるやうなものなのです。」といはれました。熊田氏は奈良以前といふ言葉を使はれましたけれども、さういひますと、フィリピンにはいまだに自国語で書かれた万葉集のやうな国民的な詩集はありません。それに国家を統一した方々の系譜を書くにしても独立後二十年ばかりの歴史しか書けないわけです。それにひき比べ万葉集をみてみますと、日本では千二百年も前からあらゆる階層の者が心の躍動を三十一文字の中に微妙な心のさゆらぎものがさず表現してをります。さきの大東亜戦争で日本は敗北しましたけれども、日本語はあらゆるところで生きてをりますし、文化の中心として天皇が肇国以来存続してゐらっしゃることに変



りがありません。歴史の長い断絶をうめる術もなく、公用語が普及しないで苦しんでゐるフィリピンにあつて、私たちは祖国日本に対する深い感激のおもひと強い確信をいだかしめられたのです。

私達が訪れるところには大東亜戦争の激戦地が並んでをります。まず戦艦大和が沈められた沖繩沖、カナダ軍と戦つたホンコン島それから大海戦が行なはれたレイテ沖、シブヤン海等です。私達はそれらの戦跡を通過する度毎に慰霊追悼を行つてまゐりました。船上で行ふときは甲板に整列し、黙禱をささげます。君が代を斉唱し、川井先生の慰霊追悼の言葉をいただきます。そして一人ずつ海に向つて花を捧げ持ち、海の底に眠つてをられる方々の御霊安かれと祈りつつ花を捧げました。最後に「海ゆかば」を歌ひます。「海ゆかば」を歌つてゐると私達の目の前に、遠く祖国を離れ、海戦で海の底にまだ眠つてをられる方々の顔が浮んで来るやうで涙なしに歌ひ終へることができませんでした。私達が海に捧げた花は船のずっと後方に流されてゆく。それを見てをりますと、海の底に眠つてをられる戦死した方々を残してゆくやうな後髪を引かれるやうな思ひがいたしました。平和な日々を私達は送つてゐますけれども、このやうに祖国の為に命を捧げた方々の死を無駄にしないためにはどのやうに生きてらいいのだからかと、私達は慰霊追悼が終つたあとの古典輪読では本当に祈るやうなおもひで古典を読みました。

船旅も終りに近づき、日本を離れて一月あまりもたつと、今、日本はどのやうになつてゐるのだらうかといふ思ひがしきりに湧いてきます。その思ひは船に送られて来る電送新聞で満たすことができました。その頃は大学紛争が最も激しいときでしたが、ある日東大では学生達が安田講堂にたてこもり遺書まで残して徹底して戦つてゐると云ふ報せがでてゐました。ところがその翌々日、学生達が機動隊に排除されたといふ活字が目に入りました。私は新聞の見出しを見た一瞬彼らは、警官に射殺されたか、或は自殺したのではないだらうかと思ひました。ところが新聞を読みすすんでゆきますと、彼らはいままで敵として戦つてゐた機動隊の前に全員白旗を掲げ出てきてゐたのでした。彼らは「日本は駄目だから、マルクス・レーニン主義による革命を起こさなければならぬ」と言つて、遺書まで残して戦つてゐたはずで、ところが戦力尽きるや自分達のやつたことに少しのつぐなひもせずこのこと出て来る。全く甘えきつた態度ではないでせうか。彼らは「日本は駄目だ」と言つてゐるが、本当に日本の良さを知るために一度でも情熱を注いだことがあつたのでせうか。どうも彼らは的はずれなところで若い情熱を爆発させてゐるやうで、彼らの姿があはれな操り人形のようにみえて仕方ありませんでした。

私は非常に腹立たしい思ひで一人甲板に駆け上つて行きました。最後の訪問地のフィリピンの島々も既に視界から遠く去り、ただ見えるものといへば船の近く静かな波間に躍り出て、胸

ビレを十字に広げ快げに飛んでゐるトビウヲだけでした。私はしばし全てを打忘れてそれを眺めてをりました。その日は鏡のやうに海は風いでゐました。ふと船尾の方をみると、白い航跡が力強く泡立ってゐました。はるかかなたから続いてゐる航跡が船に近づくにつれぐつと力強く盛り上ってゐるのを見てみると、私にはそれが永遠の昔からずっと一筋に続いてきた日本の命そのもののやうに思へてきました。そのとき私は古き御代に強く引き寄せられる感じがしました。日本には文字通り深い深い歴史がある。先人は私達に無限とも言へるほどの文化を残して下さつてゐる。そして豊かな生き方を示して下さつてゐる。海の底に沈み眠つてをられる戦死者の方々や異国の地に眠つてをられる戦死者の方々もこの日本の命を守つて下さつてゐるのだと思ひました。そして私は日本に生れて来て本当に良かったといふ気持が胸の底から止めどなく湧き起つてきました。そのときでした、私の心の中で日本の歴史が一筋につながり息づいてきたのは。

船は日本へ向けて力強く走つてをります。私は紺碧の大海原にたちつづけてやまぬ白い一条の航跡をみながら、一筋に続いてきた日本の命を守る為に一生を捧げ、そこに帰つてゆくのが永久に自分を活かす道だと思ひました。この思ひを私は一路日本へ帰る船の上で深く胸内に刻み込みました。

第十八回「合宿教室」の

あらまし

専修大学 経営学部四年 青砥 誠 一



合宿教室までの一年の歩み

前島合宿

講演会及び合宿勧誘活動

合宿教室のあらまし

講義

班別討論・班別輪読

青年研究発表

和歌創作

野外運動、登山、全体コンパ

慰霊祭

春季合宿地・岡山県前島
左が本土牛窓、中央右上が前島

合宿教室までの一年の歩み

思えば、昨年の合宿教室は折しも日中間題が大詰めを迎えた世情騒然たる中で挙行されたが、その後田中内閣は中共との国交を開始し、長年の友好国である中華民国とは外相の一片の談話をもつて国交を断絶するに至つたのである。又それに続く暮れの衆議院選挙に於ては共産党が著るしく進出するなど、まさしく国運を左右しかねない事件が続げざまにおこつたのであつた。しかし、物質的繁栄と平和にすっかりなれてしまつた大半の国民の眼には、この内政外交両面にわたる激しい動きも所詮は他人事にしか映らなかつたのではないか。ここ数年来、こゝとに顕著にうかがわれる風潮は、国民全般の心の中から「国を考へ、国を思う心」が愈々稀薄になつてきてきているという一点である。大学の学園の中とてその例外ではありえない。ときにゲバ騒ぎはあつても、大半の一般学生にとっては、祖国も人生もはたまた学問のあり方に対する問いかけすらも関心の対象とはなりえないかの如くである。かくして日本は、明確な国家目標も確立しないままに次第次第に混沌の度合いを深めつつある。このままの状態が進行すれば祖国は加速度的に衰弱の途をひたすら辿るのみであろう。

この祖国の憂うべき姿を前にして、我々学生はどのように生き、何をなしたらよいのか。この問題に立ち向うためには、我々は「祖国」「人生」「学問」という一連の命題に心を傾けて

取り組むことからスタートしなければならない。そして、そのための修練の場を、志を同じくする者達が力を合わせて着実にひろげてゆく努力が何よりも必要とされるであらう。

X

X

ここで昭和四十八年の夏、雲仙で行なわれた「合宿教室」のあらましを述べる前に、雲仙合宿まで積み重ねてきた我々の営みの中で、次の二つの項目について記録しておきたい。

一、前島合宿

この合宿は、夏の雲仙合宿へ向けて各地の大学で活動が続けている学生たちが相互の研鑽を深めるため同年春、行なわれたものであった。場所は岡山の南、碧く澄みきった瀬戸内海を四方に眺めることの出来る、まことに風光うるわしい前島モラロジーセンターであった。期間は三月三十日より三泊四日。参加者の内訳は次の通りである。

〔東日本〕早大・亜大各2、上智大・専修大・慶大・国学院大・東京外大各1

〔西日本〕熊大・九大各10、鹿大4、西南大3、福岡大・岡山大・熊商大各2

計 四二名

国民文化研究会 一五名

計 五七名

第十八回「合宿教室」のあらまし（青砥）

前島合宿日程表

	3月30日	3月31日	4月1日	4月2日
6				
7		起床 朝のつどい	起床 朝のつどい	起床 朝の集い
8		朝食	朝食	朝食
9		学生体験発表 (仁多、青砥、 坂本、占部)	講義川井修治 先生 一日共の欺瞞 を衝く一	講義 小田村寅 二郎先生一 日本主義革 命をせしむべからず
10		全体討議 (昨日の問題 と学生発表 について)	全体討論	全体意見発表
11				閉会式
12		昼食	昼食	昼食
1		先輩方の体験 発表 (岸本弘、野 東中修、山 内健生)	講義小柳陽太 郎先生 一古 事記の世界一	
2		質疑応答	班別輪読	
3		班別討論	大合宿へ向 けての検討	
4	開会式		野外運動	
5	全体問題提出	散索		
6	班別自己紹介 夕食	和歌創作 夕食	夕食	
7	入浴	入浴	入浴	
8	問題点・疑問 点に対する全 体討議	班別輪読	和歌全体批評(青砥堂一先生)	
9			和歌班別 批評	
10			コンパ	
11	消燈	消燈	消燈	
12				

合宿で主に問題になったのは、国家の問題であり友情の問題であり、ゆれ動く国際状況、なかんづく中国をめぐる問題、さらに最近とみに勢力をまして国民生活の中核を蝕まんとしつつある共産主義勢力とどのように対決するかであった。中には現代のニヒリズム的な風潮の中からぬけ出して現実に対処する道を求めて訴える友もあった。特に最終日には小田村寅二郎先生（国民文化研究会理事長）が登壇されて次のように述べられた。

「われわれは日本の運命を傾けるような事態が目に見える所にも、目のとどかない所にも続出している今日であることを改めて心にとどめようではないか。ここに集う四十名の同友は、単に今夏の合宿参加者勧誘の為に集ったのではない。明日からの日本を四十名のお互いでしっかりと受けとめる為に集ったのである。諸君の一人一人が未だに自己を狭く限定してしまいうような態度があるのは、今日限りのことにして欲しいと切望する」

この先生の御言葉は、全国各地へ帰って行く我々の胸の中にしっかりと刻み込まれた。合宿の詳しい状況については省略するが、別表を参照して戴きたい。

二、講演会及び合宿勧誘活動

前島合宿から、全国各地へ帰って行った我々は、春休み明けを待ち、早速、新入生を対象とした活動を開始して行った。その詳細は次の表をみていただきたいが、熊本地区の信和会で

第十八回「合宿教室」のあらまし（青砥）

前島合宿以前の各地の合宿

	合宿主催	年月日	場 所	参 加 大 学
東工大 歴生会	東工大 歴生会	3月10～12日	アサヒビール「葉山寮」	東工大
亜細亜大 日文研	亜細亜大 日文研	2月 ^{49年} 20～23日	亜細亜学園 セミナーハウス	亜細亜大学
東京大学 信和会	東京大学 信和会	12月22～24日	国 鉄 軽井沢保養所	東京大学 中央鉄道学園
亜細亜大 日文研	亜細亜大 日文研	12月9～10日	御 岳 山 憩 山 荘	亜細亜大学
東工大 歴生会	東工大 歴生会	12月2～3日	奥多摩 国民宿舎「思源荘」	東工大
早稲田大 同信会	早稲田大 同信会	11月25～27日	アサヒビール「葉山寮」	早稲田大学
福 岡 信和会	福 岡 信和会	11月23～26日	福岡県 「八木山青年の家」	九州大学 西南大学 福岡大学
熊 本 信和会	熊 本 信和会	11月22～25日	熊本市 「少年の家」	熊本大学 鹿児島大学 熊本商科大学
鹿児島大学 社会科学研究会	鹿児島大学 社会科学研究会	10月21～23日	揖宿郡 山川町 「森と湖の里」	鹿児島大学 熊本大学
福岡大学 信和会	福岡大学 信和会	9月2～3日	同 右	福岡大学
西南大学 信和会	西南大学 信和会	8月 ^{S・48} 30～31日	福岡市百道 「ピオネ荘」	西南大学

前島合宿以降の講演会と合宿

早稲田大 同信会	福岡 信和会	合宿・主催	早稲田大 同信会	西南大学 信和会	九州大学 信和会	熊本大学 信和会 熊本商科大	講演会・主催
6月22～24日	5月5～6日	年・月・日	5月8日	6月16日	6月9日	5月12日	年・月・日
早稲田大学 「追分セミナーハウス」	福岡市 百道 「ピオネ荘」	場 所	早稲田大学 12号館	西南大学 三号館 202	九州大学 教養部 103	熊本大学 教養D-13	場 所
早稲田大学	九州大 福岡大 西南大	参 加 大 学	小田村寅二郎先生 (亜細亜大教授)	山田 輝彦先生 (福教大助教授)	山口 宗之先生 (九州大助教授)	小柳陽太郎先生 (修猷館高校 教諭)	講 師
			現代日本の 思想的混迷	近代化と伝統 — 鷗外と漱石を 中心に —	吉田松陰に於ける 生と死	吉田松陰の 学問と教育	演 題

は、五月の中旬、講師に小柳陽太郎先生（福岡県立修猷館高等学校教諭）をお迎えして「吉田松陰の学問と教育」というテーマのもとで学内文化講演会を開いた。これは単に合宿勧誘の為というだけでなく、現在の学園の思想的な乱れをどうにかして正常化したいという限りない我々の願いから行ったものである。夜遅くまでガリを切って印刷し、朝早くから、登校する学生にピラを配る。そんな日が幾日も続いた。我々は一枚一枚のピラに思いをこめて学友に手渡していった。こうした我々の願いを、講師の講演の前に登壇した五名の学生代表（福岡1、鹿児島1、熊本3）は、切々と一人一人の体験をまじえながら発表して参加者に感銘を与えた。熊本でのこのような活動をはじめ全国の友らの努力の結果、雲仙合宿には全国の大学や職場から、四百名を越す参加者を迎えることが出来たのである。

（この項、熊大工学部四年、高岡正人 記）

「合宿教室」のあらまし

日本全体を覆う思想昏迷の只中において、我々は暗中摸索しながらもその打開の方途を求めて、全国の心ある友らと共に日々努力を傾けてきた。その道を更に大きく切り拓かんと決意と覚悟をひめて「第十八回学生青年合宿教室」は開催されたのである。期間は昭和四十八年八月四日から八日までの四泊五日間。場所は九州・長崎県、雲仙の「ファミリーホテル」であつ

た。

八月四日からの「合宿教室」が始まる前に、この合宿にむけて、勧誘活動はもとより今日まで全国各地でその中心となつて日々研鑽を積み重ねてきた約五十名の学生によつて、一泊二日の「事前合宿」が行なわれた。これは、この学生たちが大合宿においても、班長あるいは副班長として班運営の任にあたるため、大合宿を前にして今一度相互の意思と決意を確認するために設けられたものであった。

五十名の学生が数班にわかれての「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」の班別輪読、あるいは全参加者が一堂に会しての全体輪読および討論、さらに先輩による「対策一道」（吉田松陰）の講義、又各地区代表学生による体験発表等が日程にくみこまれた。参加学生の全てが「合宿教室」を前にして、現在各自が抱えている問題をすべて解決する意気込みで臨んだ。時間が経つにつれて各自の気持も次第に高まり大合宿に向う姿勢も確立され、明後日に迫った大合宿に臨んで心一つにしてやってゆけるのだという自信が、はりつめた緊張感の中にも力強くみなぎって来たのであった。

事前合宿最終日の八月三日は、大合宿のための諸準備にとりかかった。国旗掲揚のためのポール作り、朝の集いに使う朝礼会場の整備、班別プラカード、班別一覧表、名札、横断幕、演題幕の作成等々、様々の仕事が各自に分担され、そのすべてが手際良く処理されていた。遠



(合宿教室受付)

方からやってくる友や自分が勧誘した友のことを思い
浮べたりしながら、参加者全員が合宿に臨んでもとま
どうことのない様に、又大合宿の運営が円滑にいく様
にと思えば、作業を続ける手にも思わず力がこもるの
であった。

この様にして八月三日には「合宿教室」のための全
ての準備が整い、あとは全国各地より集い来る友を待
つのみとなった。夕やみの迫った雲仙の山々を見てい
ると昼間の疲れも忘れてしまうほど美しく、身と心が
安らぐ思いであった。

参加者の内訳は次の通りである。

(学生班 六所大学) (洋数字は参加学生)

- | | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|------|-----|
| 東大4 | 京大1 | 東北大1 | 九大25 | 阪大2 | 長崎 |
| 大8 | 岡山大6 | 山口大6 | 熊大39 | 鹿大31 | 名大1 |
| 東工大6 | 東外大2 | 富山大1 | 佐賀大1 | 信州大1 | |
| 福岡教大9 | 横浜国大1 | 東京学芸大1 | 大阪教育大 | | |

1 早大15 慶大4 都立大1 専大6 拓大2 国学院大3 亜大36 駒大1 法大1 中大4 日大4 明治学院大1 日本経済短大3 東京医科歯科大1 玉大1 川崎医大1 東京芝浦工大1 神奈川大1 明星大1 東京経済大1 青山学院大1 武蔵野女大1 池坊短大2 東京電機大1 上智大2 和光大1 東海大1 皇学館大2 岡山理大1 岡山商大3 同志社2 九州歯大2 福岡大6 福岡女子大3 中村学園大1 東和大1 西南学院大11 熊本商大9 熊本短大1 鹿児島経大2 高卒者1 計二九〇名（うち女子四五名）

（社会人・教員班）各種企業会社員 福岡・熊本両県の小中高校教諭 団体職員 教育委員会職員 計六〇名

（招聘講師）二名 （大学教官有志協議会）四名 （国民文化研究会）五八名 （見学参加者）六名 （事務局）一五名

総合計 四三三名

男子学生は七名ないし八名を単位として三十三班に編成され、各班に一名の班長がわりあてられた。班長はほとんどの班が学生であったが、一部は国文研の若い会員が受け持たれた。女子学生は四班、教員・社会人は五班に編成され、国文研の会員が班長としてその任にあたられた。

午後二時から開会式。鹿児島大学理学部四年の仁多永夫君による開会宣言に続いて国歌

齊唱。その後「戦時、平時を問わず、祖国日本のために尊い命を捧げられた、すべての祖先の御霊」に対して、一分間の黙禱が捧げられた。その後主催者を代表して、国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が挨拶に立たれ、全国各地から集ってきた全参加者に対して心からのねぎらいの言葉をかけられ、「この合宿教室の期間中は、学校の差も年令の差も職業の違いも全てをのり越えて同じ一人の人間として心をつくしてすごしてほしい。そしてお互いの心の交流を深め真の友を見つけて下さい」と述べられた。この先生の御言葉を聞きながら、合宿教室は今既に始まっているのだという思いが、全参加者の心にひろがっていった。

続いて学生代表として、熊本大学法学部三年の折田豊夫君が壇上に立ち、この合宿教室に始めて参加した時の経験を振り返りながら「単なる抽象論や観念論はやめ、自分自身はどう感じたのか、自分自身の気持から発する言葉で心を尽して語り合おう」と訴えた。この後、岡山操山高校教諭・三宅将之合宿運営委員長の挨拶ならびに合宿運営にあたる委員の紹介と続き、最後に富山工業高校教諭・岸本弘合宿指揮班長の諸注意をもって、開会式とそれに続く一連の行事は終了した。この開会式の時の気持を九州大学の天本君は次の様に詠んでいる。

真新しき日の丸の旗あざやかに正面かざりぬ皺一つなく

暑き日に友らと共に勧誘に行きたる日々思ひ出さるる

集ひたる参加者の中後方に我が誘ひたる友も見えたり

8月6日(月) (第3日)	8月7日(火) (第4日)	8月8日(水) (第5日)
(起 床) 朝の集い 朝 食	(起 床) 朝の集い 朝 食	(起 床) 朝の集い 朝 食
記念撮影		合宿運営委員所見発表
(講義)「現代の日本と 伝統」 村松 剛 (質疑応答)	(講義)「教育と 学問との乖離を憂ふ」 小田村寅二郎	全体意見発表
		合宿をかえりみて 小田村寅二郎
		感想文執筆・第二回 和歌創作
班別討論	班別討論	班別懇談
昼食		閉会式 (このあと昼食)
(講義)「和歌創作 導入」山田輝彦	昼食	(解 散)
仁田峠登山 妙見岳 (和歌創作)	(講義)「言霊の幸は ふ国の信」 夜久正雄	
	班別輪読	
	地区別・大学別連絡会	
夕 食 入 浴 散 策 (和歌提出)	夕 食 入 浴 散 策	
青年研究発表 青山直幸・山口秀範・ 小野吉宣	和歌全体批評 小柳陽太郎	
詩の朗読	和歌相互批評 (班 別)	
慰霊祭		
班別懇談	(最後の夜の集い)	
(就 床)	(就 床)	

第十八回「合宿教室」のあらまし（青砥）

第十八回「合宿教室」日程表		8月4日(土) (第1日)	8月5日(日) (第2日)
	7:00		(起 床)
	8:00		朝の集い 朝食
	9:00		(講義)「戦後の 第二期が始まった 一脱マスコミ的理解が 望ましい」 木内信胤 (質疑応答)
	10:00		
	11:00		
	12:00		班別討論
	1:00		昼食
	2:00	開会式 趣旨説明・諸注意伝達	(講義)「革命の危機」 川井修治 (質疑応答)
	3:00	班別自己紹介	
	4:00	必携図書について 説明と理解(班別)	班別討論
	5:00		野外運動
	6:00	夕食 入浴 散策	夕食 入浴 散策
	7:00	(講義)「歴史を蘇ら せる力」 小柳陽太郎	(講義)「吉田松陰『対策 一道』・『大義を護す』」 山口宗之
8:00			
9:00	班別討論	班別輪読	
10:00			
		(就 床)	(就 床)

そのあと、全参加者は各班室にはいり、そこで各人の自己紹介と合宿教室にのぞむ気持などについて語り合い、未知の友との班生活のスタートを切ったのである。それに続いてこの合宿に必携書となっていた「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」「日本への回帰・第八集」「短歌のすすめ」の三冊について班長から説明がなされた。この時点に於て早くも重要な問題が提起され、すぐさま討論に入ってゆく班、あるいは必携図書を出して輪読してゆく班など、いよいよ合宿教室も幕が切って落されたのである。

講演

△以下、合宿教室期間中の各講義について概略を記すが、詳しくは本書に講義の記録が掲載されているので、それをお読み頂きたいと思う▽

諸先生方の御講義は第一日目の夜からはじまった。最初に登壇された福岡県立修猷館高校教諭・小柳陽太郎先生は、「歴史を蘇らせる力」と題して冒頭から歴史および歴史観の問題に迫られ、懇切な導入講義を展開された。

最初に先生は最近の風潮にふれられ、「昭和二十年の敗戦以来、戦前と戦後では人々の意識の上に断絶ができた。多くの人々は戦前をすべて悪いものと決めつけ、戦後はすべて善いものとし、戦前の過ちを繰返さねばそれで良しとする風潮がつよくみられる」と現代の軽薄な風潮

を厳しく指摘されたあと、歴史の正しい見方、感じ方はどのようにすれば良いのか、について「過去の日本人がどのような気持で日々を生活していたのか、その生き方を偲ぶ——その偲び方を学ぶのが歴史を学ぶことである」と述べられ、続けて「歴史そのものにつき合うためには、過去の出来事を全て見渡せる立場で論ずるのではなく、その時代に生きた当事者と一緒になってその人々の身になって考える。つまり自分も『見えない目』で歴史を見る事が大切である」と述べられた。過去の歴史の渦中に自らを推参させ、その時代を生き抜いた人々の気持になって過去の歴史を体験することが、本当に歴史を理解することにつながり、その時にはじめて歴史は私たちの眼前に生き生きとして蘇ってくるにちがいない、との御言葉は我々の歴史の取り組み方に対する重要な示唆であった。

さらに先生は、山上憶良の「貧窮問答歌」松尾芭蕉の「野ざらし紀行」等を引用され、直接古人の言葉にふれられながら、「私達は今までの歴史の連続性の中に生きているのであって、今までの歴史を無視した生き方、物の見方をすれば重大な誤ちを犯す事になる。祖先の生き方を偲ぶ事なくして我々が生きてゆこうとするならば、とうていすばらしい喜びを感じる生き方はできないだろう」と強く訴えられた。

第二日目は、招聘講師として最初に木内信胤先生が登壇された。先生はこの合宿教室には実に十四年間の連続御出講である。今年の演題は「戦後の第二期が始まった——脱マスコミ的理解

「がぞましいー」であった。先生は深い洞察にもとづいてダイナミックなお話しを自信にみちてすすめられた。

先生は最初に「ここ数年間の世界の動きをみていると、戦後の第二期が始まった」とみるのが良さそうである」とのべられ、現下の世界諸国の情勢を次々に論じながらこれからの日本の役割について考察してゆかれた。「これからの世界の課題は、これまで世界をリードしてきた近代西洋文明に代る新しい文明を創造することにあると思われるが、この点に関して我が国に対する期待は大きい。即ち、東西両文明を融合して、これからの文明を創造するという日本の任務を自覚して、それを我が国全体の歩みたらしめねばならない。そのためには日本人自身が日本の実力を自覚すること、そしてその実力は日本の個性の然らしめるものであることを認識する必要がある。又この仕事は日



本人が自分の為にするものであつて必ずしも世界の為にするものではないが、それが結果的には世界の為にもなるのである」とこれからの日本の進むべき道とその自覚をうながされたあと、「そこで結局どうなのか」ということにふられ、「各自は自己の救済に専念すれば良い。ただここで、真に自分が救われるには、自分の周りと共に救われなければ本當の救済はあり得ないことに気付くべきである。例えば父母を悲しませる様なことをしては到底自分自身は救われたいのと同じことである」と語られ、日本は他の国々とも協調して進んでゆかねばならぬことを訴えられた。我々は自分の周囲の人々、更には国というものが自分とかけ離れたものではなく、むしろ一体不可分のものであることを痛感させられたのであった。

午後からは、**鹿児島大学教授・川井修治先生**の「**革命の危機**」と題する御講義があつた。昨年来の共産党の異常進出を前にして、「革命の危機」を訴えられる先生の御表情は厳しく、且つ御講義には共産主義勢力の浸透を阻止せんとの強き御意志がみなぎっていた。

先生は、「革命ということを経はずみの言葉で言つたり、何か理想的な良いものと思ひ込んでしまふことなく、その実態を具体的に思い浮べてほしい」と述べられ、実際に革命を起した国々の実例をブリントンの「**革命の解剖**」を引用しながら、革命の本質とは一体何か、革命によつて失われるものが如何に多いかということをやつと述べてゆかれた。そしてそれらは、単に外国で起つたものとして楽観視できるものではなく、革命の危機は現代日本にもひたひたと

迫り来つつあることを訴えられた。続いて先生は、「現在日本国民の八〇パーセントは共產革命に賛成していない、しかしその事実をもって日本に共產革命が決して起こらないとは断言出来ない。革命とはそのための哲学と信念をもち、しかも生命がけでそれに取りくむ少数者の巧妙な煽動によって引き起こされるものであるから、如何に国民の大多数が共產主義に賛成していないからと言っても安心はできない」と述べられ、革命を防ぐ為には如何にすれば良いのかということについて、「私達一人一人が革命の本質を知り、是が非でも革命勢力の浸透を阻止しなければならぬ。その為私達は一人でも多くの友達に、革命の恐ろしさを訴え続けてゆかねばならない」と一人一人の顔をしっかりと見つめながら力強く語られた。

そして最後にもし日本に革命が起きたならば、その為失うものがあまりにも多い、今日まで日本人が守り育てて来た瑞々しい情意の失われた日本はもはや日本ではない、日本を失ったわれわれの人生に、一体何の意味があろう、と話され「このような悲惨な革命を起こさないためには、『革命』と『改革』と峻別し、いかに漸進的であろうとも、我々は犠牲の少ない改革を指向すべきである」と訴えられ話を終えられた。我々は日々の生活に於て共產革命が起るなどとは思えないと安易に考えがちであるが、「革命の危機」はまさにその樂觀論の中にひそんでいることを銘記せねばならないと痛感した。

夜の七時から九州大学助教授・山口宗之先生の御講義、演題は「吉田松陰『対策一道』」

『大義を議す』であった。

先生は温厚な御表情の中にもきびしさをたたえて、吉田松陰の「対策一道」「大義を議す」「講孟余話」「狂夫の言」「時義略論」等を引用されながら文献に即して御講義を進められ、井伊大老を首班とする幕府により日米修好通商条約の違勅調印がなされた安政五年（一八五八）の動向を中心として、ペリー来航に至る経過や、悲惨を極めた安政の大獄の模様など錯雑紛糾した幕末当時の政治社会情勢を顧みられ、その間に処した吉田松陰の生き方を橋本左内など他の志士と比較しながら、明らかにしてゆかれた。「吉田松陰は、一般に尊王攘夷論者であると言われているが、単に固陋なる鎖国攘夷一辺倒の人ではなく、開国についても広い見通しに立っていた。松陰は幕府に対して、勅旨は尊崇すべきことを言い切り、天皇の御意志を奉じない幕府の勝手な違勅調印に対して、至誠をもってこれを諫めようとした。」と述べられた。先生はさらに「対策一道」を引用しながら、「松陰は、紛糾する国内の情勢を打開するには、天皇の御意志を尊重することが、第一であると考え、情勢対応の政策論からではなく、内なる耿々の志、道義的視角から様々な論策をなしている。松陰の立場は、日本独自の道、国がらを守ることから発しており、単に国の領土が保てればそれで良いというような低い次元の立場ではない。」と述べられ、松陰が政策次元の問題としてだけでなく、道義の視角から論を展開していることを強調された。

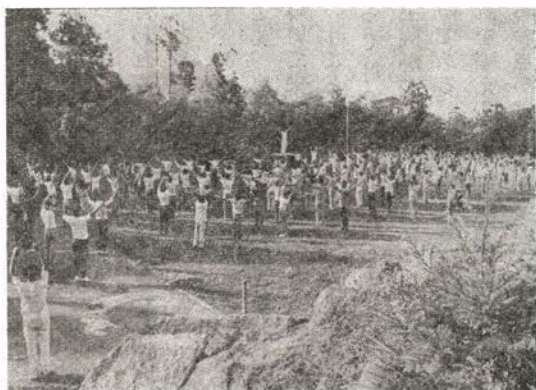
そして最後に松陰が安政の大獄に遭った時に、日頃信念としていた「至誠にして動かざるものは、未だ之れ有らざるなり」という言葉を幕府に対して身をもって試されたことを切々と述べられた。

第三日目は村松剛先生の「現代の日本と伝統」と題する御講義からはじまった。先生はこの合宿教室には二度目の御出講である。壇上の先生のお姿には、四〇〇名の聴講生に心から訴えられる情熱があふれていた。

まず先生は、合宿会場、雲仙に間近い、大村^{（注）}におけるキリスト教渡来当時の話から論を進められた。「西欧諸国はキリスト教の伝道布教の蔭に、日本侵略の意図をもって宣教師を送りこんできたが、日本はかれらを胸内深く呼びいれながらも亡びることはなかった。そればかりか、当時渡航して来た宣教師たちをして『日本人程洗練された礼儀正しい民族はない』と言わしめた程であった。文化の様式が全く違う西洋人が、日本人を見て礼儀正しいと思つた理由は、日本の文化が何千年の長い歴史を経て、既に完成の域に到達していたからである。それにして隔絶されていた異質の文化の中に生きた人々がお互いの良さを認めえたことは驚きに値する」と述べられた。そしてお話を現代に移されて、日本は現在国内的にも国際政治の上でも、かつてないほどの大きな試練に直面していると訴えられ、これに対処するために私達は何をどう考えるべきかについて、明治以来の歴史を通して考察してゆかれた。「明治以来、異質の

西洋文明が急激に日本に入ってきた。そのために多くの日本人は、本来の日本人がもっていた『生活の型』を失ってしまった。文化とは、**型**ではなく、**物**であるという思い違いをするに到った。『生活の型』をなくしては、人間は所詮アニマルと変らないことになってしまう。外国人が日本に目を見張ってきたのは、まさしく日本が独自の文化、つまり『生活の型』をもっていたからにはかならない」と指摘された。この先生のお話を聞きながら、我々は祖先から守り伝えられた日本の文化を今度は私達の手で子孫に伝えてゆかねばならない使命をひしひしと感じさせられたのであった。最後に先生は「真に民族的なるものが真に国際的なるものである」というゲーテの言葉を引用され、

「私達は日本人以外の何ものでもないということを認識して生きてゆくしかない。君達青年は、肉体、精神を修練した上で責任ある行動を取って下さい」と訴え



(朝の体操)

られた。

第四日目は「教育と学問との乖離を憂ふ」と題して小田村寅二郎先生が登壇された。先生はこれまで諸先生方から提出された問題を解きほぐすようにして御講義を進められていったが、それは時代混迷の要因を鋭くついた学問論そのものであった。

「現在、学問とは普遍的真理を探求することだとよく言われるが、真理という言葉の使い方が混乱し、学問ということ自体また混乱している。私達にとって本当の学問とは一体何であるか」と問題を提起され、続けて「学問が語られるときは、いつも科学が第一に位置づけられており、体系的な論述がいつも骨子にされている。けれども、私達にとって学問の値打ちは、自分が生きてゆく意味を深く考えていくことの中に光り輝いて来るべきもの、と考えれば、科学だけが学問、などということは、学問のはきちがいということにならないか」と強く述べられ、「科学は客観性を重視するが、科学に携わる人によって対象が選択されてゆくのであって、科学といえども主観ぬきではなりたない。従って主観がつね日頃からきびしく練磨されなければ、本当の意味での科学の発達は望むべくもないのである。科学のためには主観は徹底して排除されねばならないという考え方そのものが、それを唱える人の主観であることには誰も気付かないではないか」と喝破された。そして「これらの点がはっきり整理されていない為に、学問のみならず教育の場でも、科学、科学と叫びつづけられ、肝心の『人の心の練磨』は

学問の外にはみ出されてしまっている」と述べられた。

続けて、「日本人は自分の心を修練する為に、常日頃から和歌を創作することを知っていた。和歌の中に自分の気持ちをも素直に表わすこと、それは日本人としての生き方をたしかめ、心をととのえるためのかせない修練であった。たしかに自分の気持ちを素直に表わすことは容易ではない。しかしそのための努力は一刻も怠るべきではない」と和歌を詠むことの意味に言及され、明治天皇の御歌を引用しながら和歌が人の気持ちをととのえ、その心を修練するためにどれほど大切なものであるかについてのべられた。

最後に「この合宿教室を機縁として、どうか皆さんともどもに、本当の学問とは何かをもう一度考えていこうではありませんか。一人一人が、心を定めて本当の主体性を、また、本当の日本人としての心の働きを取戻して、学問と教育とを、それぞれあるべき姿に立ち直らせてほしい」と訴えられた。

第四日目の午後、最終講義として登壇されたのは**亜細亜大学教授・夜久正雄先生**である。先生の御講義は「**言霊の幸はふ国の信**」と題するものであった。

先生は山上憶良の「**好去好来の歌**」の一節「**皇神のいつくしき国、言霊の幸はふ国**」にふれられながら、「**言霊の幸はふ国**とは、**和歌の盛んな国**、まごころの通じ合う国と言っても良いでしょう。皇神の厳しき国とは、**国柄が定まっています、天皇のお治めになる国のこと**です。な

ぜ天皇が御統治なさるのかと言えば言霊の幸はふ国だからです」と述べられ、元来日本人が天皇をはじめとして、言葉をどれだけ大切に出来た国民であるかを述べられた。先生はさらに「天皇の御心は、歴代天皇方がお遣しになられた御歌を拝誦してその御心をお偲びすることによって一層具体的にわかってきます。又過去から現在に至るまでの、数多くの日本人が遣して来た和歌をみてもそのことが良くわかります。和歌というものは歴代の天皇方と共に多くの日本人が、心を鍛える為の学問の基礎として、創り続けて来たものであり、天皇のお心と国民の心との通い路でもあったのです。」と懇切に述べてゆかれた。

最後に先生は、聖徳太子の「十七条憲法」の第一条に触れられ、次のように語られた、『和』とは、私心を捨て去ることではなくしてお互いに私心あるものなればこそ、衆と共にまごころを尽して相議することによって、わずかに個々の私心を超えたもの、すなわち事理が表現されてゆくのです。それがここでいわれている『和』ではないかと思う」とのべられた。先生は、先頃亡くなられた、桑原暁一先生の太子御研究に関する文献の一部分に触れられながら、時折声を詰まらせながら御講義を進めてゆかれたが、そのお姿は我々の胸に深くひびくものがあった。またこの先生のお話から、日頃ともすればうすべりに「和」を語りがちな我々にとって、太子が念じられた人の和が、太子御自身の身をきざむような御体験から発せられた御言葉であることが偲ばれて胸をしめつけられるような思いであった。

班別討論・班別輪読

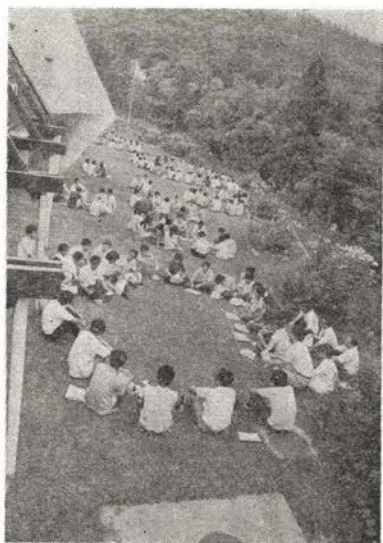
班別討論は、主に講師の先生方の御講義の終わった後に一時間から一時間半の時間をとって行なわれた。御講義で先生が最も訴えられようとしたことは何か、先生のどの言葉に一番感銘を受けたか、に論点をしぼって討論が進められる。最初のうちは、抽象的な議論に終始することもあったし、観念的な言葉も多かった。しかし、友の言葉を自分の言葉としてくみとる努力をしながら、二回、三回と回を重ねるうちに討論は次第に活発になり深みをおびていった。反発もあり共鳴もあった。口数は少ないけれども、自分の切実な思いをうちつけに話してくれた友の言葉は我々の胸に強くひびいた。日頃、ものを考えるということは概念を操作することだという考えにすっかりなれてしまっていた我々にとって最初はこの班別討論は苦痛だった。しかし日数を重ねるうちに、感じたままのことを自分の言葉で語るといふ体験をつみ重ねること、それが学問に取り組む基本であることを痛感させられることとなった。

この班別討論の時の気持ちをある友は次の様に詠んだ。

熊本大 高倉 学

友どちの心をこめし言の葉に我が胸のうち熱くなりゆく

亞細亞大 篠原 弘 司



(学 校 別 懇 談)

真心をこめて話せる友どちの目の輝きの我が身にせまる

班別輪読は、班員全員が同じテキストに向かいその言葉のひとつひとつを正確に読みとっていきながら著者の心に迫っていくという貴重な体験を味わせてくれる時間であった。テキストとして用いられたのは必携書となっていた黒上正一郎著「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」であった。我々の生き方に照らしつつ、班員全員が心をひとつにして著者の心を偲びなが

ら一字一句もおろそかにせず解釈しようと努めた。それは容易なことではなかった。ともすれば表面上の字句の解釈のみにとらわれ、うわすべりな読み方に陥った時もあった。しかし班員一同懸命になつて黒上先生の御言葉に取り組んでいくうちに難解ではあるが、その言葉のもつ重みと意味の深さに次第に気付かせられてきた。そして聖徳太子が、常に国民の救済を念じられ、そのために日々身をけずるような思いで求道された事実思い

いたった時には、太子の深い御心が偲ばれて班員一同激しく心をゆさぶられたのであった。このようにしてこの班別輪読の時間は、われわれの生き方に対して深い示唆を与える貴重な体験となったのである。

青年研究発表

この合宿教室では昨年から「青年研究発表」が日程にくみいれられた。国民文化研究会の若い会員の方々の体験に根ざした研究発表であるが、今年は三人の先輩によって三日目の夜に行なわれた。

最初の発表者は戸田建設働務の青山直幸さんであった。青山さんは、東大在学中におこった大学紛争を思い返されながら、その真只中に身をおいて正常化のために力をつくされるなかでぶつかった当時の苦しい経験を語られ、その紛争の最中にこの合宿教室に参加したときの体験について、「そのときの御講義の中で、小柳先生が君たちは孤立化を恐れて『千万人と雖も我往かん』という気概がないではないか、と叱咤されたとき、私は目の覚めるような思いがし、その瞬間に自分の生き方が決まったような気がした」と述べられ、その体験は今日の社会人生活の中でも力強く生きていることを語られた。

続いて大成建設働務の山口秀範さんが登壇された。山口さんは学生時代のこの合宿教室で

味わった一生忘れることのできない体験を語られた。それは、その折の合宿教室における岡潔先生と一学生との質疑応答時の経験であった。「学生が岡先生のお話しを良く聞きもしないであいまいな言葉で質問を続けようとしたとき、先生はその言葉の一言一句をこの上もない厳しさで正してゆかれた。その言葉のやりとりを聞いて、自分は先生がこの御講義に命をかけておられるのだと思い、これこそが真の学問の場ではないかと痛感し、その厳しい御指摘に体が震える思いがした」と述べられた。

最後の登壇者は、福岡県立嘉穂高校教諭の小野吉宣さんであった。小野さんは学生時代、一ヶ月間の東南アジア研修旅行に出かけられた時の体験を思い出しながら語られ、「大東亜戦争において国の為に尊い生命を捧げられた方々の慰霊追悼式を船上で行なった時には、何とも言えない思いで胸がしめつけられ、この方々の尊い犠牲をふまえて、自分はどのように生きてらいいのか、という感慨が強く心をゆさぶった」と述べられ、また「帰国の船上で、糸をひくような一筋の白い波頭をみた時には、そこに日本のいのちを感じ自分もこのひとすじに続く日本のいのちを守るために力を尽してゆきたい。そこに自分の生きる道があると思った」とその時の光景を思い出すような表情で力強く語られた。

和歌創作

この合宿教室では、全員が必ず和歌を創作することになっているが、ほとんどの参加者にとって和歌創作ははじめての経験でありいつも不安がつきまとう。この参加者の気持ちをときほぐし、その不安を吹きとばしてくれるような懇切な導入講義が、今年は福岡教育大学助教・山田輝彦先生によってなされた。

先生は和歌の特質について「和歌はお互いの意志の交流をはかるためのものであって、五七五七七の定型の中に作者が今感じていることをそのまま表現するものである。和歌は日本人の感情を表現するのに最も適した表現形式であって、古来から日本人は和歌を創ることを一つの喜びとして来た」と述べられ、続けて「和歌は漢詩に対する大和の歌の意であるが、同時に、和歌の『和』は調和の和であり、和歌は相聞歌にみられるように、人の心と自分の心とのむすびつきを表現するものである」と述べられた。更に正岡子規の歌論の根本の立場は「写生」であったとして「対象をありのままに見て、その見たまま感じたままを歌に詠みこむ、というのがこの言葉の意味である」と述べられ、和歌はありのままの感情を詠むのであって決して理屈や因果律を詠もうとしてはいけない、と和歌を創作するときの姿勢について説明された。最後に最近の新聞歌壇からいくつかの和歌をとりあげられ、現代の人は自分の感情をありのままに

直接のべることをマンネリズムととる傾向がある。さらに現代の短歌は単なる個々人の表現に終って人の心と心を結ぶものという和歌のもつ本質的な意味を見失なっている、と厳しく現代の時代風潮を指摘された。

山田先生の御講義の後、直ちに和歌創作をかねた仁田峠、妙見岳への登山に移った。連日、諸先生方の御講義や班別討論と、息詰まるようなスケジュールを終えてきた我々にとっては、まさに楽しいひとときであった。ファミリーホテルより七台のバスに分乗、雲仙の美しい山脈をみながらバスに揺られるのは何とも気持ちがいいものである。移りゆく美しい景色に思わず歓声があがることもしばしばであった。やがて妙見岳の麓に到着、バスから降りると美しい島原の島々が遠く望まれ、目の前にそびえる妙見岳の頂上には薄く霧がかかり、その雄姿は神秘的でさえあった。雲仙の美しいこの自然を眺めていると本当に身も心も安らぐ思いであった。ここで我々は和歌創作にとりくんだ。一人で物思いに耽っている者、じっと一点を見据えたまま指を折りつつ懸命に創作に取りくんでいる者、またお互いに相談し合っているも者いてその創作風景は様々であった。こうしてできた苦心の和歌は、助言者グループ及び事務局の方々の夜を徹しての作業によって、一組三十数枚にわたる歌稿に印刷された。

配布された歌稿をもとに四日目の夜、小柳先生によって「和歌全体批評」が行なわれた。先生が作者の気持にそいながらその言葉や表現の不正確さをひとつひとつ正されていくとおのず

と作者の感動や思いが鮮やかに浮かびあがってくる。また御批評の対象となった作品の中には楽しい「傑作」もあり、そのような歌にふれられた時には、場内はどっと爆笑の渦につつまれた。このように連日の御講義とは違った和らいだ雰囲気の中で先生の批評は続けられたが、一字一句もおろそかにされない厳しい御指摘にふれて、全参加者は自己の思いを正確に表現することの困難さを身にしみて痛感したのであった。その後班に帰り、班別の相互批評が行なわれた。表現の不正確さや言葉の大切さをお互いに指摘し合っている内に、班員それぞれ作品が作者の気持を正確に表現したものに変わってゆく時、友の言葉がありがたく思われてきて、共に心を一つにしてお互いに語り合っているのだという思いがしみじみと感じられるのであった。



野外運動、登山、全体コンパ

この四泊五日間の合宿教室にくみこまれた日程は、そのいづれもが、きわめて密度が高いものであり、それらが、次々に展開されていく毎日は、全参加者にとって大変な緊張感をもなった精神生活の連続であった。この合宿教室では、このような精神の緊張をときほぐすための配慮も十分なされている。

第二日目には、夕食前のひとときを全員屋外に出て「野外運動（相撲）」に汗を流した。投げ技や、引き技は、いっさい禁止、ただ押すだけの押し相撲である。全身を元気良く動かしたこの時間は、昨日来の疲れた頭を休め、このあとの夕食の味を格別なものとした。

第三日目の午後からの三時間は、昼食を携えての「妙見岳登山」である。その模様は「和歌創作」のところで既にのべた通りであるが、合宿教室のちようど半ばにあたるこの時間は、参加者の心身の疲れもピークに達するところで、雄大な自然を眺めながらの数時間はこの疲れをいやすために絶好の機会であった。

第四日目の夜は「最後の夜の集い」がもたれた。全員が講義室に集合して行なわれた、全体コンパである。合宿も余すところ明日のみとなった。全員に配られたのは、わずか一缶のビールと西瓜と少々のお菓子だけであったが、疲れた身体には、わずかばかりのアルコールであっ

ても快よい酔いが全身にしみ通る。大学対抗の校歌、応援歌の応酬や、思わぬかくし芸もとび出し、時間がたつのも忘れてうち興じた楽しい一ときであった。

慰 霊 祭

合宿三日目、富山工業高校教諭の岸本弘さんの司会のもとに慰霊祭が行なわれた。

ここに祭られる御霊は「戦時、平時を問わず、日本の国を守る事に尊い生命を捧げられた、全ての祖先の御霊」である。真暗な夜の闇の中に篝火が赤々と燃え、その篝火で祭壇がくつきりと照し出されている。その祭壇の前に参加者全員が整列、お祓いに代えて、故三井甲之先生の和歌「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」が三宅将之先生によって二度朗詠された。

引き続き全員黙禱のうちに降神の儀。

祖先の御霊が降りて来られた祭壇に神饌を捧げ、明治天皇の御製を、夜久正雄先生が拝誦された。一首一首心を込めて拝誦される高らかな声が、全員の心にしみ通っていった。

続いて小田村寅二郎先生が祭文を奏上され、皆で「海ゆかば」を斉唱した。その後、祭壇に向って二拝二拍手一拝の祈りを捧げた後全員黙禱による昇神の儀が行われ慰霊祭は厳粛な雰囲気の中でとどこおりなく終わった。

慰霊祭は合宿教室に参加したほとんどの人にとって、始めての体験であった。祖先の御霊をお慰めした私達の心にひろがった思いは、今日我々がこうして生きていられるのも、祖先の方々の御力があつたればこそであるという感謝の念であった。祖先の御霊をお慰めしたという安らぎと共に魂が清められるような思いの一時だった。

次に慰霊祭に於て拝誦された、明治天皇御製及び、奏上の祭文を記してをく。

△明治天皇御製▽

をりにふれて

はからずも夜をふかしけりくのため命をすてし
人をかぞへて

よとともに語りつたへよ国のため命をすてし人の
いさをを



月 似 古

いにしへの人のことばもうたひけりそのよに似た
る月にむかひて

親

国のためたふれし人を惜むにも思ふはおやのこ
ろなりけり

子

かなし子にかたりきかせよ国のため命すてにし親
のいさをを

鏡

国のためいのちをすてしものふの魂や鏡にいま
うつるらむ

歌

現身うつつまの人のまことを萬代にのこすや歌のしらべな
るらむ

筆



国のためふるひし筆の命毛のあとこそこのこれ萬代までに

惜 春

あかずしてくれゆく春はあひおもふ友にわかるるここちこそすれ

△慰靈祭のりと▽

いま、われら四百三十名は、しきしまのやまとの国の南みなみのはたて、長崎県、雲仙の山の上の丘かみべを、今宵こよひの祀まつりのにはと定めまつりて、謹つしみ畏かしこみ、魂たまよば喚たまひまつれる、み祖おやはら同胞ちからたちのみたまのみに、第十八回学生、青年合宿教室参加者一同に代り、小田村寅二郎 謹ひやまみ畏おやまみ敬ひやまひ申まをさく

われらここに集へる者ら、今宵この時を選び、ささやかなれども、海の幸さいち、山の幸さいち、くさぐさの品をそなへまつり、遠とほきいにしへより今にいたる幾いくちとせ千歳とせのあひだ、み国の生命いのち永久とこならむことを祈りたまひつつ、尊いとき生命いのちをこのみに捧たもげたまひし、数限りなきみ祖たちのみたまのみに、また、明治の御代よりこのかた、いくたの外国とくにとのやむなき祖国防衛の戦いくひに征いでまし、護国の神と神あがりましし亡はらき同胞ちから、亡はらき友らのみたまのみにここに集ふわれら一同、一つ心に睦なごび合あひてみ霊たま和なごめのみ祭り仕つかへまつらんとす。

ここに謹みて告げまつらくは、この美はしき大和島根に、たまきはる生命のかぎり生き貫きたまひ、また、われらが国の美はしき大和ことばに、その深き想ひとみいのちの、いのちの律動とを托したまひし汝命たちのみ心を偲び、われらもまた汝命たちに続き、言霊の幸はひのまにま、あるひは、学び舎に学びの道の正道を、あるひは、教へにはに教への道の正道を、あるひは、おのおのもつとめのにはに、つとめびとらのまごころ往きかふつとめのにはを、生きよみがへらしめんと、拙なかれどもつとめつくさむと誓ふ由をきこしめしたまへ。

天がけります汝命たちのみ霊よ、み民われらもろともに、まめやかに、わが大君すめらみことの大御心をしのびまつり、大和島根の正しく榮かゆかむさだめを信じ、国たみのかたみに睦び合ふ日の、一日も早く来まさんことを祈りまつり、こひのみまつるを、天がけります汝命たちのみ霊よ、うつしくみそなはせたまひ、守らせたまへと謹み敬ひ畏み申す。

合宿教室も愈々最終日を迎えた。班員との心からのふれあいを実感することができた友。講師の先生のお話しに深い感銘をうけた友。なかには未だ心が解き放たれないで悩んでいる友もいる。様々な感情が各自の心の中で交錯していることであろう。しかし残りの時間はわずかであってもそこに精神を集中し、この合宿教室から去っていかうとするはりつめた空気が感じら

れた。

合宿最終日は、この合宿教室の運営に当たられた若い助言者二人、北島照明さんと今林賢郁さんの所見発表のあと「全体意見発表」に移った。この四泊五日間の間に実に様々な問題が提起され、私達はそれらに懸命に取り組み、貴重な体験を味わった。全体意見発表はその時の思いを全参加者の前で語るためにもたれた時間である。とまどいと緊張感からであろうか、最初は、所感をのべる友の数も少なかったが、時間の経過と共に多くの友が、その思いを述べようとして、続々登壇していった。胸にあふれる思いをそのままの素直な気持ちで、全参加者に訴えかける言葉は訥々としてはいるが言葉の一つ一つに思いが込められていて、聞いているものの胸につき刺さる様にひびいていった。

ある友は「この合宿教室に参加できたことを大変、幸福に思っています。自分の班ではここで得た機縁を大切にするために、今後も短歌をつくって、通信しあうことにした」と述べ、また、ある学生は「ここで体験したことを自分の学生生活に生かしてゆきたい」と述べ、またある学生は「この合宿教室での疑問を解決すべく学んでゆきたい」と述べ、また、ある学生は「班別討論によって、自分の殻を打ち破ることができ、広々とした世界を知ることができ、大変うれしかった」と語った。どの友の言葉にもうそはなかった。緊張に耐えて過してきた、この数日間の体験を素直な心そのままに語ったのである。その言葉のひとつひとつが聞いている

人々の心を動かさずにはいなかった。この時の気持を友は次のような歌に詠んでいる。

京都大学 国友幸郎

壇上に立ちて訴ふる友の声に我は思はず胸つまり来ぬ

九州大学 福山宏一

壇上で胸にこみ上ぐる言の葉をとつとつとして君は語りき

西南学院大学 江藤美智子

壇上のとぎれがちなる友の声我もおなじとうなづきこたふ

そのあと「合宿をかえりみて」と題して、小田村先生が壇上に立たれ「ある人は、この合宿教室というものに、素直に、感銘されたでしょうし、ある人は反撥を感じられたかもしれない。その思いは様々でしょう。しかし、皆さんが、ここで学ばれたことは、講師の先生や、先輩から教わったのではなく、自分自身で体得し、身に付けられたものです。この四泊五日間をふり返って素直な気持ちになれた気がする、と言われた人がありましたが、それがどういう事かと考えると、日本人として自分が生まれている、その事実で改めて喜びを感じたのではないのでしょうか。そういう事を感じる事が生きていく事の喜びではないでしょうか」とのべられた。

続いて「合宿の始まった四日前を思い出そうとすると、何か遠い昔の事のように思われるので

はないでしようか。わずか数日前のことがなぜそんなに遠い過去のことのような気がするのか。それは、全員が日頃の生活の何倍もの緊張した生活をここで送ったためであり、その間にくたの感動を心に経験したりして、凝縮した日々が積み重ねられたからであると思います。人間が人間の力を無限に持っていることを自覚し得たことはお互いに喜んでいいと思いますし、同時にこうした経験ができたということもまた、自分独りの力で、できたのではなく、ここに集った四百数十名の一人一人のおかげであったことも忘れないで下さい」と述べられたあと、ここで得られた貴重な経験を、しっかりと胸にいだいて一人の人間として毅然と立ち上っていただきたいと、話を結ばれた。その後感想文執筆と第二回目の和歌創作。あわただしい時間ではあったが、全員その思いを一生懸命書きしるしていた。

そして愈々閉会式となった。高らかに国歌斉唱をした後、川井先生が閉会の挨拶に立たれた。「この合宿教室で学んだことを、この山を降りてから生かしていただきたい。これからはじまる日常生活における思想の戦いに、この合宿での体験を生かすことによって、はじめてこの体験は真に各自の身についたものとなることでしよう。早速自分達のまわりの人々に、思いを訴えていくことから行動をはじめようではないか」と力強く挨拶された。

続いて、学生代表として挨拶に立った、九州大学三年の川井泰彦君は「この合宿教室を通じて、自分の思いを友に判ってもらおうということは、いかに難しいかと痛感した。しかし、友と

心一つにすることができたときのよろこびもまた味わった。この合宿は本日で終るが、ここで得た感動を大学の友らに伝えるべく、早速行動を開始しようではないか」と力強く訴え、全員の拍手が、これに呼応したのである。

最後に早稲田大学政経学部三年の副島辰英君の閉会宣言によって、全参加者の心身の全てを傾倒して、続けられた合宿教室もここにその全日程を終了した。苦しく辛いこともあったが、共にこの四泊五日間をともに生きてきたよろこびが全参加者の表情にはみなぎっていた。青春の日に味わったこの体験はいつまでも我々の心の中に生きつづけることであろう。

合
宿
歌
集



有明海を渡り合宿地雲仙に行く

西南学院大 占部賢志

わだつみの浪路おしわけ吾が乗れる船はすすみゆくかの島さして

国学院大 石井孝一

つぎつぎと玄関口の受付に日焼けしたる友ら集ひ来

集ひこし友らをへやに案内する仕事にこころ張りてたのしも

開会式にて

東京大 福岡寛

み友らの君が代のことゑにあはせゆけば我もおのづと声高まりぬ

川井先生の御講義を聞きて

熊本大 柳田一郎

真実を伝へむとする師の君の御言葉聞かむと身をのりだしぬ

山口大 小林隆

朝霧のたちこむる広場で御製よむ友の声には力こもれり

中央大 佐野和利

新しき友を知り得ていまさらに語り合ふ身のありがたきかな

山口先生の御講義をおききして

福岡教育大 大槻身信

松陰の思ひをかたる先生の言葉しだいに高まりてゆく

村松先生の御講義を聞きて

専修大 青砥誠一

忙しきあひ間をぬって来られてふ師の御心のありがたきかな

亜細亜大 石塚 貴志

つたなくて言葉につまりし我なれど友の言葉にはげまされゆく

村松剛氏の講義を聞きて 東京外語大 名越 健郎

氏の著書を読みし時より一目なりと会ひたき望みここにかなひぬ

青山先輩の体験発表 東京大 藤野 真二

壇上に立たれし先輩を見上ぐれば御顔は直に正面向けをり

紛争の中で友らと輪読を続けたりきと先輩はのたまふ

我も亦先輩の御心受けつぎて励みてゆかん学びの道に

九州大 鈴木 潤一郎

先輩の我を思はるることのはにとざされし心開けゆくなり

父君の病のためやむなく途中より帰りし友をしのびて 九州大 十時 一郎

合宿に心残してやむをえず友は帰りぬ父君のもとに

今はただ友の父君つつがなく治り給へと祈るのみなり

熊本商科大 稲田 数保

師の君の世を憂ひたまふ言の葉に思はず胸の高鳴り覚ゆ

幼さの残れる友の顔は語りゆくうちに紅くなりけり

早稲田大 太田伝男

南ベトナムのド・イック・トリ君の発表を聞きて

熊本商科大 井上弘二

たどたどしき言葉なれども友おもふ心のままをのべたまひけり

東京工業大 布瀬雅義

夜おそくわが班の部屋に帰りくれば友らは静かにやすみをりたり
友らみなねむりたりしと思ひしが御苦労様と我をむかふる

音絶えし部屋の内にて静かなる友らの寝息を聞きつつねむれり

合宿中一人の友に祖母の急病の報せあり
鹿児島大 川井治子

祖母君が倒れたりと言ふ友の眼は赤く涙にぬれてゐるなり

あふれくる涙こらへてゐる友をなぐさめはげます言葉知らずも

福岡大 山田典子

おととひは顔も知らない人たちが今では古い友だちのごと

河村幹雄先生の「母なき世」を輪読して
熊本大 有馬涼子

友だちの母への思ひを語る目はまぶしきほどに輝きてをり

我もまた母となる身と文よみてあらためて胸に思ひ知るなり

友どちの連なり登る山路を汗をぬぐひつゝ我もつづきぬ
西南学院大 西山八郎

にじみでる汗をふきつつ見渡せば雲の切れ間に山々の見ゆ
九州大 宝辺矢太郎

登り道立ち止る毎に吹きて来る冷たき風の心地よきかな
熊本大 南田武法

吹きあがる霧のきれまより光照りて山中の樹々生き生きと見ゆ
九州大 末次直人

山上で写真とらむとをちこちに肩組み集ふ友ら多しも
熊本大 白浜裕

夏草のしげれる道を踏みしめて歌口ずさみ登り来る友
熊本大 森田隆士

頂の近く見えくれば疲れ忘れ足はやむなり友と競ひて
東北大 宮脇雄三

みどり又みどりの山々ながめるときびしい夏の暑さ忘れる
東和大 ド・イック・トリ

西南学院大 古 浦 章 子

見はるかす山のかなたの霧の底に有明の海かすかに見ゆる

福岡女子大 高井良 泉 美

馬の背にをさなごひとりのせられてたづなをかたくにぎりしめてをり

岡山林原生物化学研究所 秋 山 篤 昌

バスの窓より霧間に浮ぶ峰々の雄々しき姿を仰ぎつつゆく

登山の折山上に小さき祠あり 富山福光町中央農協 高 倉 寛

手入する人はあらか屋根の上にはえたる草のかなしかりけり

久留米金丸小学校教諭 石 垣 ミツノ

開け行く谷のはざまに色映ゆる名もなき花にしぼし見とれぬ

慰霊祭にて 亜細亜大 田 村 泰 宏

先達の尊きみ霊慰めんと祭りの庭にわれら集ひぬ

「コンパ」にて 熊本大 田 中 桂之助

肩組めば友の力の頼もしく我も踊りき汗出づるほど

鹿児島大 中 村 勝 徳

南ベトナムより留学中のド・イック・トリ君、祖国の民謡を歌ふ

ベトナムを心より愛する君のうた我が胸内に強くせまりぬ

祖国よりひとりきたりし君なれど堂々として雄々しくも見ゆ

池坊短大 草地千恵

ヴェトナムを歌ひし君よ君の国のなごみゆく日をいのりてやまず

虫の音

九州大 矢山利彦

み友らと虫の音によせ歌詠めば明日の別れがひしと思はる

窓の辺に我が身をよせて聴き入れればひとときは高くチチと鳴きけり

閉会式を前にして

熊本大 宮崎重人

友達は語りあかししこの日々をじつとみつめてゐるかのごとし

熊本大 折田豊生

良き友につながりを得てもろともに学びし日々を忘るべしやは

友らと別るる朝

九州大 桑野博行

四日前心はずませ友どちと会ひたる事は昨日の如し

合宿終りて

熊本大 高岡正人

うつむきとぎれとぎれに語りたる友の姿の思ひ出さるる

友どちと相撲とりたる広場には西陽さし来てとんぼ飛び交ふ

バスで別れるをりに

早稲田大 副島辰英

郷里より文を送ると友どちは笑顔で我に語りくれたり

車窓より差し出されたる友の手を無量の思ひに握りしめたり

九州大萩原昌憲

友どちと共に寝起きせしこの部屋は我が家の如く思はれにけり

○

亜細亜大学教授 夜久正雄

いだだきのめぐりは雲の立ちこめて島山の大きながめは見えす

いだだきの風にふかれてすすみつつ友らと語らふたのしきひととき

こみどりの野岳なつかし雲仙の御製の歌碑の立つとおもへば

雲こむるいだだきのしたのぼりゆくは友のすがたか見えがくれつつ

いだだきの岩群こめて霧雲のいましも晴れて夕日さすなり

くんだりゆくバスの窓よりうす光る千々石湾見えつ谷のあなたに

下関・懶宝辺商店代表 宝辺正久

朝あけの海のかなたにはろばろと雲仙裾野うちつづく見ゆ

諫早につけばたちまち雨となり滝と降りけりおぼつかなくも

道のうへ川と流るる大雨が今しはれつつゆくバス涼し
みいくさの興亡負ひてつくしたる橘大人のみ名忘れめや
海遠く立つ雲見つつ山路ゆけば友待つ宿のはや近づきぬ

妙見岳にて亡き兄を憶ふ

東京・憫安信不動産常務

松吉基順

亡き兄の友らと共に妙見に登りて行けばうぐひすの鳴く
生きてまさば友らと共に妙見に登りてあらむをひたにこほしも
植物の採集好みし兄なれば高山の草木めで給はむを
亡き兄のみ魂ねむれるふるさは山のかなたか霞みて見えぬ
雲仙の集ひ終らばふるさにてこほしき兄の靈祭りせむ

三池港より島原に渡る

島根・玉造温泉、こんや旅館主

青砥宏一

いま船は三池の港たち出でて海原をゆく島原さして
海原のかなたに見え来雲仙の頂きこめて雲たち渡る
甲板にはやて吹き来て布張りの屋根はたはたとなりやまずけり
夕あかり空にのこりて鋸刃のこばなす雲仙嶽を雲動く見ゆ
船はいま陸に近づき仰ぎみる雲仙嶽は神さびて見ゆ

岡山県立操山高校教諭

三宅将之

便りして来よと告ぐればいざゆかむと応へて来ませりわがみ友らは
み友らと学びの集ひを聞くべき時は来りぬ雲仙の地に
諫早ゆ乗り来し車はいくたびかまがりて千々石の海の見えくる

○

宿に着きしばし憩へば次々と準備のために友ら来れり
教へ子もいくたりか来るてふこのつどひ心つくしてつとめざらめや
一日の準備の業をなしをへて耳を澄ませば日暮しの鳴く
満天の星を仰ぎて明日よりの集ひの幸の多かれと祈る

○

既知の友未知の友らのへだてなく集へる外庭に朝日影さす
四百まり二十の若人もろともに仰ぐ日の丸日本の旗
さはやかに所感を述べて体操の指導する友の姿清しも

○

事務局の幼き友も夜更けまで輪転機まはし歌稿をつくる
いそがしく仕事しつつも睦みあふ幼き友らの姿愛しも

雲仙の仁田の山路ふみわけて陛下の歌碑を友とたづぬる

大岩にうちきざまれし碑文いしごみは野岳路の辺に建ちてありけり

夏草の茂みにかくれし碑文は文字もさだかに読みがたきかな

碑文を詠みあげをれば山鳥の声きこえて心すがしも

九州大学病院循環器内科・医師 小柳左門

窓の辺の床に臥しつつ見上げたる空にあまたの星の輝く

冴えわたるあまたの星のその中にひときは明き星の輝く

町にては見えぬ銀河のしるけくも輝く星空あかず眺めつ

(以上 吉田哲太郎・山田輝彦選)

あ　と　が　き

「学問と人生と祖国を語らう」——この数年間、合宿教室のポスターにはこの言葉がくりかへし記されてゐる。私達のねがひはすべてこの言葉に集約されてゐるのだが、そこにこめられてゐる意味は決して単純ではない。学問について、人生について、或は国家について、人々は多くのことを語る。しかしそこで語られる言葉は、おのれの人生といかに遊離してしまつてゐるか。学問も人生も祖国も、それらを自らの内なるものとして、かけがへのない愛惜のおもひの中で語る人がいかに少ないか。そして又、学問と人生と祖国とを、別つことの出来ない一つのものとして自らの内心に統一せしめむと努める者がいかに少ないか。それを思へばこのポスターのことばの意味するものもわかつていただけると思ふ。

学問は言葉をもって語られるのだが、その言葉は学ぶ人自らの人生と不可分のものであり、学問に携はる人の人生そのものが、その言葉の中に表現されてゐなければなるまい。それが日本の教学の伝統であり、その伝統の中で、私達の祖先はすべて自らの心を養つてきた。だがかかる伝統が日本の精神の風土から失はれて久しく、現在では学問とは一つの体系をまとめ上げるための概念操作の手つづきになつてしまつた。

かくして本来みず／＼しかるべき青年の心は、学校に学べば学ぶほどその精気を奪はれ、教育界には砂漠のやうなむなしさがひろがりつつあるといつても過言ではない。この索漠とした思想界、教育界の空気をいかにして打開し、潑刺とした学問の世界をいかにしてその下から萌え出さしめるか、われわれがとりくむべ

き課題のすべてはそこにあると言へやう。

毎年行はれてゐる合宿教室の記録を、「日本への回帰」と題して、すでに九集に及んだが、日本の心のふるさとに帰るといふことは、具体的には、祖国日本の次代を背負ふ青年の胸に、かかる真の学問の伝統を蘇らしめることであることを肝に銘じておきたいと思ふ。

○

今年の合宿教室は八月三日から七日まで、霧島国立公園の霧島ホテルにおいて開催、講師には、前年度にひきつづいて木内信胤に御登壇いただくほか、昭和四十五年以来、ふたたび小林秀雄先生（合宿教室に御出講いただくのは四度目）をお迎へ出来ることになった。小林先生の演題は「信ずることと考へること」。六月十日から受付を開始するが、参加希望者は、七月十日までに東京都中央区銀座七の十の十八、柳瀬ビル内の社団法人国民文化研究会あてに申し込んでいただきたい。

昭和四十九年三月八日

山田輝彦
小柳陽太郎

社団法人 国民文化研究会関係図書目録

A 先師・先輩の遺著

書名	著者・編者	発行年月日	版・頁数	定価
聖徳太子の信仰思想と 日本文化創業 (増補再版本)	黒上 正一郎	四四・一〇・一五 (現在四版)	A5判 三〇四頁	〒一、八〇〇円 一、四〇〇円
憂国の光と影 ―田所広泰遺稿集―	小田村寅二郎編	四五・三・一〇 (在庫ナシ)	B6判 五〇一頁	非売品

B 国文研叢書(新書判)

No.	書名	著者・編者	発行年月日	頁数	定価
1	古事記のいのち ―改訂版―	夜久 正雄	四一・三・二五 (原 版) 四八・一一・一 (改訂版)	三〇七頁	〒七〇〇円 二二五円
2	日本精神史鈔 ―親鸞と実朝の系譜―	桑原 暁一	四一・一一・二五 (在庫ナシ)	二七九頁	非売品

11	10	9	8	7	6	5	4	3
<p>続 日本精神史鈔 —花山院とその系譜—</p>	<p>欧米名著邦訳(明治)集 —文献資料集—</p>	<p>歴史と人生観 —マルクス主義の超克—</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近代その二)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近代その一)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近世その二)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(近世その一)</p>	<p>日本思想の系譜 —文献資料集(古代・中世)</p>	<p>弁証法批判の歴史</p>
桑原 暁一	小田村寅二郎編	川井修治	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	小田村寅二郎編	高木 尚一
四五・一二・二五	四五・三・二〇	四三・三・一五	四四・三・二五	四四・三・二五	四三・一〇・一	四三・二・一	四二・三・二五	四二・二・二五
三一〇頁	四八三頁	二八三頁	三八一頁	四〇三頁	四〇九頁	三二七頁	三〇九頁	二四一頁
非売品	〒五〇〇円 一圓	〒六〇〇円 一圓	〒四〇〇円 一圓	〒四二〇円 一圓	〒四二〇円 一圓	〒三二〇円 一圓	〒三二〇円 一圓	非売品

15	14	13	12
白村江の戦 ―七世紀・東アジアの動乱―	ヨーロッパにおける マルクス主義批判論集	短歌のあゆみ ―続「短歌のすすめ」―	短歌のすすめ
夜久正雄	桑原暁一編	山夜田久輝彦	山夜田久輝彦
四九・一・一〇	四八・二・一〇	四六・二・一	四六・四・一
二八九頁	三二八頁	三一六頁	三〇九頁
	〒五〇〇円 二二五円	〒三五〇円 二二五円	〒五〇〇円 二二五円

C 「合宿教室」レポート

(2)	2	1	回数
岡山	福岡 (一二七名)	霧島 (九二名)	開催地 (人員)
32	32	31	年
民族復興の根底を培うもの	民族自立のために	混迷の時代に指標を求めて	書名
木下尚一 高木彪・石村暢五郎	竹山道雄・高山岩男 浅野晃	広田洋二・日下藤吾 夜久正雄	主要講師
一新書判 一一三頁	A5判 五三頁	A5判 八八頁	版・頁数
一〇〇円	五〇円	一五〇円	定価

11	10	9	8	7	6	5	4	3
雲 (二四〇名) 仙	別府・城島 (二一五名)	桜 (二〇二名) 島	雲 (二〇二名) 仙	阿 (二一五名) 蘇	雲 (二〇八名) 仙	雲 (二〇〇名) 仙	阿 (一六〇名) 蘇	佐 (七二名) 賀
41	40	39	38	37	36	35	34	33
日本への回帰 ―第二集―	日本への回帰 ―第一集―	新しい学風を興すために ―第三集―	新しい学風を興すために ―第二集―	新しい学風を興すために ―第一集―	続々 国民同胞感の探求	続 国民同胞感の探求	国民同胞感の探求	民族の明日を求めて
戸田 信胤 福田 恆存・木内 信胤	岡内 信胤 木内 潔・花見 達二	小林 秀雄・広田 洋二 木内 信胤	竹下 道雄・木内 信胤 木下 広居	福田 恆存・木内 信胤 黒岩 一郎	小林 秀雄・木内 信胤 津下 正章	木内 信胤・花田大五郎 佐藤 慎一郎	花田大五郎・中山 優 野口 恆樹	勝部 真長・木下 彪 森 三十郎
三新書判 二一〇頁	二新書判 二九五頁	二新書判 二九八頁	二新書判 二九八頁	二新書判 二四八頁	B 6判 三二五頁	B 6判 四三三頁	B 6判 三六五頁	二新書判 二五〇頁
〒三〇〇円 二一五円	〒三〇〇円 二一五円	〒三〇〇円 二一五円	〒三〇〇円 二一五円	〒二〇〇円 二一五円	〒五〇〇円 二一〇円	〒五六〇円 二一〇円	〒五〇〇円 二一〇円	二〇〇円

17	16	15	14	13	12
阿 (四〇二名)蘇	霧 (三〇二名)島	雲 (四九一名)仙	阿 (四〇三名)蘇	霧 (三五三名)島	阿 (三三六名)蘇
47	46	45	44	43	42
日本への回帰 ―第八集―	日本への回帰 ―第七集―	日本への回帰 ―第六集―	日本への回帰 ―第五集―	日本への回帰 ―第四集―	日本への回帰 ―第三集―
木内 信胤・胡 蘭 成 山本 勝市	木内 信胤・戸田 義雄 村松 剛	小林 秀雄・木内 信胤	岡下 潔・木内 信胤 木下 道雄	竹山 道雄・高谷 覚蔵 木内 信胤	林内 房雄・太田 耕造 木内 信胤・山本 勝市
新書判 三〇六頁	新書判 三二二頁	新書判 二六五頁	新書判 二九五頁	新書判 三二四頁	新書判 三〇七頁
三〇〇円 二二五円	三〇〇円 二二五円	三〇〇円 二二五円	三〇〇円 二二五円	三〇〇円 二二五円	三〇〇円 二二五円

D 「合宿教室」感想文集（非売品）

（国民同胞感の探求三部作は「理想社」より刊行）

第十回 「合宿教室」参加者感想文集 三一五名	書名	編者	発行年月日	版・頁数
		国民文化研究会編	四〇・一〇・二〇	A5判 八〇頁

第十一回	「合宿教室」参加者感想文集	二四〇名	国民文化研究会編	四一・一〇・五	A5判 一〇四頁
第十二回	「合宿教室」参加者感想文集	三三六名	国民文化研究会編	四二・一一・五	A5判 一二〇頁
第十三回	「合宿教室」参加者感想文集	三五三名	国民文化研究会編	四三・一〇・一〇	A5判 一八頁
第十四回	「合宿教室」参加者感想文集	四〇三名	国民文化研究会編	四四・一〇・二〇	A5判 一三六頁
第十五回	「合宿教室」参加者感想文集 —現代知性への警鐘—	四九一名	国民文化研究会編	四五・一〇・三〇	A5判 二一八頁
第十六回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	三〇二名	国民文化研究会編	四六・一一・一〇	A5判 一二六頁
第十七回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四〇二名	国民文化研究会編	四七・一〇・三〇	A5判 一六四頁
第十八回	「合宿教室」参加者感想文集 —日本人としての自覚をもとめて—	四三三名	国民文化研究会編	四八・一〇・二〇	A5判 一七七頁

E 海外派遣レポート (非売品)

書名	編者	発行年月日	版・頁数
日韓・海と河の交流 (日韓交流レポート)	浜田 収二郎	四三・六・一	A5判 一二二頁
香港・マニラ・ミンダナオ巡訪団 レポート	浜川井 修治 田 収二郎	四四・一一・二九	A5判 八〇頁

F その他

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
歌よみに与ふる書・他四編	正岡子規 (国民文化研究会発行)	新書判 一二二頁	一五〇円 一五五円
天皇と天皇制についての基本的思考	小田村寅二郎・夜久正雄 (斑鳩会発行)	新書判 一〇七頁	(品切)
今上天皇御歌解説 (附) 万葉集論	三井 甲之 (斑鳩会発行)	新書判 一五七頁	二三〇円 一七〇円
明治・大正・昭和 「謹選 詔勅集」	(斑鳩会発行)	新書判 八五頁	二三〇円 一七〇円

式典曲「神洲不滅」
 行進曲「進めこのみち」

三井甲之作詞
 時潔作曲
 日本学生協会の歌
 A、5頁判
 各一〇〇円
 各五〇〇円

G 関係図書

書名	著者・発行者	版・頁数	定価
新編 日本思想の系譜(上・下) <small>—文献資料集—</small>	小田村寅二郎編 <small>(時事通信社)</small>	A 5頁判 <small>(上)八五七頁 (下)九一二頁</small>	上・下各 三、〇〇〇円
日本思想の源流 <small>—歴代天皇を中心に—</small>	小田村寅二郎 <small>(日本教文社)</small>	四 六頁判 三〇五頁	七〇〇円
THE KOJIKI IN THE LIFE OF JAPAN <small>(国文研叢書 No. 1 「古事記のこゝち」の翻訳)</small>	(訳者)G. W. ROBINSON <small>[THE CENTRE FOR EAST ASIAN CULTURAL STUDIES]</small>	B 6頁判 二〇八頁	
歴代天皇の御歌 <small>—初代から今上陛下まで二千首—</small>	小田村寅二郎 小柳陽太郎 <small>(日本教文社)</small>	四 六頁判 四三八頁	一、七〇〇円 一、四〇〇円

H 月 刊 誌

誌 名	創 刊 ・ 号 数	版 ・ 頁 数	定 価
月刊 「國民同胞」	昭和三十六年十一月創刊 昭和四十九年三月現在一四九号	B 5 八頁判	年間七〇〇円 〒 共

1 (分科会) ・ 教育内容は正促進委員会編著

書 名	発 行 年	版 ・ 頁 数
現下の学校教育の内容を正すために急務を要する問題点	四十七年十二月	B 5判・二五頁

— 日本への回帰 —

(第9集)

昭和四十九年三月二十七日発行

定価 五〇〇円

〒 一一五円

編者

大学教官有志協議会
社団法人 国民文化研究会

編集委員代表

小田村 寅二郎

発行所

社団法人 国民文化研究会

東京都中央区銀座

七一〇—一八柳瀬ビル

振替 東京 六〇五〇七番

落丁・乱丁のものはお取り替えます

